



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

神をあがめ、賛美しながらこの一年過ごそう

新年明けましておめでとうございます。新しい年を、どのような形で始めるかはとても大切です。

いろいろな新年の迎え方があるでしょう。ある人々は太陽を拝んで新しい年を始めます。ある人々はお祓いを受けます。ですがわたしたちカトリック信者は、神の母聖マリアをたたえるミサに参加して新しい年の始まりを迎えます。

新成人を迎える方々もおられるでしょう。人生の節目や、記念日を今年迎える人もいます。そうしたすべての人が拝むべきもの、受けることのできる恵みが、ミサに集まったこの場所にあります。そしてわたしたちはそのことを知っているのです、こうして集まっています。

福音朗読は、羊飼いたちが天使に告げられた幼子を探し当てる場面が選ばれました。羊飼いたちが見たのは、単に飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子ではありませんでした。天使が話してくれたことが出来事になっているという、人間では成しえない神の業を見たのです。

ですから羊飼いたちは、人々にこのことを知らせました。み使いの話したことが出来事になっているということは、救い主が生まれた、人間の救いが目の前に現れたということです。すべての人が待ち望んでいたことが実現した。こんなに喜ばしいことはありません。

ところが聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思うだけでした。話を聞いた人々は、マリアという女性から生まれた幼子は理解できましたが、幼子誕生という表面的なことしか受け入れることができなかったのです。

神の救いの約束が、貧しい夫婦を通して実現したとか、救い主が家畜小屋で飼い葉おけに寝かされた状態でおられるとか、それを知らせているのが羊飼いですとか、さまざまな事情が聞く人の心を曇らせ、理解を妨げたのかもしれない。

しかしマリアは、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2・19)とあります。羊飼いたちが見たものを、マリアも見ました。すなわち、天使が話したことが、出来事となって実現したということ、そして羊飼いたちが、自分たちが見たことをためらうことなく人々に知らせたことです。神の救いは驚くべき形で始まり、必ず人々に知られていくのです。

羊飼いたちの最後の行動にもう一度目を留めましょう。「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(2・20)とあります。「神をあがめ、賛美しながら帰って行った」とは、生活の中でこれからも神をあがめ、賛美するということです。

羊飼いたちの行動を見て、マリアの賛美の歌を思い出しました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」

(ルカ 1・47) マリアも、神の驚くべき御業を理解した時に神をあがめました。洗礼者ヨハネの父ザカリアも、生まれた子にヨハネと名を付け、話すことができるようになったときに真っ先に神をたたえました。

羊飼いやマリアも、この一年をどのように過ごすのかお手本を示していると思います。わたしたちは教会に集まってミサにあずかり、神がわたしたちの救いのために独り子を与えてくださったことを見ています。

神の言葉が出来事となり、神が与えることのできる最上の恵みが人類に与えられました。わたしたちは出来事となったこの神の言葉を持ち帰り、自分たちが帰っていく生活の真ん中で神をあがめるよう期待されているのです。

わたしたちの日常生活はさまざまな形を取っています。ある人はいちばん長くいる生活の場所が危険と隣り合わせの場所かもしれません。ある人はいちばん長くいる場所は愛する家族かもしれません。ある人は常に結果を求められる場所で長く時間を過ごしているかもしれません。

それぞれの生活の真ん中で、羊飼いやがしたように今日確認したものを告げ知らせしてほしいと思います。すなわち神の言葉は出来事となったということ、この人となった神の言葉は恵みを与えてくれるということ。そして聞いた人々が信じるなら、同じ恵みにあずかることができるということです。

今日は一月一日、神の母聖マリアの守るべき大祝日です。わたしたちは教会に来て、ミサにあずかって一年を始めました。ここで見て確かめたことを、生活に持ち帰り、証ししていく一年としましょう。「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりでだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(2・20) この生き方を取り入れましょう。

証しをするにあたって、わたしの生活にあてはめると、どのような方法が可能なのか、神の母聖マリアに倣い、思い巡らすことにしましょう。出来事をすべて思い巡らそうとするとき、必要な助けはきっとマリアが一年を通して神に取り次いでくださいます。

主の公現(マタイ 2:1-12)



主の公現(マタイ 2:1-12)

学者たちはひれ伏して幼子を拝んだ

主の公現の祝日を迎えました。幼子イエスを拝む占星術の学者たちから、わたしたちの日々の生活を振り返り、証しを立てるヒントを得ることにいたしましょう。

初夢についていろいろネット上で調べると、諸説ありました。大晦日から正月一日にかけて見る夢、正月一日の夜に見る夢、正月二日の夜に見る夢の三つの説があるようです。その中で支持されているのは正月一日の夜に見る夢だそうです。わたしが見た夢は大晦日の夜に見た夢でしたが、びっくりして起きたのですから確実に大晦日を過ぎていました。

主の公現は、東の国からやってきた占星術の学者たちの礼拝によって、主の降誕が広く諸国に知られることになった出来事です。学者たちの訪問は、ユダヤ人の王がお生まれになったことを内外に知らせるきっかけとなりました。

彼らはまずヘロデ王に会いに行き、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」(2・2)と自分たちの訪問の理由を明らかにします。これで、ユダヤ中に出来事が知られることとなりました。

また幼子イエスを礼拝した学者たちは、当然自分たちの国に帰国してから幼子のことを人々に告げ知らせるでしょうから、自分たちのいる国でも話題になります。占星術の学者たちの登場は、ひっそりとお生まれになった救い主を一変させたわけですから。

占星術の学者たちは母マリアと共におられた幼子イエスをひれ伏して拝み、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。学者たちは突き詰めると、何をしに幼子イエスのもとに来たのでしょうか。わたしは、「ひれ伏して拝むために」来たのだと思います。

贈り物を献げるだけでしたら、遣いの者に持たせて運ばせることができたでしょう。けれども、ひれ伏して礼拝をささげるのは本人たちが出向くのでなければ意味がありません。代理の人間ではなく、本人たちが礼拝をささげることで、ひれ伏して拝む価値は最上のものになります。

曲がりなりにも学者と呼ばれる人が幼子の前にひれ伏すのですから、このしぐさは特別のことと言わなければなりません。権威を振りかざすヘロデ王の前でもきつとひれ伏してあいさつしたでしょうが、同じ学者が、何も持たない、幼子にすぎないイエス・キリストの前にひれ伏す姿はいっそう荘厳に見えます。ひれ伏しても何も与えてもらうことはないと分かっている、彼らは幼子の前にひれ伏したのです。

幼子イエスの前に進んで身をかがめる占星術の学者たちと、幼子のことを嗅ぎまわるけれども決して身をかがめないヘロデ王とその一味は、明らかに比較されています。

この対比は、わたしたちに決断を迫っているのです。あなたは、幼子イエスの前に進み出て、喜んで身をかがめますか。それとも、幼子の

ことを詳しく聞いたのに、それでもイエスの前に身をかがめないのですか。わたしたちが取るべき態度は明らかです。

ではわたしたちはどのように、占星術の学者たちの態度に見習えばよいのでしょうか。学者たちは2つの態度を取りました。1つは、公の人の前で、自分の信じている方、礼拝をささげるべき方がこの世におられると表明したのです。もう1つは、いよいよその方の前に来た時に、進んで身をかがめたのです。

わたしたちも、占星術の学者の取った態度に見習う必要があります。公の人、公の場で、自分が信じている方、礼拝をささげるべき方がこの世におられると、立派に表明してほしいと思います。いつその場面が巡ってくるか、それをこちらから選ぶことはできませんが、その機会が巡って来たとき、それがどんな場所であっても、信じている方、礼拝をささげるべき方を覆い隠したり言葉を濁したりしてはならないのです。

もう1つ、いよいよその方の前に来た時に、わたしたちは進んで身をかがめます。その具体的な場所はわたしたちの教会です。ここではただお一人の方、イエス・キリストにすべての人が身をかがめます。ここにいるわたしたちは皆、だれも身分の上下を問われず、ただイエスの前に身をかがめる人かそうでないかだけが問われるのです。羊飼いや、東方から来た学者も、だれも身分を気にすることなく、幼子イエスの前に自分を明け渡したのです。

その際、贈り物を献げた学者たちのように、自分を表す何かをイエスの前に献げることはたいへん賢い生き方です。感謝・賛美・礼拝・嘆願などを表そうとここに集まっているのですから、わたしの思いを表す何かをお献げしましょう。

最後に、学者たちに示された夢のお告げに目を留めましょう。「ヘロデのところへ帰るな」(2・12)というお告げでした。もしも学者たちがヘロデのもとに帰ると、信じる方ではなく、権力者にひれ伏すことになります。彼らにはもはやひれ伏す方はただお一人しかいないのです。

わたしたちもそうです。わたしたちがひれ伏す方はただ一人です。その生き方を決して曲げてはいけません。権力を振りかざす人の前でひれ伏しません。富や悪に流されてひれ伏したりしません。ただイエス・キリストにだけひれ伏してこの人生を全うします。

占星術の学者たちは、星の導きによって真の礼拝をささげる相手を見だし、生涯その生き方に留まりました。わたしたちを照らす星は聖霊だと思えます。聖霊に導かれて、イエス・キリストお一人を礼拝し、イエス・キリストお一人に身をかがめて生きることができるよう。このミサの中で恵みを願うことにしましょう。



主の洗礼 (マルコ 1:7-11)

イエスの洗礼は十字架による救いの先取り

主の洗礼の祝日を迎えました。イエスが受ける洗礼は、よくよく考えるとイエスの十字架上の死とつながっていると思います。そのことを踏まえて、選ばれた朗読箇所から今週の学びを得ることにしましょう。

皆さんの中で長崎新聞を購読している方もおられると思います。1月7日の長崎新聞 11面に、教師生活 41年の経験を一冊の本にまとめた方の記事が載っていました。この方がだれか、写真ですぐに分かりました。わたしが小学6年の時の担任の先生でした。当時からすると 36年の歳月がお顔に刻まれていましたが、先生だとすぐに分かりました。

掲載された記事の内容はわたしにはどうしてもよいことですが、先生と当時のわたしのことを話しておきたくて、紹介することにしました。わたしは小学6年生の時に警察に補導されたことがあるのですが、先生のおかげで立ち直ることができました。どんな事件を起こしたかはいろんな関係者に迷惑がかかるので話せませんが、この先生が担任でなかったら、わたしの未来は閉ざされていたかもしれません。

わたしは小学校を卒業して長崎南山中学を受験し、同時に神学校に入学しました。当然、南山中学校にはわたしについての内申書が届いていたはずですが、内申書に不利な内容が書かれていれば、いくら試験に合格しても入学を許されるはずがありません。

今思うと、入試に不利にならないように、担任の先生は手を尽くしてくれたのではないかと思うのです。すべてをありのまま内申書に書いたとしても、この子は本当はどんな子で、必ず立ち直る生徒だと、言い添えてくれていたのかもしれない。

しかし当時のわたしは世間知らずで、試験を受け、全体の5番目の成績だったのだから合格するのは当たり前と、先生にあとでお礼を言うこともなかったし、卒業しても一度も先生に連絡をすることもありませんでした。自分が助けられたという実感を持ったのも、今回の新聞記事を何度も読み返して初めて感じたことでした。

今になって先生に助けてもらっていなかったらと思うとぞっとします。わたしは居ても立ってもいられず、先生の住所を調べ、当時のことを振り返りながら生まれて初めて手紙を書きました。先生の返事をまだいただいておりませんが、もしわたしが何も行動を起こさなかったとしても、もっと言うと先生が死ぬまで何も行動を起こさなかったとしても、先生はすべてを背負ってこの世を旅立っていったかもしれません。

わたしはこの先生の潔さと言いますか、懐の深さを今になってようやく理解しました。未来ある子どものために、すべての責任を担って庇ってくれて、もしそのことに本人が気づかなくても、黙って一人でそれを背負って人生を全うする。こんな先生に当時教えていただいていたのだと、あらためて感謝の気持ちがわいてきたのです。

本当に個人的なことで、長々と話してしまいましたが、イエスが洗

礼を受けた場面をあらためて読み返して、イエスがどれだけの決意を持って洗礼を受けたのかを、この先生との思い出が教えてくれたのです。

ヨハネが授けていた洗礼は、悔い改めの洗礼でした。イエスに悔い改める理由はどこにもなかったのですが、全人類の悔い改め、全人類の救いを担う決意の表れとして、イエスはヨハネから洗礼を受けたのです。

ヨハネは洗礼を望む人をヨルダン川の水に沈めて洗礼を授けていました。「水に沈める」とは「死」を意味します。イエスは自分がいったん死んで、すべての人の罪を背負うことを表そうとしていたのでしょう。イエスが「水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来る」(1・10) そのありさまは、イエスのなさろうとする救いの計画が完全に御父と聖霊の心に適っている証拠だったわけです。

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(1・11)

わたしは初めに、イエスの洗礼と十字架上の死とはつながっていると話しました。イエスはヨハネの洗礼によって受けた霊を、十字架の上で御父にお返しになっています。ルカ福音書によると「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ 23・46) とあって、すべての人の罪を担うイエスの洗礼は、十字架上の死によって完成したのです。

わたしたちの洗礼は、イエスによって始まった「聖霊による洗礼」(マルコ 1・8 参照) です。そうであれば、わたしたちが受けた洗礼は、罪に死に、イエスに生きる生活の始まりのはずです。そしてそれは、わたしたちが霊を父なる神に返す時に完成される長い旅の始まりなのです。

わたしたちも人生を終えるとき、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と声を上げて人生を終わります。このときわたしたちが受けた洗礼は完成されます。

もしも、罪に死に、イエスに生きたわたしたちのキリスト者としての人生がだれにも評価されずだれにも知られず、もしかして嘲笑の的となったとしても、わたしたちは言い訳を用意したり弁解する必要はありません。わたしたちのキリスト者としての生き方が人生のどの時点でも理解されなかったとしても、それでもあなたはキリスト者としての人生を黙って担って全うする。それだけの価値が十分あります。わたしに今回そのことを気づかせてくれたのは小学校時代の恩師です。

皆さんが洗礼の時に罪に死に、キリストに生きると決めたその人生、何十年生きてもそれでもキリストを知らない人に理解されないかもしれませんが、ただしそれでも生きる価値があるのです。なぜなら、キリスト者として人生を全うした時、洗礼を受けて新しくされた人生は必ず完成するからです。

イエスは洗礼を受ける姿を示しながら、わたしたちを同じ生き方に招いています。罪に死に、御父の御旨に生きるわたしの姿に倣いなさい。わたしが必ずあなたの人生を完成させます。イエスはそう招いています。イエスの洗礼の姿を見つめながら、わたしのキリスト者としての人生を全うする。そのための恵みを、ミサの中で願い求めましょう。



年間第 2 主日 (ヨハネ 1:35-42)

キリストにとどまる、その生き方を伝える

説教に入る前に、昨日 1 月 17 日は阪神大震災 20 年目の日でした。今も震災の影響を受け続けている人がいます。災害を経験した人にもイエスがそばにいてくださり、今ここに踏みとどまって生きる理由と勇気が与えられるように、合わせて祈ることにしましょう。

典礼暦は降誕節を終えて灰の水曜日から始まる四旬節までの約 1 ヶ月間、短い年間の季節が挟まれています。年間第 2 主日から年間第 6 主日です。年間の典礼で着用する祭服は緑です。

祭服と言えば、叙階当時に仕立てたわたしの祭服 4 着は、すでに 22 年の時が経過し、傷みが目立つようになってきました。以前白の祭服を補修してもらうために長崎の愛宕にある女子修道院にお願いしましたが、今回緑の祭服を同じように補修してもらうために送りました。

今日わたしは略式の祭服に緑のストラをかけてミサに臨んでいますが、ふだんカズラと呼ばれる盛装でミサをささげている時と比べると、どこか落ち着きません。早く補修から帰って来て、いつものカズラを着用してミサをささげたいものです。

年間第 2 主日の福音朗読として、最初の弟子たちが選ばれる様子が用いられました。あらためて読み返すと、最初の弟子の姿に弟子のあるべき姿が描かれていると思いました。この点を押さえながら、今週の学びを得ることにしましょう。

洗礼者ヨハネのもとで学んでいた二人の弟子が、「見よ、神の子羊だ」というヨハネの言葉を聞いて、イエスに従いました。この二人は、ヨハネの「声を聞いて」イエスに従ったのです。

出来事を「見て従った」と記録していたら、見ることでできる人は限られてしまいます。けれども「聞いて従った」のであれば、多くの人が弟子に招かれることができます。イエスの弟子になる人の姿にある一つの特徴は、「聞いて従う」ということでした。

次に、イエスに従おうと決めた二人は、「どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった」(1・39)とあります。さきほどの「聞いて従った」と同じ考え方に立てば、「泊まることでできた人は限られている。わたしたちは泊まれないではないか」と考えるかもしれません。

しかし、日本語で「泊まる」と訳された言葉は、「とどまる」ことをも表す言葉で、自分のとどまるべき場所を見いだした人がそこにとどまる様子を表すそうです。「わたしが居るべき場所はここだ」そう感じてそこから離れないという意味であれば、多くの人実践できます。

最後に、イエスに従った二人のうちの一人アンデレは、自分の兄弟シモンに会ってイエスを紹介しました。「わたしは自分が居るべき場所を見つけた。あなたにもその人を知ってほしい。」そうやって自分が確信したことを自分だけでしまっておかずに、新しい人に知らせたのです。

アンデレの言葉を聞いて、シモンもイエスに従う人になりました。

最初の弟子たちの3つの特徴を拾ってみました。聞いてイエスに従ったということ、自分がとどまるべき場所はここだと確信すること、自分の確信を他の人に告げ知らせることです。弟子のあるべき姿が、この3つにうまくまとめられていると思います。わたしたちがこの3つを生活の中に取り入れるなら、わたしたちも確かにイエスの弟子なのです。

ところで、弟子のあるべき姿で取り上げた3つの特徴は、初めて見聞きするのでしょうか？そんなことはないと思います。知らないうちに、この3つの特徴はいろんな場面に取り入れられ、中には間違っただ行動をする人の中にも取り入れられているのです。

間違っただ行動の例を1つ挙げましょう。ネズミ講と言われる商売に組み入れられた人たちです。彼らは与えられた商品の素晴らしさをたたき込まれ、実際には価値のない商品かもしれないのに、それを友人知人にも次々に契約させます。

より多くの客を連れて来ると、自分にも報酬が回ってくるのですが、それは友人知人、見知らぬ人を勧誘して入ったお金を上層部が自転車操業で回しているだけなのです。最後には商品を契約させた自分も、誘われた友人知人も、不幸な目に遭うことになります。

この仕組みの商売にも、3つの特徴が織り込まれています。魅力的なことを聞かされて言われるままに従い、これは素晴らしい、この商品でバラ色の人生になると思い込んで人生までもつぎ込み、新しい人を連れて来るのです。ただしそこにはイエス・キリストがどこにもいないので、幸せな未来は訪れないのです。

最初の弟子に見られた3つの特徴が、実は社会のいろんな場面に巧妙に取り入れられています。けれどもその多くはわたしたちから利益をむしり取るものだったり、単にやる気を起こさせるものだったりするのです。イエス・キリストがそこにいなければ、わたしたちを本当の幸せに導くことはないということです。

ある意味、21世紀の現代にこそ、イエス・キリストの真の弟子の存在価値が増していると思います。わたしたちが毎日の生活でイエスの招きに聞き従い、自分に幸いをもたらしてくれる場所、自分がとどまるべき場所はイエス・キリストだと確信し、それを人々に告げ知らせる。このように生きる人が、今こそ必要になっているのではないでしょうか。

「幸せになれる、豊かになれる、生き生きと暮らせる。」そう誘われた人の状態が前よりも悪くなる。そんなことが今日常のように起こっています。そんな中で、わたしたちの生き方は価値ある生き方です。輝きを失わない生き方です。イエスの言葉に耳を傾け、イエスこそとどまるべき場所であると確信し、自信を持って告げ知らせましょう。今こそわたしたちの生き方は人々に発見されなければならないと思います。



年間第 3 主日 (マルコ 1:14-20)

わたしについて来なさい

年間第 3 主日を迎えました。福音朗読はガリラヤで伝道を始め、四人の漁師を弟子にする場面です。イエスの宣教活動の始まりです。ガリラヤ湖のほとりで声を響かせるイエスに心躍らせ、イエスに従っていく今週一週間が始まります。

先週わたしはとある食事の席に顔を出しまして、くだらない話と云うか、くだる話と云うか、そういうレベルの話をしました。最初は招待していただいている席なので話を聞く側に回っていたのですが、なんとなくお魚の話とか、釣りの話とかになったので、ここは話してよい場面かなと思い、最近のとおきの話をしました。

わたしは腸が弱いため、冷たい牛乳を飲むとすぐにお腹をこわしてしまう傾向があります。張り切って釣りに行ったその日、朝ご飯と一緒に牛乳をコップ一杯ひっかけて出発したのです。

そしてその 30 分後、お腹がゴロゴロしました。司祭館に戻る余裕もない緊急事態です。後のことはご想像にお任せしますが、緊急事態の結論の部分まで、会食の席で洗いざらい話をしたのです。

もはや司祭と信徒という関係ではない話を打ち明けたわけですから、話を聞いた人が気を悪くするかもしれないと思いました。ですが意外にも笑い飛ばしてくれたのです。牛乳を飲んで 30 分後の話を受け止めてくれる人もいるのだなあと思い、ホッとしました。

皆さんの多くは「そんな話は聞きたくない」と思っているでしょう。ただ、生身の人間の上に中田神父は成り立っておりますので、くだらない部分も含めての中田神父を評価してほしいと思っています。「こんなくだらない部分もあるけれども、浜串小教区のために働けるうちは働いてもらいましょう。」こういう評価をわたしは期待しております。

今週の福音朗読でわたしの心に響いたのは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(1・17) というイエスの言葉です。イエスが声をかけた人々は、最終的にイエスの十字架上の死と、復活の出来事まで目撃することになります。

イエスが「わたしについて来なさい」と声をかけたとき、どこまで心の中に考えがあったのでしょうか。病気をいやし、死者を生き返らせ、五千人の人々にパンを食べさせ、会堂で権威ある言葉を話す。それらをイメージして「わたしについて来なさい」と呼びかけたのでしょうか。

それだけではない、と思います。イエスのご自分の生涯のすべてをすでに思い描いた上で、最初の弟子となる四人の漁師に声をかけたと思っています。つまり「あなたたちはすべてを見ることになるが、それでもついて来てくれるか？」という呼びかけだったと思うのです。

イエスは十字架の上で最期を迎えます。それは逃げ出したくなるようなみじめな場面です。実際に弟子の多くはその場にとどまることができませんでした。最後までそばにいたのは愛する弟子ヨハネだけでした。

ある時は嵐の中を弟子たちが舟を漕ぎ悩み、眠っているイエスを起こして「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」（マルコ 4・38）となかばイエスに呆れています。また別の場面でイエスは怒って人々を見回し、ファリサイ派の人々や群衆のかたくなな心を悲しみながら（同 3・5 参照）手の萎えた人をいやします。

イエスのご生涯は、御父にひたすら心を合わせて祈り、権威ある言葉を語り、奇跡を行うだけではありません。怒ったり、弟子たちにとって肝心な時に眠っていたり、惨めだったりしたのです。それらすべてを見ることになると分かっていた上でイエスは、「わたしについて来なさい」と呼びかけた。わたしはそう考えたいのです。

同様に、イエスが最初に声をかけたのは一介の漁師でした。ですから、イエスの呼びかけは「あなたたちが漁師であることは百も承知だ」この前提に立っていたはずです。イエスのご自分のすべてをさらけ出すことになるのを前提に、そして呼びかける人々にはその素性を百も承知で、「わたしについて来なさい」と呼びかけたわけです。

さらに踏み込んで考えてみましょう。イエスが、「わたしについて来なさい」と呼びかけ、その呼びかけを自分に向けられたものだと感じ、すべてを捨ててついて行く生き方があります。たとえばそれは司祭召命とか修道者の召命ですが、イエスに徹底的について行くことで、いつかは自分に出番が回ってくるかもしれません。

つまり、イエスに従いたいと希望する子供たちや青年男女が現れ、ついにわたしにも、「わたしについて来なさい」と声をかける順番が回ってくることもあり得るわけです。もちろん「わたしについて来なさい」と呼びかけるのは、あくまでもイエスに徹底的に従う姿をわたしが示しながらということなのです。

もしもわたしに順番が回って来たとき、どんなことを思うでしょうか。「いやいやわたしはイエスさまではないし、奇跡も行わない。だから声をかけるなんてとんでもない」と考えるのでしょうか。わたしは、自分が不完全なものであることは百も承知で、もし大役が回ってきたと感じるなら、臆することなく「わたしについて来なさい」「わたしの弟子になりなさい」と声をかけるべきではないかと考えます。

その人にはくだらない部分があるかもしれません。けれども、そんなつまらない人間の上に、徹底的にイエスに従う日々を積み重ねてきたのであれば、その生き方を求めている人にいつかは問いかけるべきではないでしょうか。その役割はもっと立派な人がすればよいと言っていたら、とうとうチャンスを逸してしまうかもしれないのです。

「わたしについて来なさい。」イエスの言葉はわたしに向けられたものであると同時に、いつかはわたしの口からイエスの弟子になろうと望む人に語られるべき言葉だと思います。その時に備えて、「わたしについて来なさい」このみ言葉に深く分け入りましょう。わたしを通してイエスに出会える弟子が、1人でも2人でも与えられますように。



年間第 4 主日 (マルコ 1:21-28)

生活の中心にイエスが入り、そのイエスが外に語られる

年間第 4 主日です。イエスが会堂に入って教えます。人々はその権威ある教えに驚きました。イエスが会堂に入る姿から、今週のわたしたちの学びを得ることにしましょう。

個人で所有する祭服の補修が出来上がり、先週途中から着用しています。絹織物特有のごわごわした感じが何とも気持ちいいです。これが何カ月、何年かすると自分の体にぴったり合うようになって、ごわごわしなくなるわけですが、その過程がまた楽しみです。

釣りに行っていて気付きましたが、定置網の仕掛けが浜串漁港の沖合に入りましたね。早々と鯛が 50 枚近く入ったそうで、今年は幸先よい滑り出しで嬉しいです。黙想会の指導に来てくださる神父さまが話を聞いたら喜ぶでしょう。神父さまはきっとお魚も好きだと思います。黙想会の時はアジの差し入れがあればうれしいなあと思っています。

定置網と言えば、わたしも鯛を釣ったら名札を付けて釣りの帰りに定置網に放り込んでおこうかなと思いました。お父さんたちに同行して朝から引き上げて新鮮な状態でお刺身をいただけるかもしれません。でも定置網を勝手に生簀（いけす）として使えないので、要相談です。

さてイエスが会堂に入って教える様子には、重要な意味が込められています。会堂で聖書を学び、祈ることは、ユダヤ人男性にとって生活の中心となる出来事でした。

現代のわたしたちにとって会堂はこの聖堂のことですが、わたしたちの中で聖堂で過ごすことを生活の中心と考えている人はまずいないのではないのでしょうか。おそらく、収入を得るための労働が生活の中心だと考えている人がほとんどだと思います。

わたしたちはユダヤ人が思い描く背景を理解して読む必要があります。イエスが会堂に入り、教え始めます。それはつまり、彼らにとっての生活の中心にイエスが入り、教え始めたということなのです。イエスはその人にとって中心となる場所で、最も大切な場所で語ったのです。

生活の中心で語られたイエスの言葉は、「権威ある新しい教え」(1・27) と映りました。その目に見えるしるしとして、汚れた霊に命じると、霊はイエスの命令に従います。汚れた霊にとりつかれていた男は、霊を追い出してもらったことで、生活の中心である会堂で集会に参加する喜びを取り戻すことができたのです。

ここで言う「権威」とは何でしょうか。わたしたちはつい権威と言うと権威を振りかざすとか、権威をかさに着るとか、抑圧的なことを想像してしまいます。ここで「権威」とあるのは、言葉と行いが完全に一致しているさまを表します。「囚われている人に解放を与えるために来た」イエスは、汚れた霊にとりつかれている男性を解放して、言葉と行いが完全に一致していることを証明したのです。

さらに会堂で権威ある者として教えるイエスの評判は「たちまちガ

リラヤ地方の隅々にまで」(1・28) 広まりました。「隅々にまで」とあるのは単にガリラヤ地方一帯にというよりも、人々の話題に上らない場所がないほど、それこそ井戸端会議にでも話題に上るほど広まったという意味でしょう。イエスが中心で語ったこと教えたことは、その権威と力強さのゆえに生活の隅々にまで広まるのです。

ここから、何が見えてくるのでしょうか。イエスは当時の社会の中心に入って権威ある者として教え、その評判は隅々にまで広まったということです。そしてこの一連の出来事は、当時のユダヤ社会の中だけで起こるのではなく、現代にあっても起こる出来事なのです。

例を挙げましょう。本来なら本人に承諾を得るべきですが、参考になるほうの例なので、きっと許してくれると思います。わたしが浦上教会の助任司祭をしていた時、一人の大学生と出会いました。もう20年くらい前の話で正確には覚えていませんが、司祭館にやって来て、たまたま応対に出たわたしに「洗礼を受けたい」と申し出たのです。

話を聞くと、大学に通うために入った下宿の大家さんが浦上教会の信徒でした。その大家さんから「せっかくだから、朝から浦上教会のミサと一緒にいかないか」と誘われ、誘われるままに通うようになったそうです。そこから気持ちが傾いて、洗礼を受けようと思ったのです。

大学生はそれから一年近く勉強しまして、無事に洗礼を受けました。今は立派な家族がいて、わたしも毎年年賀状を交換しています。そしてこの説教も、ホームページから読んでくれているはずです。

紹介した大学生にとって、大学での勉強が生活の中心だったはずですが。たとえば大家さんが「一緒に教会に行かないか」と誘っても「嫌です」と言うこともできたはずですが。わたしが思うに、イエスは大家さんを借りてこの大学生の生活の中心に入って来られ、大学生の心の中に権威をもって語りかけ、その心を動かしたのだと思います。

一人の大学生の心の中に起こしたイエスのわざですが、今日こうして皆さんに紹介し、またこの説教がインターネット上で多くの人に閲覧されて、イエスのみわざは隅々にまで広まるのです。

現代にあって、イエスが生活の中心に入って来られ、権威ある者として教え、イエスの働きが隅々にまで広まるには、わたしたちがちょっと関わる必要があります。もちろんイエスは全能の神ですが、あえてわたしたちの手を借りることを望んでおられるのです。

たとえばそれは、大家さんが下宿人に自分の信仰を表明したように、生活の中心で「イエス・キリストを信じている」と表明することで可能です。職場でお弁当を開くとき、食前の祈りをするだけでも、生活の中心で自分の信仰を表明することになります。あとは工夫次第です。

一人ひとり生活の中心で、イエスが権威をもって教える場を作ってあげましょう。わたしたちはきっかけさえ用意すればよいのです。後はイエスが存分に働いてくださいます。わたしたちのほんのちよっとのお手伝いで、イエスの評判が社会の隅々にまで広まります。そのちよっとのお手伝いをする勇気を、今日のミサの中で願い求めましょう。



年間第 5 主日 (マルコ 1:29-39)

だれもがイエスに手を貸す人、もてなす人

年間第 5 主日に朗読されるイエスの活動は、時間に縛られず、場所も多岐にわたり、精力的に活動する様子が描かれています。イエスの宣教に触れた人々の中で、シモンのしゅうとめが目を惹きます。この、シモンのしゅうとめから今週の学びを得ることにしましょう。

いよいよ今週 10 日 (火) から 12 日 (木) にかけて、徒歩巡礼を実行に移します。去年、大浦天主堂から福岡の今村教会に向けて歩きましたが、今年はその折り返し、今村教会から大浦天主堂を目指して 3 日間歩きます。今、日程とコースを発表しました。「いつ巡礼に行くのですか」「どこを巡礼するのですか」とミサの帰りに聞かないでください。

徒歩巡礼ですから、もちろん先人たちの思いを反芻しながら巡礼するのですが、今年は他にもいろいろな思いを胸に秘めて巡礼しようと思っています。一人の女性は手術を控えています。術後の経過によっては生活が一変するかもしれません。その人のことを少し思いながら巡礼しようと思います。また一人の男性は心を病んでしまっています。その人の重荷が少しでも軽くなるために、巡礼の労苦を神さまにささげようと思います。「巡礼の苦労に勇気づけられる人がいるかもしれない。」この思いを胸に、徒歩巡礼に行ってみます。

福音朗読は、先週の朗読箇所とつなげて見渡すと福音記者の伝えたいことがより鮮明になると思います。先週は会堂でイエスが宣教する姿が描かれていました。今週の朗読箇所は、この会堂を出たところから始まります。

「すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。」(1・29) となっています。ここから翌朝までの出来事が今週の朗読箇所ですが、実に精力的に働いておられます。日中の 2 つの場面に続き、夕方になると、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を家の戸口に連れてきました。さらに朝早くまだ暗いうちに、イエスは人里離れた所へ出て行き、祈っておられます。

ここまで整理すると、イエスは昼間会堂で宣教し汚れた霊を追い出し、シモンとアンデレの家に行ってシモンのしゅうとめの熱を去らせ、夕方には病人や悪霊に取りつかれた者を家の戸口でいやし、朝からは人里離れた場所で祈って、次なる宣教の場所へ赴いています。活動の場所も多岐にわたり、時間も日中、夕方、朝早くと、それこそ食事をする暇も、寝る間も惜しんで宣教しておられるのが分かります。

寝る間も惜しんで宣教するイエスに、人々はどのように反応したのでしょうか。今週の朗読では、人々のさまざまな反応は見当たらず、ただ一つだけ、シモンのしゅうとめが熱に悩まされているのを解放してもらおうと、「彼女は一同をもてなした」(1・31) とあります。

今週の朗読箇所に限っても、病気をいやされた人はきっとたくさんいたはずですが、けれどもその人々の反応は記録されていません。どのよ

うな事情だったのか分かりませんが、シモンのしゅうとめの反応が唯一の手掛かりです。彼女の一同をもてなす姿から、何を学べばよいでしょうか。

シモンのしゅうとめのもてなしは、日常の務めを超える奉仕です。まずわたしたちに、自分のことだけで手いっぱいになっていないか、考えさせていると思います。

ちょうどわたしも、徒歩巡礼に向けてのトレーニングをしながら同じようなことを考えました。徒歩巡礼は、1日約7時間歩いて、それが3日間続く行程です。1日7時間とられると、ほとんど何もする時間はないなあという考えがちです。

けれども、1日は24時間あるのだし、6時間睡眠を取れば残り18時間です。そこから徒歩巡礼のために8時間引いたとしても、それでもなお10時間残るのです。食事のために3時間引いたとしても残り7時間です。これはつまり、通常と違う働きを8時間果たしたとしても、それでも10時間は自分のための時間が残るということです。

そこからもう少し考えると、自分の生活で手いっぱいと考えている人にとっても、どこかに時間がないか考え直す余地がまだあるということです。イエスと行動を共にしている弟子たちのように直接的に宣教活動にかかわることも可能だし、シモンのしゅうとめのように弟子たちをもてなす奉仕活動や隣人愛の実践といったことや祈りの集いに参加することなど、宣教活動を支えることも可能です。

もし、だれもが「自分たちはみな、通常的生活の上にさらに何時間かイエスの宣教活動のお役に立てる時間を持っている」と考えてくれるようになれば、今の時代にもイエスはわたしたちを使って存分に宣教の実りを生むことができるのだと思います。

いつも決まった人がとか、限られた何人かがイエスのためにも時間を使えますと言っているのではなくて、だれでも名乗りを上げる。そのような教会家族であれば素晴らしいと思います。シモンのしゅうとめの姿は、イエスによって喜びを味わった人はだれでも、もてなす人になれるのですよと訴えかけているのではないのでしょうか。

イエスは場所を選ばず、昼夜を問わず、あらゆる形で宣教し続けます。そのためにわたしたちの協力を必要としています。わたしたちのうち何人かだけが「教会のために働いてもいいですよ、イエスさまのために働けますよ」と名乗りを上げるのではなく、だれもが声を上げる、そういう小教区となるよう願っていきましょう。わたしたちはだれもが、イエスに手を貸す人、もてなす人なのです。



年間第 6 主日 (マルコ 1:40-45)

困難な立場にあるときほどイエスがそばにいる

今週は季節のはざまに置かれた年間の主日から四旬節に移行する週です。水曜日には灰の水曜日が設定されていて、頭に灰をかぶり、四旬節の償いと犠牲が始まります。この典礼の切り替わりの季節に、今週の朗読箇所から学びを得ることにしましょう。

何とか、徒歩巡礼を終えてきました。3日間歩き続けましたが、わたしと一緒にだったもう一人の神父さまは初日で太ももを痛めギブアップ。2日目以降リタイアしましたので、2日目と最終3日目はたった一人の徒歩巡礼でした。徒歩巡礼と言うよりも、トホホ巡礼と言った感じです。

初日に相方が歩けなくなったことで「あー、明日からが思いやられるなあ」とへこみ、わたしは考えられないミスを犯しました。その1つは洗濯物です。初日を終え、店を探して食事を済ませ宿に戻り、明日の準備のために着ていた物を洗濯乾燥機に投げ込んだのです。

2時間ほどして戻ってみると、洗濯物は桜の花びらのように細かくちぎれた紙屑が無数にくっついた状態で乾いていました。「これはヒドイ。誰だ？こんなことする人は」などとぶつぶつ言いつつ、散乱した紙屑を洗濯物からはがして気付きました。その紙屑は、わたしが迷子にならないように用意した巡礼地図だったのです。1日のコースを4分割したものを3日分、ポケットに入れたまま洗濯していたのです。

別の事件は最終3日目の朝に起こりました。「ああ、今日も単独徒歩巡礼か・・・あれっ、今何時だ？」やってしまいました。6時起床の予定が、目覚ましに気付かず7時に起きたのです。最終木曜日は大浦天主堂に到着して2時25分のジェットfoilまで予約していました。

寝坊した1時間を挽回しなければなりません。セットで付けた朝食はあきらめ、とっとと出ようと手に掴んだものを頭からかぶったのです。ところがその頭にかぶったものがどうやっても頭を通過しません。つまり頭からかぶるものじゃない物を、生涯初めて頭からかぶったのです。独りになれば考えられないミスを犯します。次回からは、最悪でも単独での巡礼にならないメンバーを集めなければとつくづく思いました。

さて福音朗読は、「重い皮膚病を患っている人をいやす」場面です。説教の準備のために解説書を読んでいて、興味深い箇所に行き当たりました。それはギリシャ語写本の問題で、どの写本をもとに翻訳するかで意味がすっかり変わる箇所が聖書にはあるというものでした。

この問題に該当するのが「イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ」(1・41)という日本語訳の「深く憐れむ」の部分です。多くの日本語訳で参考にした写本は「深く憐れんで」という読み方を採用したのですが、古い写本の中には「イエスが怒って、手を差し伸べてその人に触れ」と解釈しているものがあるのだそうです。

もし両方の解釈を示されたら、皆さんはどちらを採用するでしょうか。「イエスが深く憐れんで・・・」を採用すれば、わたしたちが一般

に想像するようなイエスさまの姿に当てはまるので受け入れやすくなります。一方「イエスが怒って・・・」を採用するとなれば、「イエスさまは怒ったりするだろうか」と疑問を持つことでしょう。

聖書を突き詰めて読もうとすると、今回のような難しい問題が出てきます。聖書は解釈が分かれるとき「より困難な読み方がより正しい」という原則があるそうです。これに従えば、だれでも受け入れられる「イエスが深く憐れんで・・・」よりも「イエスが怒って、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言った」という解釈がより実際に近いことになります。そして「より困難な読み方が、より正しい学びを得られる」ということになるのではないのでしょうか。

方言を身近な例として考えてみましょう。方言の中には、標準語ではなかなか言い表せない用例もあると思います。驚きを表す「あっぱよ」は「びっくりした」でほぼ言い換えができるかもしれませんが、同情とか、共感を表す「あおー」とか「あよー」は、標準語ではなかなか言い換えが難しいと思います。「あおー」「あよー」を「同情」「共感」と言ってみたとところで、年配の方々決して納得しないでしょう。

この場合、「より困難な解釈がより正しい」のです。どの標準語でも言い表せないけれども、「あおー」は「あおー」なのです。その場面で同情し、共感したに違いありませんが、「あおー」を別の言葉に置き換えるのは、ほぼ不可能だと思うのです。

では「イエスが怒って、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言った」この困難なほうの解釈に立つとしたら、誰に対して、何に対して怒ったのでしょうか。それは人を困難な状況に突き落とした病、神の望みに適った生活をさせまいとする悪への怒りなのです。

らい病とかハンセン病と言われる重い皮膚病を患った人は、家族からも離れて暮らさなければならず、人が近づくと「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と叫ばなければなりませんでした（レビ記 13 章 45 節）。共同体の交わりを絶たれ、人間以下の生活を強いられたのです。

イエスはそのような重い皮膚病の人に、深く憐れまれたのです。人をこのような悲惨な目に遭わせる悪に対して怒りに震え、深く憐れんでこの人の病を取り除いてくださったのです。誰も手を差し伸べてくれず、触れてくれる人もなく、絶望の淵に立たされた人に、「わたしがもう一度、あなたを家族や共同体の交わりに戻してあげる」と、怒りに震えながら、深く憐れんで、いやしてくださったのです。

わたしたちはどうでしょうか。誰かを助けるために手を差し出す時、怒りに震え、深く憐れんで手を差し出すことがあるのでしょうか。誰も助けようとしなないその時、助けない人々や助けようとしなない雰囲気になりながら、たった一人ででも助けようとする場面があるのでしょうか。

あなたがもし、困難なほうの解釈に立たされる場面があるとしたら、恐らくその立ち位置は正しいのだと思います。キリスト者として、勇気を持ってそこから一步を踏み出してください。あなたの怒りにも似た深い憐れみを、イエスはきっと共にいて、支えてくださいます。



四旬節第 1 主日 (マルコ 1:12-15)

悔い改めて福音を信じる生き方に舵を切る

四旬節の主日に入りました。イエスは荒れ野でサタンの誘惑を受けます。同時に天使がイエスに仕える中で、イエスは荒れ野での誘惑を退け、ガリラヤに行って神の福音を宣べ伝えました。どのような誘惑を受けても最後は福音を宣べ伝えるイエスの姿に、四旬節を過ごす心構えを学びとりましょう。

地域の皆さんは福見修道院のシスター岩谷チヅ子さんをよくご存知でしょう。木曜日、脳梗塞の症状が出て朝 4 時半に上五島病院に救急搬送されました。わたしにも連絡が入ったので、朝ミサの時間を気にしながら上五島病院に駆けつけ、病者の塗油を授けました。

ただ、脳内には多量の出血があったようで、処置を受けたものの土曜日朝お亡くなりになりました。日曜夜 6 時から修道院で通夜、翌月曜日 11 時から福見教会で葬儀ミサです。お祈りください。わたしも何かを話さなければなりませんので、これから考えてみたいと思います。

福音はとても短い語りの中で、イエスが受けた誘惑とガリラヤでの伝道の様子を伝えます。同じ出来事を伝えるマタイやルカは、誘惑の具体的な内容や、どのようにサタンに立ち向かったかを述べていますが、マルコは具体的な内容には触れません。この世にあってはイエスさえも誘惑にさらされる。そのことは折り込み済みなので、もっとその先、誘惑を乗り越えたイエスに注目させようとしているのだと思います。

では誘惑を退けたイエスの次の行動とは何でしょうか。それは、神の福音を宣べ伝えたということです。こうしてイエスはわたしたちに、誘惑にさらされることはこの世では避けられないが、その先の神の福音を宣べ伝えることに、いつも心に向けて生活を整えなさいと呼びかけているのです。

それでも、ある疑問が残るでしょう。「誘惑を乗り越えた先の宣教は理解できるが、誘惑をそう簡単に乗り越えられるだろうか。」サタンと呼ばれる悪霊は、人間よりも知恵と力に勝る霊です。誘惑をそんなにたやすく乗り越えられるものでしょうか。

この疑問には次のように答えたいと思います。イエスは 40 日間、荒れ野で誘惑を受けました。このイエスの 40 日間は、40 年の荒れ野でのイスラエルの民の試練を暗示していると思います。また、当時は 40 年という期間はほぼ人間の一生をも表すほど長い期間だったでしょう。

ですから、イエスが 40 日間荒れ野で誘惑を受けていたあいだ天使がそばで仕えていたように、わたしたちが誘惑を受けるとき、イエスがそばにいて誘惑を乗り越えさせてくれるはずで、それは短期間ではなく、人間の一生に渡ってイエスは誘惑に立ち向かうわたしたちを守ってくださいということなのです。

わたしたちのちっぽけな力では、強大な悪の誘惑に打ち勝つことは不可能でしょう。しかし、イエスが常にそばにいて守ってくれます。そ

して誘惑を乗り越えて、神の福音を宣べ伝える者としてくださるのです。

では、何を宣べ伝えればよいのでしょうか。宣教は、何かを伝えるということの前に、生き方そのものだとわたしは思っています。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(1・15) このイエスの宣教の第一声に従い、わたしたちが悔い改めること、福音を信じた生き方に留まることがわたしたちにできる宣教ではないのでしょうか。

たとえば、徴税人のマタイはイエスの声に従い、弟子となりました。ユダヤを支配するローマ帝国への税金として徴収したお金を数える生き方から、イエスに聞き従うことを中心に据える生き方に切り替わったのです。わたしたちも大なり小なり、お金を数えて生きる生き方をしていきます。わたしたちが大胆に、イエスに聞き従うことを中心に据えて生きる人に変われば、それは社会に対して大きな宣教になるわけです。

ナタナエルという人は、フィリポにイエスを紹介されて「ナザレから何か良いものが出るだろうか」(ヨハネ 1・46) と言いました。ナタナエルはイエスに出会い、すっかり変わりました。出身地や、性別や、人種や身分の違いに左右されず、イエスをすべて信じ、受け入れる人になったのです。

イエスを証しするのに十字架上の死はわたしたちにとって抵抗があるかもしれませんが。しかし人間的な思いを捨てて、大胆にイエスのありのままを語る人に変われば、大きな宣教ができるのです。

長い人生のさまざまな場面で、わたしたちは神に敵対する勢力の誘惑にさらされています。イエスが共にいて、誘惑に打ち勝つことができるように守ってくださると信じて、目の前の誘惑に振り回されず、むしろ大胆に自分の生き方を証しに変えましょう。

「わたしは、イエスを中心に据えて生きています。」この証しがあれば、難しい言葉がなくても誰もがイエスの弟子、宣教の担い手となれるのです。



四旬節第 2 主日 (マルコ 9:2-10)

急いで見回すと、ただイエスだけがおられた

四旬節第 2 主日に入りました。イエスはただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて高い山に登り、彼らの目の前でそのお姿が変わる様子が描かれています。高い山に登って、3人の弟子は実際には何を見たのか、考えてみたいと思います。

本日午後 3 時から、浦上教会で長崎教区の司祭助祭叙階式とミサが執り行われます。司祭を絶やしてはいけないという皆さまの日々の祈りと、神学生養成援助のおかげです。わたしの頭でよければいくらでも下げて感謝したいと思います。

また、今週は大人の黙想会が組まれています。山村神父さまが説教師を務めてくださいます。教区シノドスの提言に沿って、何かお話をお願いしますと依頼していますので、教会から遠ざかっている人、教会から遠ざけられている人への働きかけについて、示唆を頂けるのではないかと思います。黙想会の間、子供たちはお留守番をお願いします。

さて福音朗読のイエスが 3 人の弟子だけを連れて高い山に登る場面ですが、おそらくその山はタボル山でしょう。ナザレの東にあり、パレスチナではヘルモン山、カルメル山と並んで有名な山です。頂上 575 メートル地点には後にご変容の教会が建てられました。

それほど高い山でなくても、周囲が平地であれば、多くの町々を見降ろせます。さらに山は、通常険しい場所であり、地上の喧騒から離れて神と向き合う場所と考えられていましたから、いわば弟子たちは地上世界と神がお住みになる天と、両方を見渡す場所にいたのです。

この前提に立って、3人の弟子たちが何を見たのかを考えることにしましょう。彼らは何を見たのでしょうか。イエスの姿が変わり、服は真っ白に輝き、さらにエリヤがモーセと共に現れ、イエスと語り合うのを見ました。ひとことで言えば、息をのむような光景を見た、ということになります。

ところで話はそれで終わるのでしょうか。ペトロは興奮のあまり、仮小屋を三つ建てて、イエスとモーセとエリヤを住ませようと提案しました。すると雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がしました。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」(9・7) それで弟子たちは急いで辺りを見回しましたが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒にいられたとなっています。

極端な話をすると、3人しか見ていなかった出来事をマルコ福音記者がどうやって描くことができたかという問題にもなります。弟子の頭ペトロがマルコに語って聞かせたであろうということは推測できますが、実際には3人しか見ていないのですから、マルコは言われたままを記録する以外になかったはずです。

もっと意地悪い考えをすれば、何も起こらなかったのかもしれない。さすがにそれはわたしの考えすぎだと思いますが、もしかしたら高

井山に登った3人の弟子が見たのは、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から「これはわたしの愛する子。これに聞け」という声が聞こえ、急いで辺りを見回したが、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。これだけのことだったかもしれません。

実際にわたしたちは、日常生活で深い霧が立ち込める季節を知っています。車を運転していれば、前が見えずに怖くなります。仮にそういう天気に見舞われたとしたら、ただイエスだけが彼ら3人の弟子と一緒におられた、それしか見えなかったという状況は十分考えられます。

わたしは、それでも構わないと思います。何かが起こったでしょう。3人しか見ることのできなかつた、息をのむような光景がおそらく展開されたのでしょうか。確かなことは、すべての出来事を終えたそこには、「ただイエスだけが彼らと一緒におられた」(9・8)という事実です。わたしは、「ただイエスだけが彼らと一緒におられた」この事実を、最終的に彼らは見たのだと思ったわけです。

わたしが今週伝えたいことはこうです。息をのむような光景のあとに、ただイエスだけが彼らと一緒におられたのは、いわば地上世界と天上世界をつなぐようなこの場所に、イエスだけが彼らと一緒におられたということです。天と地、天上世界と地上世界の唯一の絆は、ただイエス・キリストお一人であるということです。

これは、今週の第一朗読とも関係しています。アブラハムが山で一人息子イサクをいけにえにささげようとする場面です。アブラハムの忠実な態度を見て、神は息子に手をかけるなど命じます。そして目を凝らして見回すと、一匹の雄羊が見えました。アブラハムはそれを捕えて天と地を結ぶいけにえとしてささげたのでした。

今、天と地を結ぶ高い山に、イエスだけがおられます。これは3人の弟子たちだけでなく、福音記者が出来事を伝えることによって、すべての人へのメッセージとなったのです。天と地を結ぶ絆は、イエス・キリストこの方であるというメッセージです。

ここで見落としてはいけないのは、イエス・キリストの歩む道のりはまだ終わっていないということです。これからイエスは十字架上の死を通過して復活なさいます。3人の弟子たちもそのことを十分理解できませんでした。それでもここはイエスの歩む道のりについて行きましょう。イエスの歩む一つ一つの道のりが天と地を結ぶと信じましょう。

午後3時から司祭助祭叙階式です。地上でイエスの代理として天と地を結ぶ司祭がまた2人、この長崎教区に与えられます。彼らがただイエスだけがそばにおられることを信じて、これからの道のりを歩いていけるよう、共に祈りいただきたいと思います。



四旬節第3主日 (ヨハネ 2:13-25)

黙想会の学び「幸せの置き場所」を再確認する

黙想会の週でした。2006年の説教を参考に、黙想会の学びを少し拾ってお話ししたいと思います。イエスは神殿で羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らしと、ずいぶん手荒なやり方で神殿にあるものを一掃しました。荒っぽい方法でイエスは神殿を清めたと考えられるでしょう。けれどもイエスの一連の行為は、神殿を清めるということだけではないようです。

当時の神殿は、いけにえをささげて礼拝する場所として用いられていました。幼子イエスを抱きかかえたヨセフとマリアは、鳩を神殿でささげました(ルカ2・24参照)。いけにえをささげることでこの神殿は活用されていたのですから、いけにえの動物がすべて追い払われれば、神殿は神殿としての役割を果たせなくなります。

イエスのねらいはそこにあったのかも知れません。神殿からすべての動物を追い払うことで、この神殿はもはや役に立たないものとなった。そのことを人々に知らせようとしたわけです。もはや動物をいけにえにして繰り広げられる神殿礼拝は終わり、代わりにイエスご自身が十字架上で命をささげることで、まことのいけにえとなってくださる。神と人間との間を取り持つのは、牛や羊や鳩ではなくなり、イエスキリストがまことの仲介となられた。そのことを今日の出来事で示したのです。

この点を踏まえてイエスの言葉を考えてみましょう。イエスは鳩を売る者たちに言いました。「このような物はここから運び出せ。」(2・16) これまで大切に取扱われてきたいけにえの儀式、そこで用いられたいけにえの動物をイエスは「このような物」ときっぱり退けました。

誰もが大切だと考えていた形式であっても、いったんそれを横に置いたとき、それらを頭の中から追い出したとき、もっと大切なもの、唯一の大切なものに気付くことができるようになります。今年の黙想会に当てはめるなら、「幸せの置き場所」であるべき神と人とが出会う場所、神殿では、いけにえの動物に代表される過ぎ去るものを用いた礼拝にしがみつけないということです。

「あなたは、こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか」(2・18) イエスの周りには、イエスに食ってかかっています。「なぜあなたは、わたしたちの礼拝にけちを付けるのですか」と言っているようなものです。動物のいけにえをささげて礼拝をおこなうやり方に、これまで誰も疑問を持たなかったので、イエスの言葉に敏感に反応したのです。

「このような物はここから運び出せ。」イエスは、わたしが幸せの置き場所と考えていた何かの形を退けるかも知れません。そうするとわたしはイエスに食ってかかって、「何てことをするんですか。どれだけ苦労して今の幸せの形を手に入れたと思っているんですか」と言うだろうと思います。

このような態度は、ユダヤ人たちがイエスに詰め寄ったのと何も変わりません。「なぜあなたは、わたしたちが幸せとと思っていることにけちを付けるのですか」そう言っているようなものです。わたしの態度は正しいのでしょうか。わたしが神に口答えしたり、神に不平を言うことは筋が通っているのでしょうか。

あらためて考えると、本当に神が求めているものをわたしはささげてなかったのではないかと反省させられます。もしかしたら、わたしが満足しているものを神に報告していただけではないだろうか。過ぎ去っていく幸せの置き場所にこだわり、それを壊さない程度のささげものをするのではなく、自分を無にしてイエスご自身をささげることに徹する必要があるのではないか。あらためてそう思いました。

わたしたちは今の幸せの置き場所を手に入れるために、人には言えない努力を払ったかも知れません。けれども、それにしがみついてしまっただけでは、わたしたちはイエスを告げ知らせる人であり続けるのは難しい、神をたたえる純粋な信仰者であり続けるのは難しいと思います。それをすべて運び出さないと、過ぎ去る幸せを壊さない程度で神を告げ知らせる人、本物ではない幸せの置き場所を礼拝する人になってしまうのです。

そうならないために、わたしの心からいっさいを運び出す。過ぎ去っていく幸せの置き場所にこだわるのをやめ、いったん横に置いてみる。これがいちばん分かりやすい確認の仕方です。もしもわたしが本物でない幸せの置き場所に執着があるなら、やはりわたしはイエスにもっと徹底的に砕かれる必要があります。

イエスの叫びはわたしたちにも向けられています。「このような物はここから運び出せ。」パウロはイエスの叫びについて考えさせる次の言葉を言っています。「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか」（1コリント 3・16）。わたしという神殿にある幸せの置き場所が神の心になかない物でいっぱいであれば、イエスの言葉通り「このような物はここから運び出せ」と言われてしまうことでしょう。

最終的に、わたしたちキリスト者はみな、信じているイエスご自身をささげものとしてささげなければなりません。それはたとえば、「わたしではなく、わたしの中におられるキリストがほめたたえられますように」という祈りを心で思い浮かべて仕事に当たるとか、「わたしたちは、生きるかすれば主のために生き、死ぬかすれば主のために死ぬのです」（ローマ 14・8）と繰り返し言い聞かせて務めを果たすといったことです。こんな心がけがあれば誰もがみなわたしの中におられるイエスをささげることができるのではないのでしょうか。

わたしがしがみついているものを全部心の中から運び出しましょう。大変つらい作業かも知れません。すべて運び去って、もう一度イエスを告げ知らせる者として出直しましょう。頼りにしていたものをすべて取り去ったとき、初めてイエスにのみより頼む望ましい礼拝が始まるのです。ここから、幸せの置き場所も本当の意味で豊かになるのです。



四旬節第 4 主日 (ヨハネ 3:14-21)

世は光よりも闇の方を好んだ

四旬節第 4 主日を迎えました。あと 2 週間で聖週間というところまで典礼が進んでいます。これからの 2 週間、受難と復活を通して救いを完成されるイエスに一步ずつ近づく日々をしたいものです。

今年長崎教区は信徒発見 150 周年を記念するためにさまざまな公式行事を組んでいます。その中で 3 月 17 日国宝大浦天主堂での信徒発見ミサは記念の頂点です。教皇特使も招かれています。同じミサは教区シノドスの閉会も兼ねています。

わたしはこう考えます。信徒発見 150 周年を記念し、教区シノドスを閉会することは、これまでの土台にしっかり立って、これから新しい歩みを始めるという意思表示ではないでしょうか。無事に行事が終わったねで終わらせてはいけないと思います。

信徒発見までの日本の教会が受けた迫害は、長い影を連想させます。影が長いのは、光から遠く離されてしまった時代だったからだと思います。光とは、教会を照らす光、イエス・キリストです。迫害の中で日本の教会の信徒たちは、教会を照らす光を間近で仰ぐことができませんでした。

長い影にたとえた迫害の 260 年は、長崎の信徒発見で光に照らされました。大浦に建てられた外国人のための聖堂に浦上の信徒が勇気を出して出向き、当時のプチジャン神父に「ワレラノムネ アナタノムネトオナジ」と信仰を言い表したのです。どんなに影が長くても、その影に隠れておびえるのではなく、勇気を出して司祭に近づいたので、光であるイエス・キリストに照らされることができました。

信徒発見の出来事が今週の福音朗読箇所を考えるヒントになります。「真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」 (3・21)

260 年もの間、迫害によって光から遠ざけられていたクリシタンたちが、山の上に光を置いたプチジャン神父のおかげで光であるイエス・キリストの方に来ることができました。プチジャン神父が導いたというよりも、プチジャン神父が大浦に灯した「光であるイエス・キリスト」に導かれて浦上の信徒が来たのです。

どんなに影が長くても、たとえ 260 年という長い影を歴史に残したとしても、光であるイエス・キリストにくまなく照らされれば長い歴史の影は光に包まれます。260 年の長く暗い影は影のままで終わらず、信徒発見の出来事によってすべてが明るみに出されたのです。

「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」 (3・19) 信徒発見から 150 年が過ぎました。信徒発見の出来事は、長い影に覆われていたクリシタンに光がさした出来事でした。今わたしたちに期待されていることは、わたしたちの信仰を公にすることだと思います。光であるイエス・

キリストが世に来ていることを、闇の方を好む人々に示すことだと思います。

光よりも闇の方を好む人々とは、イエス・キリストに照らされることを好まない人々ですが、それはカトリック信者の中にもいるかもしれません。カトリック信者でない人の中にもいるかもしれません。そうした人々に、「わたしは光に照らされて生きることを選びました。あなたは光に照らされずに、闇を好むのですか？」こんな意思表示をして、光に照らされる生活に招く。これが信徒発見 150 年を迎えたわたしたちの取るべき姿勢だと思います。

自然の光は、しばしば暖かさを伴います。春の光は、ようやく寒い冬が終わりを告げることを感じさせます。そのように、わたしたちが光であるイエス・キリストに照らされる生活を選んでいると証しするなら、わたしたちを通して人々がイエス・キリストの暖かさ、イエス・キリストの愛を感じ取ることができます。

イエス・キリストがわたしたちを愛し、いのちをささげて守ってくださることを伝えたなら、その先のこと、光であるイエス・キリストに近づくのか遠ざかるのかは本人に委ねましょう。

大きな節目を迎えた長崎教区の信徒の誰もがができること、光の方に来る生き方、光であるイエス・キリストに近づく生き方が、一人でも多くの人に受け入れられるように、このミサの中で願いましょう。



四旬節第 5 主日 (ヨハネ 12:20-33)

父なる神に栄光を帰す生き方を目指す

四旬節第 5 主日、受難の主日からの聖週間ももうすぐそこまで来ています。イエスが救いのわざを完成しようとする場面、それと同時に敵対する力もさらに増します。わたしたちも誘惑を退け、イエスが栄光をお受けになるその時を喜び迎えられるよう、学びを得ることにしましょう。

昨年末に大怪我をして現在病院で懸命のリハビリを続けている浜串の元区長さんをお見舞いしました。左腕を切断していると前もって聞いていましたので、どんな顔を作ればよいのか悩みましたが、思い切って最初に腕のことに触れて、気持ちを切り替えようと思い、「おー！腕無くなっちゃったねー」と大げさに言いました。沈んだ気持ちで面会したくなかったからです。

幸いに、元区長さんも悲しい顔は一切見せませんでした。わたしは最近の出来事として、黙想会のこと、新しい昭徳丸が浜串漁港に来て、お披露目をして、わたしが祝別したよと報告しました。とても喜んで話を聞いてくれました。元区長さんから、いろんな話を聞かせてもらいました。そして、リハビリを懸命にして、浜串に戻りたいなあという目標も聞かせてくれました。

最後にわたしも、「浜串に戻ってきてね」とお願いしてから手を振って別れると、元区長さんが目を真っ赤にしました。わたしもこみ上げるものがあり、病人と別れるときに涙が溢れそうになったのは生まれて初めてでした。その場を離れる辛さがそうさせたのです。懸命にこらえていた気持ちが、最後に出たのだと思いました。

今週の福音朗読、御父に呼び掛けるイエスの二つの言葉が印象的です。一つは「父よ、わたしをこの時から救ってください」(12・27)そしてもう一つは「父よ、御名の栄光を現してください」(12・28)です。「救ってください」という思いがあったのに、「御名の栄光を現してください」という言葉に変わりました。

これは、イエスの個人的な思いを優先したい気持ちがあったのに、それをあえて後ろに置いて、御父の望みを優先させることを前に置いたということです。

いちばんの理解者であるはずの弟子たちさえ、イエスが十字架にかけられていのちを投げ出す道を思いとどまらせようとしませんでした。イエスがこれからも自分たちの先生であり続けてほしかったからです。

イエスに思いとどまらせようとしたのは、弟子たちの個人的な感情を優先していたために望んだことでした。しかしイエスにとって最優先は、御父の望みでした。御父に栄光を帰すことが、そのままイエスご自身栄光を受ける道だったのです。イエスが復活して初めて、弟子たちもイエスの歩まれた道を理解することになります。

わたしは、長崎で面会した元区長さんも、今週の福音朗読でわたし

たちが学ぼうとしている道を全身全霊で受け止めようとしているのだと感じました。元区長さんも、「父よ、わたしをこの時から救ってください」と最初は願ったに違いありません。

けれども、3か月過ぎた今は「父よ、御名の栄光を現してください」という心境に変わったように思います。片腕を失いましたが、信仰は失っていませんでした。

むしろ信仰は火で精錬され、生かされていることをますますよく理解し、イエスに委ねて生きようという気持ちが育ち始めていると感じたのです。身体の不自由は大きな十字架ですが、元区長さんはこの十字架で、きっと御父に栄光を帰すに違いないと思いました。

イエスは十字架上の死と、その後の復活を目前にして、人はどのようにして御父に栄光を帰すべきかを教えます。人は行き詰ると、だれもが「父よ、わたしをこの時から救ってください」と言いたくなるのです。

けれども目の前の困難を避けるべきものでなく受けるべき十字架として見るとき、父なる神に栄光を帰す道が開けてくるのです。わたしたちは回り道も、後ずさりする場所さえもなくなって、ようやくイエスに委ねて困難を乗り越える道を選びます。その時とその場所がいつ用意されるかは誰にもわかりません。用意なさるのは神だからです。

わたしの生活で神さまにふと言いたくなる言葉は何でしょうか。

「父よ、わたしをこの時から救ってください」でしょうか。たしかに、逃げたくなるような出来事は山ほどあるでしょう。けれども、その現実を十字架として受け止める、背負うと決めたなら、その時からわたしたちは同じ状況でありながら御父に栄光を帰する人に変われるのだと思います。

わたしはありのままの自分の生活で、「父よ、御名の栄光を現してください」と声を上げる信者になれているのでしょうか。もしそうでないとしても、イエスはわたしたちにお手本を示し、従うようにと招いておられます。十字架上で御父に栄光を帰すイエスがわたしたちの生き方の物差しです。わたしの生活をどのように向けていけば、父なる神に栄光を帰すことができるか、今週一週間考えてみましょう。



受難の主日 (マルコ 15:1-39)

だれが何を取るかをくじ引きで決めた

受難の主日、聖なる一週間が始まりました。イエスがいのちをささげて人間の救いを全うされます。わたしたちは自分では天の国にたどり着けないと、この一週間ではっきり理解し、より頼む心を増しましょう。

本日のマルコによる受難の朗読の中で、わたしは兵士たちが取った行動を深く心に刻みたいと思います。「兵士たちはイエスを十字架につけて、その服を分け合った。だれが何を取るかをくじで決めてから」(15・22)とあります。十字架に架けられたイエスのむごい姿と、イエスには全く関心がなくて、むしろイエスの着ていた衣服に興味があった兵士たちとのきわめて対照的な姿を刻みつけたいのです。

イエスの姿は確かにむごたらしいのですが、わたしは、イエスのことを気にも留めず、着ていた衣服を奪い合う兵士たちの無神経な姿が、より一層むごたらしく感じます。死にゆこうとする一人の人間よりも、兵士の目に留まったのは着ていた衣服だったのです。釘で十字架に打ち付けておきながら、はぎ取った衣服の方に興味があったのです。

兵士の姿を見て、何と無神経な人々だろうと、皆さんは心を痛めるのでしょうか。わたしたちは、兵士たちの愚かさを笑えるのでしょうか。むしろ、兵士たちの愚かさは、わたしたちの愚かさを鏡で映しているように思えないでしょうか。なぜならわたしたちもまた、イエスが十字架にかけられていることよりも、自分の興味関心を優先することがあるからです。イエスが祭壇上でいけにえの子羊になっていても、ある場合は別のことに興味関心を持っているときがあるからです。

そこで、目の前の出来事から目をそむけないで考えましょう。わたしたちはイエスが十字架にはりつけにされているそばで、それ以外のことに気を取られたり時間を取られたりしていることを正直に認めましょう。だれが何を取るかをくじ引きで決めることさえする、そんな愚かな人間であると認めましょう。弱さを認めてこそ、わたしたちの弱さをご存知であるイエスがわたしたちを救ってくださるのです。

もっと踏み込んで言いましょう。あなたは、イエスの何を取りますか。あなたがイエスの着物を取ると言うのなら、わたしは着物を着ていないイエスを取らしましょう。つまり、世の人々が対面を装うための着物を争って取り合うと言うのなら、わたしたちキリスト者は着物をはぎ取られたイエスを取りますと、態度を決めてほしいのです。

もちろん、わたしたちは弱く貧しく、愚かな面を持っています。考え抜いて取るべき態度に思い至っても実際には行動しないことがあります。イエスがこんな弱いわたしたちのためにいのちを投げ出してくださいます。着るものを取り上げられて、みじめな姿をさらしてでも、わたしたちの救いのために自分をささげてくださいます。今は感謝して、イエスの前にひざまずきましょう。せめてイエスのそばにたたずんで、見守ることができるよう、恵みと力を願いましょう。



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

仕えるイエスを祭壇から受け、生活に持ち帰る

聖木曜日、イエスが最後の晩餐で弟子たちの足を洗う場面が朗読されました。イエスが弟子たちの足を洗ったのは聖体の秘跡を制定された最後の晩さんの中でのことでした。朗読の部分に最後の晩さんの場面も重ねながら、黙想することにしましょう。

今年3月1日に、長崎教区は司祭助祭叙階式を行い、2名の司祭が長崎教区に与えられました。初めての任地も、今日現在公表されており、一人は浦上の助任司祭、一人は福江の助任司祭として司祭の歩みをスタートさせます。

3月1日の叙階式、教区報の記事をまとめるのに一人の司祭のご両親にミサ前にお話を聞かせてもらいました。助祭に叙階されてから、3年間も待ってこの日を迎えておられたので、さぞかし待たされただろうなあと思い、ねぎらいの声をかけたのです。

すると、ご両親はわたしの予想していなかった返事をくださいました。きっと「首を長くして待ちました」というような返事だろうと予想していたのに、「本人を信頼して、わたしたちはその日のために備えてきました。きっと神さまは、本人に必要な時間だったから、3年間という期間を置いたのでしょう。むしろ、この3年間が、本人に恵みの重さを実感させていると思います。」そう答えたのです。

本日朗読された福音の個所も、恵みの重さを実感させると言えるかもしれません。イエスが弟子たちの足を洗います。これはユダヤ人が通常外出先から帰って来たときにする足洗いの所作ではありません。イエスは聖体の秘跡を制定される最後の晩餐の途中で弟子たちの足を洗っているのです。おそらく、パンとぶどう酒を分け合う少し前に行われたのでしょう。

イエスの動作が、外出先からのけがれを落とすためのものでないとするれば、特別な意味があるはずですが、それは、イエスの弟子たちに対する愛の表れです。ほかにも、これから取り扱う秘跡がどれほどの恵みであるかを悟らせるために、将来聖体の秘跡を取り扱うことになる弟子たちを敬う態度であったかもしれません。

イエスは「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(13・14)と言いました。イエスが、聖体の秘跡を意識した場面で弟子たちの足を洗ったとするれば、後に弟子たちも、足を洗う場面がやって来たとき、取り扱う恵みの重さを思い出したことでしょう。聖体の秘跡は、互いに足を洗い合うほど人に仕えようという思いがなければ取り扱えないのです。

今日わたしたちも、選ばれた人が洗足式に臨みます。これは司祭が、自分の取り扱う聖体の秘跡の恵みの重みを感じるきっかけにすべきですし、信徒もまた、これから祭壇上で執り行われる聖体の秘跡の恵みの重みを考えるきっかけにしてほしいと思います。できれば、毎週の主日の

ミサ、そこで執り行われている聖体祭儀のたびに、これは、互いに足を洗いあって執り行ってもよいくらいの尊い秘跡、互いに仕え合う秘跡なのだと思います。

今日、イエスは最後の晩餐の中で聖体の秘跡を制定してくださいました。聖体の秘跡はのちに弟子たちによって記念として行われるようになりますから、弟子たちの司祭叙階の秘跡もこの場面に織り込まれていると考えてよいと思います。

聖体の秘跡、叙階の秘跡が、弟子たちの足を洗うイエスの仕える姿と深く結びついています。わたしたちはミサに集うたびにいつも、イエスがご自分の弟子である司祭たちに仕え、司祭が聖体のイエスと祭壇を囲む信徒に仕え、信徒は司祭が祭壇上で仕える姿を見ているのです。

あらためて、ミサは司祭が祭壇上でイエスに仕える秘跡でなければならないと思いました。信徒は、ミサに参加して、イエスに仕える司祭を見るはずです。決して、司祭が横暴に振る舞ったり、信徒に仕えられるためにミサがあるのではないのです。今日の聖木曜日の典礼で、もう一度仕えるために来られたイエスを祭壇上で再現する、体現する司祭でなければ不合格であると感じました。

わたしたちが、祭壇上で何よりも尊いものを見たのであれば、見たものを生活の中に取り入れるべきです。すなわち、家庭でも互いに仕え合うということです。イエスが弟子たちをこの上なく愛し抜かれた最後の晩餐の場面が、いつも祭壇上で再現され、それを見て一人ひとりが生活の中で隣人愛を実践する。こうして祭壇を囲んだ恵みが家庭に、社会に広がるように、今日のミサの中で恵みを願いましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)



聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか

イエスのご死去を朗読でたどっていきました。イエスを死に追いやる人々の中で働く悪の力は、その人の正しい判断力までも奪い去りました。大祭司アンナスは、イエスを縛ったまま大祭司カイアフアのもとへ送りました。カイアフアも何も手を貸さず、総督ピラトの元へ送ります。

裁判を開いて尋問したピラトは、「わたしはあの男に何の罪も見いだせない」(18・38)と言い、釈放しようと努めたのです。しかし、ピラトはイエスではなく強盗のバラバを釈放したのでした。祭司長たちにそそのかされた群衆も、心の声に耳を傾けることができませんでした。

もう一人、イエスの死に深くかかわっている人がいます。それはペトロです。ペトロは三度、イエスのことを否定しています。ペトロに焦点を当てて、今年の聖金曜日を黙想したいと思います。

イエスは宣教活動を開始するにあたり、十二人の弟子を集めました。その弟子の頭がペトロです。しかしペトロは、門番の女中の言葉に、致命的な過ちを犯してしまいます。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」(18・17) ペトロは「違う」と言ったのです。

ペトロが「違う」と言ったことは、個人の問題では済まされません。彼は弟子の代表、一番弟子だからです。ペトロが「違う」と言うならば、だれが「わたしはイエスの弟子である」と言うのでしょうか。

ペトロが「弟子ではない」「違う」と打ち消したのは、イエスがみずから選んだ弟子さえも、敵対する悪の勢力に打ち勝てなかったということなのです。それはつまり、イエスが十字架にかけられていのちをささげなければ、どんな人間も自分を救えない、自分だけではなく他の人をも救えないということなのです。弱く、貧しい、愚かな人間を救うために、イエスの十字架上の死がどうしても必要だったのです。

イエスの最期の場面で、十二人の弟子たちがみな「わたしたちはイエスの弟子である」と声を上げていたら、出来事はさぞ変わっていたことでしょう。けれども、それは実現しませんでした。かろうじてイエスのそばにとどまった「愛する弟子」も、ただ黙ってイエスの最期を見届けることしかできなかったのです。

イエスは、十字架の上でいのちをおささげになりました。今、わたしたちにも門番の女中は問いかけています。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」残念ながら、わたしたちも場合によっては自分が弟子であることを「違う」と打ち消してきました。こんな弱いわたしたちを、イエスさまは黙って背負い、赦し、救ってくださいます。今はただ、感謝して十字架上のイエスを礼拝しましょう。

このあと、十字架の礼拝の儀が執り行われます。一人ずつ十字架の前で深々とお辞儀をし、礼拝をささげます。弟子であることを打ち消したわたしをそれでも愛してくださる十字架上のイエスに、感謝の誠をささげましょう。



復活徹夜祭 (マルコ 16:1-7)

思い起こし、物語れ

主の復活おめでとうございます。今年の聖週間も慌ただしかったですが、無事にこの日を迎えることができホッとしています。福音朗読は、婦人たちがイエスのご遺体をお納めした場所を訪ねるところから始まっています。婦人たちは「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」(16・3)と話し合っていますから、墓を塞いでいる石を動かしてもらってご遺体と対面するつもりだったのは明らかです。

ところが、石は既にわきへ転がしてありました。(16・4参照) 奇妙なのは、婦人たちでは手に負えないはずの石が転がしてあるのに、だれがそうしたのか、またどのようにして転がしたのか疑問も持たず、墓の中に入って行くのです。出発の時は気にしていたのに、その場では石にほとんど気を取られず墓に入れるものでしょうか。

あれほど墓の入り口の石を気にかけて出発したのですから、ふつうに考えれば石がわきへ転がしてあれば驚き怪しむはずですが。そうならなかったのは、一つのことを考えられます。それは「もっと驚くべきことを見たので、他のことはどうでもよくなった」という状況です。

婦人たちが墓の中に入ると、「白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えた」(16・5)とあります。そしてこの様子に婦人たちはひどく驚いたと、わざわざ書いてあります。ですから、墓の石がどのようにして転がしてあったのかはもはやどうでもよくなり、「あの方は復活なさって、ここにはおられない」(16・6)と語る神の使いが、婦人たちの心を占領していたのです。

弟子たちが恐れに捉えられて家に閉じこもっている中、婦人たちは行動を起こしました。その結果墓の中で神の使いが「あの方は復活なさって、ここにはおられない」と話すのを聞いて、婦人たちはさらに行動に駆られます。「どこに行けば、主にお会いできるのか。どのようにすれば、主にお会いできるのか」ということです。

もはや、墓に留まってもイエスとお会いできないことは明らかです。そうであれば次に取るべき行動を考えなければなりません。それは、神の使いが促している通り、「行って、弟子たちとペトロに告げる」(16・7)ということですが。

自分たちが動いて弟子たちに知らせに行けば、行動を起こしたそのことでイエスに会えるかもしれない。婦人たちは、期待に胸を膨らませていました。み使いの言葉は、墓の石がどのようにして転がしてあったかなど、どうでもよいと思わせるのに十分でした。

この時点で婦人たちが持ち合わせている情報は限られていました。墓にはイエスがおられないということ、主の使いによれば、イエスは復活されたということ、復活したイエスは先にガリラヤへ行かれ、そこでお目にかかれるということですが。

婦人たちはこの限られた情報を弟子たちに伝えることとなります。

弟子たちはユダヤ人たちを恐れて家に閉じこもっています。婦人たちが体験したのは、次につながる行動を起こすことが、イエスに出会う近道だということです。イエスに会うためには弟子たちがガリラヤに出向く必要があります。弟子たちは動いてくれるでしょうか。

弟子たちが動くかどうかは、きっと婦人たちの熱意が鍵となります。婦人たちは神の使いから、ガリラヤでイエスにお目にかかれると伝えるように言われたのですが、「ガリラヤ」という土地をどれくらい重みがある土地と感じたのでしょうか。

マルコ福音書に書かれているわけではありませんが、弟子たちは、婦人たちが持ち帰ったガリラヤという地名が鍵となる土地だと理解できたのではないかと思います。実際、イエスの活動の舞台はほとんどがガリラヤ湖周辺です。奇跡を行い、権威ある言葉を語り、弱い立場に置かれている人を守り、神の国への希望を人々に示したのはガリラヤでした。

今は恐れのために動けないでいる弟子たちですが、後に約束された聖霊を受けて、彼らも復活したイエスを人々に語ることとなります。ガリラヤに行きなさいというイエスからの伝言は、「ガリラヤで何を見たか聞いたか、思い起こしなさい。それが素晴らしいものだったのなら、それを語りなさい。」そんな呼びかけだったのではないのでしょうか。

わたしたちにも、墓へ行った婦人たちはみ使いの言葉を持ち帰ってくれます。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる。」(16・7)

現代にあって、ガリラヤはこの教会堂だと思います。復活したイエスは先にこの聖堂に来て、わたしたちがここに集えばお目にかかれるのです。かつて自分が幼かった時もそして今も、復活したイエスは七つの秘跡を通して奇跡を行い、権威ある言葉を語り、弱い立場に置かれている人を守り、神の国への希望を示し続けるのです。

そこで一つのお願いです。行動を起こすと、復活したイエスに出会うことができます。何かの行動を起こしましょう。婦人たちは墓にたたずんでいてもイエスに出会えませんでした。次の行動を起こした時に復活したイエスに出会います。弟子たちも、ガリラヤという場所が何だったかを思い出し、行動したとき復活したイエスに出会いました。

わたしたちもそうです。わたしが受けた信仰が豊かにされた場所を思い起こし、わたしはこのようにして信仰を育ててもらったと物語るとき、復活したイエスと出会うのです。出会う人に向かって、次の世代に向かって、思い起こし、物語ること。これがわたしたちにとって復活した主と出会う道です。



復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

復活した主は全世界を照らす光

あらためてご復活おめでとうございます。わたしたちは昨晚の復活徹夜祭で光の祭儀を行い、復活した主が、わたしたちの心の闇を照らし、導いてくださる方となっておられるのを体験しました。

ローソクの光は、使い方によって2つの照らし方をすると思います。光の祭儀では、復活賛歌を歌うために、侍者たちにローソクで手元を照らしてもらいました。1つの働きは、手元を照らすということです。

また、洗礼の約束の更新では、全員復活のローソクから火をともし、信仰を宣言しました。これは自分たちの信仰を互いに確かめ合い、また世に向かって信仰を宣言するための働きでした。ローソクの光のもう1つの働きは、世を照らすということです。

復活の主日の日中の典礼で朗読される福音は、ヨハネ福音書が決まって朗読されます。与えられた朗読の中で、「見る」という言葉がいくつかの違った働きをしています。それはたとえば言えば、ローソクが手元を照らす働きと、世を照らす働きに使われるようなものです。

マグダラのマリアは墓に行き、「墓から石が取りのけてあるのを見た」（20・1）とあります。彼女の目は、いわば手元を見ただけでした。そのため戻って弟子たちに報告する時も、「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません」（20・2）という報告にとどまったのです。

ペトロともう一人の弟子は、外に出て墓へ行きます。先に墓に着いたもう一人の弟子がペトロに続いて墓に入って来たとき、マグダラのマリアとは違う結果になりました。「見て、信じた」（20・8）のです。もう一人の弟子の目は、手元を見ただけではなく、自分たちが見ている出来事の本当の意味まで深く見通したのです。

そこには、ただ手元を見るだけの見方とは違った見方があることが分かります。たとえば旅行に出かけるとき、船に乗っている知らない幼子が泣いているとして、泣き止んでほしいなあと思って見るのと、微笑ましいなあと愛情をもって見るのが違っているようなものです。

イエスが愛しておられたもう一人の弟子は、自分が深く愛されていたことを思い起こしながら、空の墓を見つめたのです。そのことで、イエスは復活して、わたしたちの救いを成し遂げられた、わたしたちにまた愛を注いでくださる方とされたことを見通したのです。

イエスが愛しておられたもう一人の弟子に倣いましょう。日々の出来事の意味を考えると、愛情を持って出来事を見ると、すべてが神からの贈り物として受け止めることができるようになります。復活した主は今わたしたちの手元だけでなく、全世界を照らし、愛によって治め、導いてくださるのです。



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

神のいつくしみにより多くの人を招こう

神のいつくしみの主日と呼ばれるようになった復活節第2主日、神のいつくしみをまずイエスを信じるわたしたちが知り、イエスをまだ信じていない人々にどのようにしたら神のいつくしみが届くかを考えてみましょう。

復活の卵の当たりくじ、あと2人受け取りに来ていません。景品の10個入りパックの卵は、あと二、三日もすればヒヨコになって逃げて行ってしまいます。心当たりの方は今日中に受け取りに来てください。

自炊も2週間になりました。作った中で、おいしくなかったものとおいしかったなあというのがあります。まったくおいしくなかったのは野菜炒めです。野菜が嫌いだからではなく、おいしくなかったのです。わたしが作ったものは「野菜炒め」ではなく、「野菜炒めた」です。「野菜炒め」は料理ですが、「野菜炒めた」は料理とは言えません。

おいしかったものがあります。ラーメンです。まっすぐの麺が2束入ったものを買って置かせていますが、麺や具を調理してお湯を決められた分量の3分の2に減らし、あと3分の1は豆乳を足してひと煮立ちしたら調味料を入れて完成です。この豆乳を「投入」するところがポイントでして、クリーミーでおいしかったです。これからも、「これはうまい」「これは最悪」という料理が出来上がったら報告します。

復活したイエスは、幾度となく弟子たちに現れます。今週の朗読で二度にわたって復活したイエスが現れ、「あなたがたに平和があるように」(20・21,26)と言っています。イエスは弟子たちに平和を与えます。イエスが与える平和を届ける道具として、弟子たちは選ばれました。

復活したイエスが弟子たちに現れ、平和を与えてくださいましたが、もしイエスのほうから何も言葉を発しなかったとしたら、その場の雰囲気はどうなっていたでしょう。きっと緊張が走り、場面は凍りついたと思います。イエスは弟子たちが逃げ去った中で、十字架にはりつけにされてお亡くなりになったからです。復活したイエスが、裁きをもたらすためにやって来たとしても不思議ではない状況で、「あなたがたに平和があるように」と言われたのです。

どんなに弟子たちは救われたことでしょうか。自分たちの弱さや罪を嫌でも思い出すことになる場面で、イエスは何も責めず、ご自分から近づいて和解の手を差し伸べられたのです。「手とわき腹とをお見せになった。」(20・20) イエスは、どんな場面にもご自分を和解の道具として与えてくださり、そこに平和をもたらしてくれるのです。

これが「神のいつくしみ」の姿なのだと思います。わたしたちがいつくしみを注がれるのにふさわしいから神がいつくしみを示しているのではなく、まったくふさわしくなかったのに、みずから近づいてくださり、いつくしみの手を差し伸べてくださるのです。

弟子たちは、復活したイエスを通して、「神のいつくしみ」の姿を

間近に見ました。トマスが復活したイエスの最初の出現に立ち会えず、八日の後に出会った時も、頑なに心を閉ざしていたのにイエスが近づいてその心に触れ、いつくしみの手を差し伸べ、平和の絆で結び合わせたのです。弟子たちは二度にわたって、神が人間にどのようなにいつくしみを示されるのかを体験しました。

弟子たちは、自分たちの体験を人々に届けに行く使命を受けます。神は人間がいつくしみを注ぐのにふさわしいからいつくしみを示したのではなく、まったくふさわしくなかったのにいつくしみの手を差し伸べられた。この体験を人々に届けに行くのです。

その第一の方法は、イエスに注がれた聖霊によって、人々の罪を赦すということでした。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(20・22-23) この使命は選ばれた弟子たちを通して、また弟子たちの後継者である司教と、その協力者である司祭によって届けられます。

信徒はどうでしょうか。信徒もまた、神のいつくしみを人々に示すために、互いにゆるしあい、また家族でゆるしあい、平和の絆を保つようにすることができます。もう1つ、すべての信徒にできることがあると思います。それは、今こうして集っているミサに、より多くの人を導くことです。

復活したイエスは、祭壇上で特別のいつくしみを示してくださいます。それは、十字架上で一度きりささげられたいけにえを、繰り返し祭壇上でささげてわたしたちを恵みにあずかせてくださいます。ミサは、みことばと聖体によって神のいつくしみを最高に表す祭儀です。このミサに集う人は、男性も女性も、子供も大人も、健康な人も病人も、互いに平和のあいさつを交わし、すべて平和の絆で結ばれるのです。

わたしたちはこのミサに、より多くの人を導く必要があります。少なくとも、声をかけることはできます。「神のいつくしみが特別に示されているミサに、あなたも来てみませんか。」こんな形式ばった言葉でなくてもよいので、あなただったらどんな声をかけられたら「一度行ってみようかなあ」と思うか、それを言葉にしてほしいと思います。

みなさんの近くに、ミサの中で示される神のいつくしみに触れてもらいたい人はまだまだいるはずです。あなたが、みことばと聖体によって神のいつくしみを感じることができるなら、ぜひ身近な人にも同じ体験ができると伝えに行きましょう。あなたがミサの中で味わっている神のいつくしみが、人々に神のいつくしみを届ける何よりの力の源です。



復活節第3主日 (ルカ 24:35-48)

主イエス、聖書を開いてわたしたちに話してください

月曜日にいつもの趣味ができないまま週末が来てしまい、せめて土曜日くらいは気晴らしを、とっていたところをがまんして説教作りに時間を取ったにもかかわらず、どうしてもとっかかりが見つかりませんでした。そこで不本意ながら、6年前の説教を参考にさせてもらいたいと思います。

復活節第3主日は、長崎教区では1つの特別な意味を持つ日曜日です。毎年同じことが繰り返されているのですが、御復活の2週間後というのは、司祭の異動の日です。カトリック教報ですでに詳細は御覧になっていると思いますが、たくさんの小教区が異動になっていました。

目を引いたのは、今年は浦上教会、大浦教会、稲佐教会に勤めておられた司祭とカトリックセンターの司祭1人の合計4人が引退をされたことです。ここ数年、教区の重石となってくださっていた方々が次々と引退され、長崎教区のご意見番はこれから誰が背負ってくださるのだろうかと心配になります。教区も一つの組織ですから、「ご無理ごもつとも」「はいはいその通り」という方々ばかりでは心配になります。

今日、福音朗読の中でわたしの目に留まった箇所は、最後の部分です。「そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」(24・45-48)

この箇所を取り上げたのは、イエスがご自身の復活を弟子たちに説明するのに、(聖書に)「次のように書いてある」と仰った点が、興味を引いたのです。イエスは復活の出来事を弟子たちに悟らせるために、聖書を引用したのです。

別に気になる点などないと思われるかもしれませんが、けれども、復活したイエスは目の前にいるのに、出来事を悟らせるのに聖書に頼って説明しているのです。手と足を見せるとか、焼いた魚一切れを弟子たちの前で食べるだけでは、弟子たちの心の目を開くには十分ではなかったということになります。

この問題を解決するには少し説明が必要だと思います。朗読された福音書はルカ福音書です。ルカ福音書の朗読に耳を傾けた人々は、ギリシャ語を話す人々で、ユダヤ教の教えを知らない異邦人でした。ルカ福音書の読者には、旧約聖書の予備知識は少なく、どんな小さなことでも聖書の知識から説明が必要でした。

ですから、イエスの復活を語るために、ルカは読者として念頭に置いていた異邦の民に分かるように説明をしなければなりません。そこでルカは、イエスが弟子たちに説明している場面を取り上げているにもかかわらず、聖書の説明を土台にして復活の出来事を悟らせようとしてい

るイエスの姿を描いたのでした。

もう少し踏み込んで考えるなら、ルカ福音書の読者となっている人たちと時代も場所も離れ、文化や歴史の土台も根本から違っているわたしたちにもイエスの復活を悟らせるために、ルカは聖書に書かれていることを根拠にして、弟子たちに出来事を解き明かすイエスを描くのです。実にこの 2000 年代に生きているわたしたちのためでもあるのです。

このことから伝わってくるのは、イエスの復活は直接その時代に見た人たちだけが理解できるというものではなく、聖書を丹念に読み返すなら、聖霊に照らされて、あらゆる国、あらゆる時代の人々が理解できるものなのだよということです。イエスの復活は、聖書を丹念に開くなら、当時の人々と同じようにわたしたちも悟ることができる神秘的なのということです。

今週の朗読個所の狙いが理解できると、わたしたちにも大きな励ましを与えられます。どこかでわたしたちは、イエスの復活を当時の人々のように大胆に証言するのはちょっと難しいのではないかとひるんでいるのだと思います。ひるんでいるだけではなく、「わたしたちはその場にいなかったのだから、当時ほど宣教が成功しなくても仕方がないよ」と思っているのではないのでしょうか。

その、ちょっとした「諦め」「後ろ向きな態度」に、ルカは釘を刺そうとしているかもしれません。「イエスの復活を今の時代に伝えるのは難しい。当然だとあなたは思っているのか。聖書に書いてあるではないか。聖書を丹念に読めば、今の時代でも十分に理解できる出来事ではないか。」今週の朗読はそんな励ましを与えてくれているなあと思いました。

与えられた朗読個所に耳を傾けて、わたしたちには、受けた信仰をしっかりと生きて、告げ知らせる使命があることをあらためて確認しました。イエスは復活の出来事を目撃した人にも、聖書を解き明かして復活の出来事を説明しました。

わたしたちも、みことばの力に信頼して、勇気を持ってイエスの復活を告げ知らせる者になりたいと思います。イエスの復活を告げ知らせようとするわたしたちに、イエスはいつも心の目を開こうと働いてください。



復活節第 4 主日 (ヨハネ 10:11-18)

あなたは命をどこに置きますか

今年の復活節第 4 主日の福音朗読は、「良い羊飼い」として自分を示すイエスの姿が描かれています。「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」このイエスのみことばに分け入っていきたいと思います。

去年の同じころの話ですが、6 月には毎年教区司祭の黙想会が入ります、気がけておいてくださいと言ったのに、今年の黙想会の案内を見ると 5 月 26 日から 4 日間となっていました。

まるでわたしが嘘ついたような格好になっていますが、去年話した時点では毎年そうだったのです。もはや、長崎教区には決まりごとは何も通用しないのだと思いました。

黙想会の前日 5 月 25 日(月)に、黙想会とは全く関係ないですが、気になる予定が入っています。西日本の司祭たちが長崎に集まって、教区対抗のソフトボール大会です。2 年に 1 度の交流会なのですが、前回長崎教区チームは 20 代 30 代でチームを組んだので呼びがかりませんでした。

ところが、前回のチームがあまりに強すぎて、よその教区(例えば福岡教区)から楽しくないと不満が出たそうです。そこで長崎教区のチームがあまり強くないように配慮することになり、40 代 50 代の司祭に選手に出ろという命令が下りました。秋のソフトボールの頃にしか練習していないので怪我しないようにこれから準備しますが、内心は「今回のチームも強すぎると言わせてやる」と意気込んでいます。

今週末から聖母月に入ります。どうぞ、ロザリオの信心に都合付けて参加してください。なお聖母行列ですが、月の半ば 5 月 17 日の午後 4 時から行列を開始、その後引き続き主日のミサとしたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(10・11) 日本語で「命を捨てる」と訳された部分は、要らなくなったものを捨てることと勘違いされやすいので、本来の意味までたどって理解しておく必要があります。

ギリシャ語の聖書に当たってみると、「命を捨てる」とは違った印象を持つはずで、わたしが所有しているギリシャ語の聖書には英訳が付いていて、**"The Good Shepherd lays down His life for the sheep."**とあります。日本語ですと「良い羊飼いは羊のために命を置く」となるでしょうか。

「命を捨てる」ではなく「命を置く」と訳せば、印象はがらっと変わるはずで、イエスはなぜ命を置くのでしょうか。イエスはどこに、いのちを置くのでしょうか。

イエスがご自分の命を置く理由は、羊のためです。羊を守るため、羊を愛しておられ、羊を導くためです。羊は、弱い動物なので、羊飼いに守られなければ身を守ることができません。雇い人のように羊を置き去りにしていく人のもとでは、生きていけないからです。

もう一つ、イエスは「わたしは命を、再び受けるために、捨てる」(10・17)と言っています。これはイエスがどこに命を置くかにつながっていますが、「命を捨てる」のではなく、「命を置く」から、再び受けることができるわけです。するとますます、イエスがどこに命を置くかは大事になってきます。

どこに、イエスは命を置くのでしょうか。それはイエスが置いた命を、御父がたしかにお受け取りになる場所のはずです。イエスが命を置く場所は十字架です。十字架の上に置かれた命を、御父がすべて受け取り、そしてイエスにお返しになるのです。

イエスは良い羊飼いととして、わたしたち羊のために命を置いてくださいました。わたしたちも、いつか命を置く必要があります。どこに、命を置くのでしょうか。わたしたちの命を受け取り、再びそれを与えてくださる方のもとに置くべきです。そのお方とは疑いもなく、イエス・キリストです。

もう少し踏み込んで考えると、わたしたちは明日をも知れぬ命を生きています。いや、今日を無事に終えることすら、約束できない身なのです。ですから、日々わたしたちは自分の命をイエス・キリストに置いて生きていく。そういう覚悟が必要なのではないでしょうか。

わたしたちキリスト者が確実に自分の命を日々イエス・キリストに置いて生きる時、世に対して証しを立てることができます。次のような証しです。「わたしたちは今日の命を、イエス・キリストに置いて生きています。イエス・キリストに命を置いて生きるなら、たとえ今日で命が尽きようとも、イエス・キリストが命を受け取ってください、再び命を与えてくださるからです。あなたはどこに、いのちを置いて生きていますか。」

わたしたちキリスト者が例外なく、命をイエス・キリストに置いて生きる時、証しは力あるものとなるでしょう。あなたは命を、どこに置いていきますか。その答えが決まれば、イエスが羊のために命を捨てる意味も、身近に迫って来ると思います。



復活節第5主日 (ヨハネ 15:1-8)

ぶどうの木につながるなら、無限の恵みにあずかれる

今年の復活節第5主日には、「イエスはまことのぶどうの木」このたとえが語られました。ぶどうの木につながっている生活には、どんな素晴らしさがあるのかを学ぶことにしましょう。

先週子どもたちのミサのときに「母の日・父の日」について、それと「子どもの日」についての質問を投げかけてみました。「5月には母の日、6月には父の日が来ますね。お父さんお母さんのために何をしてあげますか？」

すると思ひ思ひの答えが返ってきました。「お手伝いをする」「ご飯を作ってあげる」「プレゼントをする」これらは、中田神父にとって合格点の答えですが、根本的なものが欠けていると思ってもう少し追及しました。「みんなが言っているお手伝いやご飯作りやプレゼントは、何のためにしてあげるわけ？」ここで子どもたちは行き詰ります。

そこで助け船を出してあげました。「それらはお父さんお母さんに感謝を表すためですね。感謝の気持ちを、お手伝いにして伝えたりご飯を作って伝えたり、プレゼントで伝えるわけよ。では、『子どもの日』にはお父さんお母さんはみんなに何をしてあげるのでしょうか？」この質問には全く思い付くものがなかったようで、皆押し黙ってしまいました。

「子どもの日は、お父さんお母さんがみんなに感謝をする日ですか？『太郎君、ありがとう』って、お父さんが言う？どうも違うよね～」こういう促しでは何も思い付かないようなので、わたしの答えを暗示しました。「子どもの日は、お父さんお母さんたちが子どもにとっていちばん良いと思うことをしてあげる日だと思うよ。」

今日はここからが問題です。では「子どものためにいちばんよいと思うこと」とは何なのでしょう。張り切ってご馳走してあげることでしょうか。奮発してお小遣いをあげることでしょうか。欲しがっているものを買い与えることでしょうか。もしそれらの答えだったら、わたしがここまで時間を使って問いかけるのでしょうか？

わたしは、子どもと一緒に祈るひと時を作るのだと思っています。年に一度もでもいいから、親子全員で、離れていても時間と都合を合わせて、朝夕祈ったことがあるのでしょうか。年に一度でも、親子全員で、子どもの日にミサにあずかったことがあるのでしょうか。わたしは、子供に神の恵みが特別にあるようにと祈ってあげることが、子どもにとっていちばん良いことだと思っています。「神父さんの考えは分かりました。でもわたしたちの考えは違います」そうおっしゃるのでしたら、それ以上は言いませんが。

さて福音に戻りますが、イエスはまず大前提として「わたしにつながっていないさい」(15・4)と招きます。恵みを受け、実を結ぶためにはイエスにつながっていないならば始まらないのです。その上で「人がわた

しにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」(15・5)と導いていきます。ここではもう、豊かに実を結ぶことは約束されているかのように言われています。

なぜ、イエスはご自分につながっていれば豊かに実を付けること間違いなしと約束できるのでしょうか。それは、御父と御子イエスの関係が説明してくれると思います。

イエスは、無限の力と無限の恵みを持っておられる御父の独り子です。御父の無限の恵みを受け取ることができるのは御子唯一人です。ですからわたしたちがイエスにつながっており、イエスもまたわたしたちにつながっているとすれば、イエスによってわたしたちは御父の無限の恵みを受け取ることができるのです。

わたしたちは限りある存在、不完全な存在です。ですから御父の無限の恵みを最大限受け取ることにはできないので、わたしたちが恵みの受け取り手であるなら豊かに実を付けることはできなかつたかもしれません。けれども、イエスにつながっているなら、イエスがわたしたちのための恵みを御父から受け取ってくださるので、豊かに実を付けることが可能になります。

このことを目に見える形にしてくださったのが秘跡だと思います。神の無限の恵みが、わたしたちがイエスにつながっていることで注がれ、秘跡の効果として現れます。たとえば叙階の秘跡をうけた者は、罪を赦し、聖体祭儀を挙行し、結婚を望む男女を祝福し、司教にあっては自分の協力者である司祭を生み出すことができます。これらは、神の無限の恵みがなければ不可能ですが、神の無限の恵みは、わたしたちがイエスにつながっていることで初めて受け取ることができるようになるのです。

務めを果たすのに不十分な存在である人間が罪を赦し、聖体祭儀を挙行し、司祭をこの世に生み出す。このような無限の恵みは、イエスにつながっていればこそ可能なのです。

神は、人間が豊かに実を結ぶ方法を用意してくださいました。それはイエス・キリストにつながっていることです。イエスにつながり、イエスもわたしたちにつながっている時、初めてわたしたちは神の無限の恵みにあずかることができるのです。

5月5日子どもの日です。神とつながっている時に無限の恵みに触れることができることを、両親の言葉で子どもに伝えてください。子どもたちに、神の無限の恵みにあずかる道は神とつながっていることだと、自分の言葉で伝えてください。そして家族皆が、神に感謝することを学ぶ場として、家族で祈るよう取り組んでください。

子どものためにいちばん大切なことは何か、子どもの日によく考えるようにしてください。のちに子どもたちが、自分の親は自分たちのためにいちばん大切なことを子どもの日にしてくれたと感謝する日が来ることを、心から願っています。



復活節第 6 主日 (ヨハネ 15:9-17)

最も価値ある見方で人を見る、接する

今年の復活節第 6 主日は、「互いに愛し合いなさい」というイエスの最高の掟が示されました。わたしたちがイエスの掟を喜んで受け入れ、実行するきっかけを得ることにしましょう。説教案は 3 年前のものを参考にしています。

聖母月、夕方のロザリオの信心が始まりました。5 月初め、趣味の釣りで鯛を 4 枚釣り上げたので、浜串教会のロザリオに参加した人たちに配りました。ほかにイトヨリ、ホウボウなども釣れていました。

争いにならないように「5 月中に 50 枚くらい鯛を釣る予定ですので、慌てなくて結構です。今日当たらなかつた人も、また次のチャンスがあります」と大見えを切りました。約束を果たせなかつたらごめんなさい。

今日母の日なので、実家に立ち寄ってついでに晩御飯を一緒にしようかと思っています。カーネーションを買って行くのは恥ずかしいので、できれば魚を釣って、わたしがさばいて、お刺身をご馳走してあげようと思っています。そういうわけで、本日ミサ後に釣りに行くのをお許してください。

選ばれた福音朗読の中で、イエスの次の語りかけに注目しました。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」(15・12)

イエスは掟を弟子たちに示しました。「掟」ということばは、日本語では「社会の定め、決まり」という意味ですが、聖書の世界での「掟」は、神が人間に与える指示、イエスが弟子たちに与える指示という意味があります。人間の掟を破っても、人間として生きることはできますが、神の掟、イエスの掟を破れば、人間は神との絆、イエスとの関わりを失ってしまい、霊的に死んでしまうのです。

すると、イエスが弟子たちに「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」と仰ったのは、たいへん重いことなのだと分かります。互いに愛し合う生き方をしなければ、わたしたちは神との絆、イエスとの絆を失ってしまうのです。

人を、愛する相手として見ること。わたしは、この見方が他のどんな見方よりも人を価値あるものとして見る生き方だと思います。わたしたちはこの世界の人々をいろんな見方で見ています。見知らぬ人、知り合い、友人、親戚、兄弟、家族などです。

その人をどう見るかで、わたしたちは接し方も変えています。見知らぬ人には、それほど親身になることはありませんが、兄弟や家族には、最後まで心配したり面倒を見たりするのです。その中で、愛する人への接し方がいちばん相手を大切にします。イエスは、互いが互いを、愛する人として接する。これを掟として残しました。

それは、人を、最も価値ある見方で見なさいという招きでもあるの

です。いちばん相手を大切にする見方、いちばん相手を価値ある者とする見方を、わたしたちに求めているのです。

実際、イエスがそのようにわたしたちを見てくださいました。ある時ファリサイ派の人が、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。」(ルカ 7・39) という場面がありました。イエスはこの時も、女性をいつものように価値ある人として見てくださいました。

また神殿でファリサイ派の人が祈った時も、「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。」(18・1) と言いましたが、イエスは徴税人を価値ある者としてくださいました。イエスの模範に、わたしたちは謙虚に従う必要があります。

わたしたちの生活を振り返ってみましょう。誰か自分よりも劣る人を心の中に置いて、わたしはあの人よりはましだと、自分を慰めてはいないでしょうか。イエスは違う生き方を求めています。あなたが自分より劣ると思っているその人を愛してあげなさい。自分よりも劣る人としてではなく、価値ある人として接しなさい。そう呼びかけるのです。

イエスの呼びかけは守れる人だけ守ってくださいという呼びかけではありません。払える人だけ払ってくださいという指示ではありません。すべての人が、神との絆を失わないために、神の愛にとどまって生きるために、イエスが求めている指示なのです。

わたしは、毎日の生活の中で接しているいろんな人をどのように見ているのでしょうか。いちばん価値のある見方、つまりその人を愛するという態度で接してみましょう。すると、今までは見落としていた目の前の人の価値、良い所が発見できるでしょう。そして互いに愛し合う生き方を選ぶなら、わたしたちはイエスと心を通わせる友となれるのです。

今週は、世界広報の日でもあります。イエスが自ら模範を示し、掟として与えた互いに愛し合う生き方、相手を価値ある人として接する生き方を生活の中で証しして、この世界にイエス・キリストを告げ知らせる者となれますように。そのための力をミサの中で願いましょう。

主の昇天(マルコ 16:15-20)



主の昇天 (マルコ 16:15-20)

主は今も共にいて、働いてくださる

主の昇天の祭日を迎えました。選ばれた朗読箇所から、弟子たちの派遣に注目してみたいと思います。弟子たちはイエスから派遣され、派遣された先で、復活した主の現存を感じ、またそれを次の派遣先で伝えることとなります。

先月の終わりだったでしょうか、木曜日の朝ミサをしていたときに「ん？この人は浦上教会の信者さんのようだが」と思う人を見かけました。でも浦上の信者さんが浜串の朝ミサにいるはずないよねーと思いつつも、気になったのでミサから帰るその人に声をかけてみました。「もしかして、杉山工務店の杉山さんですか？」

「覚えてくれていましたね。」「やっぱりそうだ。いや一似ているなあと思って。旅行ですか？」「姉に会いに来ました。」「今も働いているのですか？」「いや、がんを患ったので仕事は辞めました。でも信仰のおかげで病を克服しました。」「大変でしたね。わたしは今でも高尾地区の集会で披露してくれた歌を覚えていますよ。曲がりくねった道。」

浜串でばったり会ったこの人は、当時高尾地区の集会のたびに一風変わった歌を披露してみんなを喜ばせていたのです。正確に覚えているわけではありませんが、次のような歌でした。「昔あるところに、背の高い小人がいた。背の高い小人は、曲がりくねったまっすぐな道を、上へ上へと下って行った。」続きがありますが、ここまでしか覚えていません。

奇妙な歌でしたが、いつも杉山さんがこの歌を披露して、だれもがこの歌に引き込まれていきました。当時は「ユーモアにあふれた歌」それくらいしか思っていないでしたが、思い出すと味わい深い歌だと思っています。

主の昇天について朗読箇所が教えることはわずかです。「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。」(16・19) おそらく、福音記者はイエスがどのように天に上げられたかにはそれほど興味がないのでしょう。

昇天の詳しい様子よりも弟子たちを派遣し、弟子たちの語る福音を信じる者に伴うしるしを詳しく語っています。それは、イエスが天に上げられても、弟子たちとの結びつきは何も変わらないから安心しなさいと言いたいのだと思います。

「信じる者に伴うしるし」ですが、一つ一つの例よりも、これらはイエスが共にいなければ決して起きない出来事だということが大切です。復活した主は、弟子たちと共に働くのです。

しかし一つ問題があります。弟子たちは復活した主を見たときに全面的な信頼を寄せていたわけではありませんでした。今週の朗読箇所の直前、マルコ 16 章の 14 節には「その後、十一人が食事をしているとき、イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめになった。復活さ

れたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。」とあるからです。

イエスは天に昇られ、弟子たちを派遣し使命を果たさせますが、弟子たちが復活したイエスを全面的に信じていたから派遣したわけではないのです。派遣された弟子たちは宣教活動をしながら、まだまだ不十分であった復活したイエスへの信仰を固めていったのです。

イエスが天に昇られ、目で見える姿では弟子たちの前からいなくなりましたが、弟子たちはイエスが共に働くことを、全世界で、すべての造られたものに感じ取ります。福音を伝え続ける中で、弟子たちは復活したイエスとの絆をますます強めていく。イエスは、弟子たちを育てるにあたって、このような方法を好まれたのだと思います。

弟子たちの体験は、次の世代に受け継がれていきます。イエスが共にいなければ起こり得ない出来事を、次の世代も体験し、伝え続けていきます。それはわたしたちも同じことだと思います。わたしたちにとって、イエスがいなければ起こり得ない出来事は秘跡です。秘跡の恵みにあずかりながら、次の世代にも体験を語り継ぐ者となる必要があります。

イエスは天に昇られました。天に昇っても、イエスがわたしたちと共に働いてくださることを証しするのはわたしたちです。わたしたちが、イエスが共に働いてくださることを、イエスを知らない多くの人に、わたしたちの次の世代に、確信を持って知らせることができるように、今日のミサの中で恵みを願いましょう。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 15:26-27;16:12-15)



聖霊降臨の主日 (ヨハネ 15:26-27;16:12-15)

聖霊の炎で造り替えられる

めったに味わえないイセエビとアワビを先週いただきまして、木曜日の福見のミサで、保育園児と小学生を前に、イセエビをいただいたことをわたしなりに披露しました。

浜串の司祭館のチャイムが鳴ったので誰かなあと思って二階から下りて行ったら、イセエビが玄関に横たわり、苦しそうにしていた。よく見ると足が何本かちぎれている。

これはきっと車にひかれてしまったに違いない。そのままにしていたら死んでしまうので、わたしがイセエビの耳元で「食べてもいいですか」と聞いたら、「うん」と言った。そういう話を披露しました。

保育園児はポカンと口を開けて聞いていましたが、小学生は全員わたしに反論があるといった顔でした。その中で学年がいちばん下の子供が、「イセエビがチャイムを押すはずがない。イセエビが『うん』と言うはずがない」と、最後までわたしの主張に異を唱えていたそうです。

木曜日は、全員そろってわたしのもとで要理のお勉強ですが、上級生がわたしを教え諭すかのように「神父さま、イセエビはチャイムを押したりしませんよ。押せるはずがないでしょ」と釘を刺されました。「わたしが下りて行ったときにイセエビがいたのだから、イセエビが押したに違いない」「イセエビはそんなことしません」子供たちはわたしの嘘を見破れるほど立派になったのだなあと感心しました。

一方で子供だましのような嘘を言い、一方で福音の学びを語る主任司祭の舌は、どうなっているのでしょうか。ですが子供にも分かるような嘘を言うのはわたしに限ったことではないでしょう。どんな人にも、聖霊降臨の恵みに触れて、変わっていく必要があるわけです。その聖霊降臨は、わたしたちをどのように変えてくださるのでしょうか。

本日聖霊降臨の主日の第一朗読では「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」

(使 2・1-4) とあります。

「炎」は、熱を伴うものです。聖霊が使徒たちに降ると、彼らに熱意が注ぎ込まれたのでした。また、聖霊は舌の形で現れたということですから、この「炎のような舌」は弟子たちの舌を「熱意をもってイエスの復活を宣べ伝える舌」に造り替えたということでしょう。

ところで復活後の弟子たちについて、弟子たちの人間的な部分、イエスの復活に遭遇してもなお簡単には変わらない部分を書き記されています。ヨハネ福音書によると、「シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。シモン・ペトロが、『わたしは漁

に行く』と言うと、彼らは、『わたしたちも一緒に行こう』と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった」(21・2-3)とありまして、復活したイエスに出会った後も、自分たちの食べ物心配がまず頭にあったのです。

この後イエスが岸边に立ち、何も魚が取れなかった弟子たちに「子たちよ、何か食べる物があるか」(21・5)と言いました。ここでも復活したイエスは弟子たちの心配を取り去ってくださるのですが、「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目」(21・14)だったのです。弟子たちでさえも、聖霊による照らしがなければなかなか変わらないことが暗示されていると思います。

聖霊降臨を身近に感じるために、例えを見つけました。炎を入れて造り替えられるものと言ったら何でしょうか。わたしが思い付いたのは、刃物・包丁です。たとえば出刃包丁は、火で精錬されて強く切れ味の鋭い包丁に生まれ変わります。わたしは左利きで、自分に合った包丁を持っていなかったのですが、チャンスを与えられて左利きの包丁を作ってもらい、愛用しています。すばらしいこの包丁は、火で精錬されて、単なる鉄の塊から、切れ味鋭い刃物に生まれ変わったのです。

聖霊降臨は、わたしたちに同じ体験をさせてくれるのだと思います。炎のような舌が一人一人の上にとどまります。特に、堅信の秘跡を通して、聖霊がとどまり、わたしたちの舌を火で精錬して、復活したキリストを宣べ伝える者、キリストの兵士としてくださるのです。火で精錬された包丁が、手入れを怠らないならばいつまでも鋭い切れ味を保つように、聖霊という炎で精錬されたわたしたちの舌は、わたしたちが悪意で間違った使い方をしない限り、いつまでもキリストを伝える舌であり続けるのです。

福音朗読の中で聖霊は、「真理の霊」「真理をことごとく悟らせる霊」として示されています。洗礼を受けたわたしたちには、すでに真理があふれるほどに注がれているのですが、わたしたちは神がお与えになる真理に疎く、たとえその真理にたどり着いても語る言葉を持ち合わせていません。そこでイエスは真理をことごとく悟らせる聖霊を遣わし、わたしたちを造り替えてくださいます。

問題は、わたしたちが心を開くかどうかです。聖霊という火によって精錬されることを喜んで受け入れましょう。わたしたちの舌が、キリストを宣べ伝える舌となることを喜びましょう。福音朗読の前に歌った「聖霊の続唱」を、心の中で歌い続け、わたしたちの舌が、いつもみことばを語れる状態に保たれるよう、今日のミサの中で願ひましょう。



三位一体の主日 (マタイ 28:16-20)

司祭修道者信徒がみ摂理に信頼して生きる

今週は三位一体の主日です。父と子と聖霊の三位は一体であり、同じ思い、同じ働き、同じ栄光に満ちておられます。父と子と聖霊の働きが唯一なので、どの時代の人、どの国の人、三位一体の神を信じていることができるのです。わたしたちは、三位一体の神を信じていることを、どのように証しすることができるでしょうか。

月曜日から金曜日まで長崎にいました。月曜日は、西日本の司祭たちが 90 人集まって教区対抗ソフトボール大会でした。わたしは長崎教区チームに出たのですが、福岡教区と対戦した第一試合、福岡教区と同級生ピッチャーの球をまったく捉えることができず、3 打席連続ピッチャーフライ。次の試合からは一切使ってもらえませんでした。

大会は非常に熱の入った好プレーの連続でした。面白いプレーもありました。高松教区・広島教区連合チームが、長崎教区チームと対戦していた時のことです。わたしは第一試合で大ブレイクだったのでベンチに入れず、教区報の写真を撮っていたのですが、高松教区・広島教区連合チームが、長崎教区チームのピッチャーの足元を狙えということで、バントを仕掛けてきました。

ルール上、スローピッチの試合でバントは禁止なのですが、他に長崎教区チームに付け入る隙がないと判断したのでしょう。しかも 1 イニングに 3 人バントを仕掛けてきたのです。狙いは的中、2 人まではバントで出塁できました。

味をしめたか、3 人目の打者である高松教区司教さまもバントして走り出したのですが、足が絡まって半分も行かないうちにドラム缶のように転がってしまいました。ちなみに、足元を狙われた長崎教区のピッチャーとは、今年浜串小教区の黙想会に招いた先輩です。

火曜日から金曜日は、教区司祭の黙想会でした。イエズス会の大木神父さまが黙想指導をしてくださいました。エリート校である栄光学園とか広島学院で教鞭をとり、その後ネパールで教育者として、さらに障害者の育ての親として長く献身した方です。ネパールで働くようになったころには、栄光学園や広島学院での教え子たちが社会のあらゆる面で活躍していて、大木神父さまを全面的に支えてくれたそうです。

たとえば、ネパールの学校教育に 20 年間使用した校舎が老朽化して使えなくなり、1 千万円の費用を工面しなければならなくなりました。大木神父さまは 1 日で工面して帰って来ると告げて首都カトマンズに向かいます。みんなはそんなことできるはずがないと思っていましたが、カトマンズに駐在する日本大使はなんと栄光学園の教え子だったのです。すぐ日本政府の支援を取り付けてお金の目処がついたそうです。生涯のすべてが、神さまの摂理を感じる体験だったと言っていました。

わたしは今年の黙想会の中で、神さまの摂理を深く信じる司祭として生きるようにという教えを学んで帰りました。どんな場面でも、神さ

まの摂理の中にある。それを信じて生きる司祭でなければならないということです。摂理に信頼して行動するなら、きっと神さまが先に立って道を開いてくださる。この信念に揺らぎのない司祭であれと、89歳の大本神父さまは教えていたのだと思いました。

今週与えられた福音朗読は、弟子たちに対し、宣教してすべての民をわたしの弟子に招くようにと命じています。これは、弟子たちが信じたことを証しし、同じ信仰に招くということです。一人ひとりが信じるものを信じればよいというのではなく、明確に、父と子と聖霊を信じるように証を立てる必要があります。

どのようにして、証を立てればよいのでしょうか。証を立てるのは三者です。司祭、修道者、信徒です。三位一体の神が唯一であるように、そのように司祭、修道者、信徒の三者が唯一の証を立てるならば、わたしたちの証はより説得力を持つはずです。

どのように証を立てるのでしょうか。司祭、修道者、信徒はそれぞれ置かれている場所が違っていて、同じ行動を起こすことは困難です。それでいて、三者が唯一の証を立てることは可能でしょうか。

どのような道であれば、三者が唯一の証を立てることができるでしょうか。黙想会で学んできたことをここで活かしたいと思います。神さまのみ摂理に全面的に信頼して生きること、これならば三者は唯一の証を立てることが可能です。司祭も、修道者も、信徒も、神さまの計らいはわたしたちを導くのに十分であると確信し、少しも疑いなく生きることです。

神さまは、どんな場面をも御手の中に治めておられる。だからわたしたちは心配せず、置かれた場所で精いっぱい生きよう。この基本姿勢を崩さないなら、キリストを知らないまま生きている人々もわたしたちの生き方を見て「どこに、あなたたちの生き方の基本があるのですか。なぜ司祭も修道者も信徒も、同じ生き方を貫くことができるのですか。その生き方はわたしにも可能でしょうか」このように考える人が現れるに違いありません。

御父御子聖霊の三位一体の神は、わたしたちが唯一の証を立てて、父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、だれもが生き方の基本に取り入れることができる唯一の道に人々を招くよう常に助けをくださいます。「世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28・20)と仰ったイエスに信頼を寄せましょう。わたしたち三者が、唯一の生き方を証しすることで、三位一体の神がおられることを人々に示すことができるように、力と勇気を願いましょう。



キリストの聖体 (マルコ 14:12-16,22-26)

一度きりでも価値を失わないご聖体

今日キリストの聖体の祭日です。これまでどのような心構えでご聖体に近づいていたかを振り返ってみましょう。そして本来はどのような心構えで近づくべきなのかを考えることにしましょう。イエスは常にご自分のすべてをご聖体を通して与えようとしておられます。イエスの深い愛は、わたしたちにどのような答えを求めておられるのでしょうか。

今から8年前でしょうか、司祭叙階式の説教を任された受階者の主任司祭が行った説教は実に心に残るものでした。司祭に叙階された人がイエスの僕として真っ先に行くわざはミサである。叙階の秘跡を受ければ、ゆるしの秘跡をおこなうことも、病者の塗油を授けることも可能だが、あらゆるわざの中で、真っ先におこなうのはミサである。

そして、もしもの話であるが、叙階の秘跡を受けたその人が、真っ先におこなうそのミサを終えて、死んでしまったとしても、その1回のミサのためにその人が叙階の秘跡の恵みを受けたことには価値がある。

たとえその後ゆるしの秘跡をおこなえず、病者の塗油も授けずにたった1回のミサをささげただけで死んでしまったとしても、その人が司祭になったこと、叙階の秘跡の恵みを受けたことには十分価値がある。およそこのような内容の説教だったと思います。

それまでに何度も叙階式の説教を聞いたにもかかわらず、わたし自身の司祭叙階の時の説教も含めて、どれ1つとして覚えていないのに、その時の説教は今も思い出すことができます。わたしにとって心打たれる説教でした。なぜなら、ミサをささげるときの心構えをもう一度考え直すよい機会になったからです。

仮に年間400回くらいミサをささげてきたとして、22年の司祭生活で8800回くらいはミサをささげているわけです。しかしながら、「最初の1回のミサをささげて死んだとしても、その人が司祭に叙階されたことには十分意味がある。ミサはそれほどに価値あるものだ」という理解にはたどり着いていませんでした。それほどミサを、何千回もささげているのに。心構えが足りていなかった自分に、精神をたたき直すような強さで迫って来たのです。

まさに、今日祝っているキリストの聖体の祭日に求められる心構えが、あの時の司祭叙階式ミサでなされた説教にまとめられているように思います。ご聖体は、御父にささげられた完全ないけにえであるイエス・キリストがとどまっている秘跡です。人類のすべての罪を完全に消し去るいけにえとなられたイエス・キリストがとどまっておられるのです。

また、ミサはイエスの死を通して新しい契約を成し遂げ、救いのわざを完成させた出来事を今に再現させる祭儀です。一度限りで、完全に救いを成し遂げた十字架上の出来事と同じ価値を持つ最後の晩餐です。これより尊いものがない最上の主の食卓です。そのミサが今ここにささげられ、その中で聖体が用意され、わたしたちは恵みにあずかるわけで

す。

1回のミサのために司祭に叙階され、命を召されてもそれでも価値があるミサであると、これまでわたしは考えたことがあっただろうか。恥ずかしく思いました。それほど価値があるのに、心は散漫になり、ミサの奉献文を唱える口は熱心さに欠け、聖体を高く掲げる手は力なく、聖櫃に向かう足取りは重くなることがあったのです。

一人ひとり思い出してみましょ。聖体祭儀と言われるミサに足を運びながら、ミサをさっさと終わらせて次は何をしようかと考えたことはないでしょうか。「今日は何時何分に終わった」と、ミサが行われたというミサの価値よりも、終わった時間のほうを気にしたことはないでしょうか。1日に2回ミサをささげることがあるわたしは、1回目と2回目では心の込め方が違ったのではないか。

これまでわたしたちがどのようにご聖体に近づいていたか、自分なりの反省が見つかったならば、これからどのように近づくようにすればよいかも見えてくると思います。このミサは旧約時代の過越の食事とも関係しています。わたしたちはご聖体に対するこれまでの不熱心さを超越して、熱心さをあらためて呼び覚まし、ご聖体に近づきましょう。

先週あたりにお知らせを入れるべきだったのですが、昨晚から今朝にかけて、青砂ヶ浦教会では召命祈願のため、徹夜での聖体礼拝を行ったそうです。熱心さをもって聖体により近づく、聖体から片時も離れない心を育てて、聖体の奉仕者である司祭・修道者を与えていただけるように願っての聖体礼拝でした。わたしも夜中の時間に1時間だけ参加させていただきました。聖櫃に納められた聖体から、参加している皆に、小教区全体に、恵みを注ぎ続けているのだなと感じました。

わたしたちに記念として残された聖体の尊さを考えてきましたが、最後に次のことに目を向けて結びたいと思います。イエスは最後の晩餐で杯を取り、「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」(14・24)と仰せになりました。今ここには、限られた人数しか聖体祭儀に集まっていませんが、もっと多くの人のためにも、ご聖体の恵みは流れ続けているはずです。恵みを知らずにいる多くの人々とご聖体の恵みの橋渡しをするのは、わたしたちです。ぜひここで受けた恵み、今心にある熱意を、出かけて行って人々に届けましょ。

祭壇で霊的に渡されるイエスの御体、流されるイエスの御血を、人々に届ける奉仕者にしてくださるように、聖体拝領を通して願いましょ。



年間第 11 主日 (マルコ 4:26-34)

多くのたとえで御言葉を語られた

今年の年間第 11 主日はマルコ 4 章の「成長する種」のたとえと「からし種」のたとえが語られました。神の国についてのたとえを語るイエスから、わたしたちが人に神の国を語る姿勢を学びたいと思います。

今週の福音朗読は、神の国についてのたとえ話が 2 つ挿入されて語られています。この朗読箇所を説明するのに、何か別の例えを話すということにすごく抵抗を感じました。

イエスが「神の国は次のようなものである」(4・26) とたとえ話を語る。イエスがたとえ話を語っているのに、わたしが「これは、たとえて言えばこのようなものですよ」と言うのはふさわしくないのではないか、たとえ話を台無しにすることにならないかと考えたのです。

イエスのたとえで、神の国は十分語り尽くされている。そう信頼して語られたたとえに向き合う必要があります。人が土に種を蒔きます。種は芽を出して成長します。成長の仕組みを知ることのできないわたしたちにはとても不思議に見えますが、いくらどうなっているのかを追及しても、わたしたちには解き明かせません。

けれども農夫は、この不思議な種の実りに信頼を寄せ、農夫にできること、すなわち水をまき、雑草を取り除くなどして世話をします。すると、種に書き込まれた神の設計図に沿って、確実に実を結んでいきます。

これが神の国の姿をうまく言い当てているとイエスは語ります。神の国(神の支配と言ってもよいでしょう)は目には見えず、いつ頃にどこまで及んでいるかを計算することもわたしたちにはできません。しかし神の国は、神が思い描いた設計図に沿って確実に広がりを見せるのです。わたしたちはただ、神の働きにそれぞれが協力するのです。

からし種が成長して空の鳥が巣を作るたとえも、不思議な出来事です。鳥は、どのようにして巣を作る技術を手に入れたのでしょうか。両親から巣のこしらえかたを学び、練習したのでしょうか。わたしたちはそれを知る方法がありません。神が鳥の本能に、巣を作る設計図を書き込んでおられるとしか説明のしようがないのです。

どんな鳥でも、雛を育てるために巣を作ります。わたしたちができるのはただ、鳥に巣作りの場所を提供することくらいです。人間はわずかしか協力できなくても、そのわずかな人間の協力の上に、神は驚くほどの働きを積み上げてくださいます。神の国は、人間が神の働きに協力するのを喜びつつ、神が描かれた設計図通りに広がっていくのです。

今説教を聞いている皆さんは、ここまでの話を聞いて、「今週の説教だったら、わたしでも話すことができる」とお考えのことでしょう。きっとその通りだと思います。イエスのたとえ話に、人間に過ぎないわたしがいったい何を付け加えたり差し引いたりすることができるでしょうか。

あえて、1つだけ言うとしたら、イエスが「多くのたとえで御言葉を語られた」（4・33）このことにじっくり留まってみるべきだということです。イエスは、実に的確に、神の国について、たとえ話を語られたのです。それは何を意味しているのでしょうか。

それは、イエスが神の国について、だれにも説明を受ける必要がないほど完全に理解しておられたということの意味をしています。完全に理解しておられるから、それをたとえを引きながら説明することができるのです。物事の本質を、的確に掴んでいるから、それをたとえを用いてわかりやすく説明することができるのです。

わたしたちの信仰生活を振り返ってみましょう。わたしたちは、信仰の遺産の一部でも、たとえを用いてわかりやすく説明することができるのでしょうか。たとえを用いてわかりやすく説明できるということは、たとえようとしている信仰の遺産を十分に理解していることを意味します。

わたしたちは祈りを大切にしています。祈りがいかに大切か、祈りが生活に何を添えてくれるのか、よくよく理解しているなら、それをたとえを用いて人に説明することができるはずです。

祈りは呼吸にたとえられます。人は呼吸をします。息を吸って、吐くことで、新鮮な酸素を体中にめぐらせます。呼吸することでぼんやりしていた頭はすっきりして、体も活力がみなぎってきます。そのように、祈りはわたしたちの魂に必要な酸素を行き渡らせ、魂の働きを活発にするのです。祈りを怠る人は、魂に新鮮な酸素が行き渡らず、不活発になるのです。このようなたとえは、祈りに冷淡な人にも通じるでしょう。

わたしたちは聖書にもっと親しむべきです。聖書に親しむきっかけは何度か用意してもらいました。聖書愛読運動や、浜串小教区独自の録音聖書での読み聞かせなどです。

聖書に親しむ人ことは、たとえるなら辞書を引いているようなものです。聖書を何度か通して読んでみて、わたしはそういう答えにたどり着きました。聖書に親しむと、自分が語る言葉、自分が人に伝えたい言葉を聖書から探すようになります。そうやって聖書から生活に必要な言葉を探すようになれば、ここまで聖書は人の生活を導くのだと、聖書に全く触れたことのない人も心を開くのではないのでしょうか。

信仰の遺産は、朽ち果てていっては何にもなりません。価値あるものだと次の世代に理解されなければなりません。そのためには、イエスが神の国を多くのたとえで語られたように、受けた信仰を十分噛み砕いて、次の世代に分かるようなたとえを添えて伝える必要があります。

どんなたとえなら、受けた信仰を十分に伝えることができるのでしょうか。「御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された」（4・34）と言われるイエスが、わたしたちにも照らしと導きをくださいます。信頼して、どんどんたとえを生みだして神の国を告げ知らせるものとなりましょう。わたしたち以上に、わたしたちを通して神は常に働いてくださいます。



年間第 12 主日 (マルコ 4:35-41)

イエスと向こう岸に渡る

年間第 12 主日は、「突風を静める」という物語ですが、わたしは違う言いかたで、テーマを示したいと思います。それは、「イエスと向こう岸に渡る弟子たち」です。弟子たちは、向こう岸に渡るという出来事の中で、弟子として訓練を受けたのだと思いました。

釣りに関して、海の上で耐えられる限界というのがかなり上がったと思います。たとえば言えば、イエスさまと一緒に船に乗っていたら「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言われそうな天気でも辛抱して釣りができるくらい時化に強くなりました。それがどんな役に立つのかと言われると困りますが、ほとんどの人が船酔いするような状況でどんな作業でもできるようになったとえば、何か役に立つかもしれませぬ。

ところで今日は父の日です。日頃の御苦勞を、家族でぜひねぎらってあげてください。または、お父さんがふだんは忙しくてできないことを、今日一日くらいは気の済むようにさせてあげてください。母の日と比べると、ちょっと影が薄いので、今日はお父さんに花を持たせてください。

福音朗読、イエスは弟子たちに「向こう岸に渡ろう」と呼びかけます。漠然と「向こう岸」と言っていますが、その意味は「イエスと一緒に渡らなければ渡ることができない場所」と考えられます。そのことを学ばせる機会として、嵐の体験があると考えるとよいのではないのでしょうか。ガリラヤでずっと漁師をしていた弟子たちでさえも、「おぼれそうだ」と感じるほどの突風を受けたのでした。

明らかに、人間の努力では乗り越えられない困難に弟子たちは置かれています。そんな中でイエスは眠っています。これは眠くて眠っているのではなく、しるしです。「人間の努力でこの困難はとて乗り越えられない。そこにイエスがおられる。イエスに信頼を寄せるべきである。」このことを教えようとしているのです。

イエスは「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに声をかけた時点で、これから起こることすべてをご存知でした。弟子たちが混乱すること。イエスにより頼めばすぐにでも助けてくれるのに、イエスに信頼を寄せる気持ちが湧かなかつたこと。イエスが嵐を叱り、すっかり風になってもまだイエスを信じられずにいることなどです。

突風に見舞われ、恐れで自分を見失い、イエスの一言で風がやみ、すっかり風になる。イエスが「向こう岸に渡ろう」と仰ったのだから、必ず渡ることができるはずです。それなのに弟子たちは、イエスがそばにいることを忘れるほど取り乱したのでした。

嵐のさなかに眠っているイエスの姿は、御父に信頼を寄せていることの表れです。イエスは、何が大切なのかを教えようとしているのです。乗り越えることができそうにない困難を前にしたとき、人はイエス・キリ

ストを通して御父に信頼を寄せる必要があるのです。

イエスの助けを受けて向こう岸に渡った弟子たちは、「向こう岸に渡る」つまり困難を乗り越えるためには、イエスに全面的に信頼を寄せることが必要であることを学びました。弟子たちの体験はわたしたちのためでもあります。わたしたちも乗り越えられそうにない困難に直面することが考えられます。その時に弟子たちの体験を思い出すように促しているのです。

ただし、弟子たちに起こったことはわたしたちにも起こるでしょう。それは、イエスがそばにいるにもかかわらず、困難に直面して気が動転し、また困難を乗り越えられたとしてもそれがイエスによるものだと理解できずにいるということです。

弟子たちはイエスに信頼を寄せることが困難を乗り越える何よりの力であると確信するまでに、相当の時間を必要としました。わたしたちもきっと、イエスに揺るぎない信頼を寄せるには長い時間を必要とするでしょう。

イエスに信頼しきれずに道を誤ったり、また時間がかかってもイエスに信頼すべきだったと立ち返ったり、何度も行ったり来たりして、わたしたちはイエスに信頼することが最善の策だと悟り、最終的に向こう岸に渡ることができるのだと思います。

イエスはすべての人に、「向こう岸に渡ろう」と呼びかけます。わたしたちが今いる場所に留まっていたら、イエスに絶対的な信頼を寄せる体験を積むことはできないのです。おぼれそうになる体験、恐怖を覚えるほどの体験を経て、わたしたちの信仰は火で精錬された鉄のように強くなるのです。

イエスは決してわたしたちをおぼれさせることも、恐怖に打ち負かされることもお許しにならない方です。信頼して、信仰の旅をこれからも続けてまいりましょう。



年間第 13 主日 (マルコ 5:21-43)

イエスはわたしたちの苦しみに触れてくださる

年間第 13 主日 B 年は、「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」の物語が選ばれました。選ばれた朗読から、「イエスに触れる」「イエスが触れる」ということについて学びを得たいと思います。

先週、これぞ船の船頭という仕事をすることができました。ある浜串出身のシスターが休暇を取って来ていたのですが、「しばらく浜串でお世話になります」とわざわざ司祭館にあいさつに来て、「こちらに着いてすぐ波止場で久しぶりに釣りをしました。お魚を 10 匹釣りました」と聞かされたのですが、申し訳ないけれども、シスターが釣った魚というのはわたしが釣る魚が捕食している小魚でした。

わたしはとても同情し、一週間滞在すると言うことでしたので、もしシスターと一緒に出掛けてみたいと言うならボート釣りに誘ってみようと言う中で考えました。水曜日の晩に釣具コーナーをのぞき、道具を補充し、木曜日の朝ミサの後に恐る恐る声をかけてみました。

「シスター。わたしは今日ボート釣りに出かけるけれども、シスターがもし興味があれば連れて行くよ。」行かないと言うだろうという読みだったのですが、意に反して行ってみたいということでしたので、初めての鯛釣りに出かけたわけです。

結果はわたしにとって芳しくないものでしたが、シスターはうねりのある海上で 3 時間ボート釣りに付き合い、一度も船酔いせず、ずっとわたしの指示を守って釣ろうとしました。残念ながら本人が釣ることはありませんでしたが、わたしがキジハタを 2 匹仕掛けに喰わせたので、その竿をシスターに渡して、シスターはキャーキャー言いながら釣った気分を味わうことができました。

船頭としては、本人が釣り上げてくれるのがいちばん嬉しいのですが、いちおう、釣れたらこんな感じだよと魚のかかった竿を持たせてあげたので満足でした。港に帰るとわたしたちに声をかけてくれる人が 2 人いました。わたしは鼻高々だったのでそのうちの 1 人に「わたしが釣って、竿を持たせてあげたんだよ」と自慢すると、「ほんなごどかよ（それ本当の話なの？）」と一蹴されてしまいました。ちょっとわたしでは説得力がなかったかも知れません。

さてイエスはヤイロの娘と出血症の女性を救ってくださいました。実は今週の朗読には前触れのようなものがあって思っています。おとといの金曜日はマタイ 8 章の「重い皮膚病を患っている人をいやす」という物語で、「イエスが手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。」（マタイ 8・4）とあります。

さらに土曜日には金曜日の続きの出来事として、ペトロのしゅうとめが熱を出して寝込んでいて、イエスがその手に触れると、熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした（同 8・15）という

場面が朗読されました。これらの朗読が、年間第 13 主日の福音朗読をさらに豊かにしてくれていると思ったのです。

金曜日、土曜日、そして今日の朗読で目に留まるのは、イエスが病に苦しむ人々に触れてくださる姿です。本日の福音朗読では出血の止まらない女性が背後からイエスの服に触れます。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」（マルコ 5・30）と言われました。これは見た目には出血症の女性がイエスに触れているわけですが、力が出て行ったのはイエスから女性に向かっていきます。

また、ヤイロの娘は使いの者の報告によって死んだことがはっきりしていましたが、イエスが子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われました（同 5・41）。イエスが子供の手を取る動作は、当然イエスが子供に触れているということの意味します。こうして、イエスが病に苦しむ人々に触れてくださるとき、決定的なことが起こっているのです。

イエスが病に苦しむ人々に触れてくださると、すべての時間が止まります。病に苦しんできた時間、わが子を失った悲しみの時間、希望を絶たれた絶望の時間、それら悪が勝ち誇っている時間にイエスは触れて、すべてを停止させてくださるのです。

代わりに、イエスが触れたその時から新しい時間が始まります。苦しみから解放された時間、悲しみの闇から希望の光に導かれる時間、絶望をもちや思い出さない希望の時間です。新しい時間はイエスが触れた瞬間から始まり、決して奪われることはないのです。

イエスが触れることで始まった新しい時間が決して奪われないことは、出血症の女性にかけたイエスの言葉が教えてくれます。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい。」（5・34）

今週の福音は、誰も止めることのできないものを止めてくださるお方を指し示しています。誰も奪い去ることのできないものを与えてくださるお方についても指し示しています。それはイエス・キリストです。

わたしたちが日々の暮らしの中で深い淵に落ちていくように感じ、誰もそれを止めることができないと悲しんでいるなら、イエスのもとに駆け寄りましょう。

喜びや希望は続くはずがないと何度も裏切られたことがある人も、今こそイエスのもとに駆け寄りましょう。イエスは、わたしたちに目を留め、触れてくださいます。わたしたちの望むものを、わたしたちの望み以上の形にして返してくださるのです。



年間第 14 主日 (マルコ 6:1-6)

イエスの向こうに働く神を知り信仰告白する

年間第 14 主日 B 年は、「ナザレで受け入れられない」という場面を取り上げます。イエスが生まれ故郷のナザレの人々に受け入れられないのは、ナザレの人々がイエスの素晴らしい業を目にして驚いた後に、イエスの業を何に結びつけようとしたかに原因があります。ナザレの人々の過ちを繰り返さず、わたしたちがイエスを受け入れるために必要なことは何か、考えることにしましょう。

今年参加した司祭黙想会を指導した大木神父さまの説教は、とても分かりやすく、堅苦しさのまったくないものでした。大木神父さまは、今回の黙想会で手痛いミスを犯したことまで率直に話してくれました。

最後の説教の時でしたが、生活している伊万里の修道院から長崎に出発する際に、今回の黙想会のために用意した原稿をお忘れになったそうです。大まかなことは頭にあったでしょうが、なるほど原稿を忘れていたのを悟られないように話していたのだなと思うと、難しい話を持ち出さなかったのが納得できました。

けれども内容を落とすようなことがなかったのはさすがイエズス会士だなあと思ったのです。その中で「黙想会は車検のようなものです」と仰っていたのが印象的でした。

車検で車を修理工場に預けて故障箇所を見つけ、部品を交換したり動きの悪い部分を調整したりするように、ふだんの生活の場所から黙想会に出向いて自分の直すべき部分を探し出し、考え方を思い切って取り換えたり、調整したりする。そうやって毎年、自分と真摯に向き合う時間ですと黙想会の意義を説明してくれたのです。

毎年、ふだんの生活を横に置いて自分と向き合い、司祭としての価値はどこからきているのか、そもそも司祭職とは何なのかを問い続ける。ふだん忙しさの中でじっくり考えることができないので、黙想会の期間はとても大切です。そして、毎年毎年問い続けることも大切です。

問い続けることがなぜ大切かという、問いかけをやめたときから、自分に都合のよい答えや、都合のよい受け止め方を探そうとするようになるからです。司祭としての価値は、本来イエス・キリストから来ますが、問い続けることをやめてしまうと、たとえば司祭としての価値をわたしが果たしてきた活動の多さや、勤めてきた年数や、影響を与えた人の数や、そうしたことで計ろうとするかもしれません。

司祭としての価値はそういう業績ではないと思います。以前の説教で触れましたが、司祭になって 1 回だけしかミサをささげずに死んだとしても、その 1 回のミサだけでも司祭であった価値があるのです。すると、やはり毎年、司祭としての価値はどこから来るのか、そもそも司祭職とは何なのかを問い続ける必要があるのだと思います。

さて、福音朗読でイエスの素晴らしい業を目にした人々は驚きの声を上げます。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。こ

の人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。」(6・2) イエスの素晴らしさはどこから来ているのか、イエスとはいったい何者なのかを問うているわけです。

しかし、人々のたどり着いた答えは、問い続けることをやめた答えでした。「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」(6・3) 人々はイエスの業の向こうに働く神の力を見ようとはせず、イエスをただの人として引きずり降ろすことに心が向いたのです。

わたしも、神さまが働くかどうかではなく、その人の出身や人間関係で計られた経験があります。中学校から神学校に入り、最初の夏休みに日曜日のミサに来た時に、大人の人たちがわたしの話をしていました。「輝あんちの息子の神学校に行ったってや。なんのそん、輝あんちの息子の神父さまにならうとっちかよ。」父親の輝明が若いころにやんちゃであったことは聞いていましたので、わたしには言い返す言葉はありませんでしたが、心の底から見返してやろうと思ったことは確かです。

そんなわたしを通してでも神さまは働きました。イエスの業はどこから来ているのか、イエスとはいったい何者か、辛抱強く問い続ける必要があります。たとえば母マリアは、わが子イエスにまつわる様々な出来事を心の中で思い巡らし、その意味を深く問い続けました。しかし当時の人々は問い続けることをしませんでした。

わたしたちも、当時の人々の過ちを繰り返してはいけません。わたしたちにとって問い続ける価値あるものがいくつもあります。イエスとは一体どなたですかという問いもそうですが、ほかにも祈りとか、秘跡についても問い続ける辛抱強さが必要ではないでしょうか。祈りの価値はどこからきているか、そもそも祈りとは何なのか。洗礼・聖体・罪のゆるし・結婚の秘跡の価値はどこから来ているのか、そもそも秘跡とは何なのか。恵みのたびに問い続ける必要があります。

問い続けると、恵みの出所がどこなのかよくわかるようになって、もっと祈りや秘跡を大切にできるようになるでしょう。問い続けることをやめると、いくら祈っても聞き入れられないとか、これこれの秘跡の恵みは小さいころさんざん受けたのもう要らないとか、恵みを間違った答えに引きずり降ろしてしまうのです。

わたしが、神から受けている恵みや、秘跡などを通して受けている生き方について、これからも機会あるごとにその出所を問い続ける人でありたいと思います。見えるものを通して見えない神の働きに目を向け、感謝できる人になれるよう、このミサを通して取り組む力を願いましょう。



年間第 15 主日 (マルコ 6:7-13)

イエスが「杖一本」を授けてくださる

「(イエスは)十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。」(6・7) イエスが十二人を派遣します。十二人から始まった宣教活動が、今どのように広がっているのかを考えることにしましょう。

先週の浜串教会での霊名のお祝いに釣り道具の鯛ラバを花かごと一緒にいただきました。釣りの師匠が無垢のオモリに塗装を施し、経験から選んだラバーを組み合わせた手作りでした。広報部長から、「この道具で釣れたら必ず報告してください」とお願いされていました。

わたしも、釣れたら写真でも貼ろうと思っていたのですが、いざ使ってみると写真を撮る暇もないほどに釣れて、いまだに写真を撮れていません。この前も、台風がそろそろ近づこうとしていた7月2週目に、鯛を2枚釣り上げました。

さてイエスは十二人を呼び寄せました。イエスを取り囲む人々はおもったくさんいたことでしょう。十二人が呼び寄せられている様子、それだけでも、すごい力だと思えます。自分自身のことを考えると、十二人はおろか、一人呼び寄せることすら難しいと感じるからです。

イエスが十二人呼び寄せたとありますが、十二という数字はどのような意味があるのでしょうか。この数字は旧約聖書に由来する数字です。アブラハムは神から多くの子孫を与えると約束されましたが、それは後にイスラエルと呼ばれるようになる孫のヤコブの時代に実現しました。

ヤコブの息子たちの中にヨセフという名の息子がいました。ヨセフには兄たちが十人、弟が一人いました。ヨセフは後に神の不思議な導きによりエジプトで国王に次ぐ地位に就き、父親のヨセフと十一人の兄弟をエジプトに呼び寄せ、末永く幸せに暮らせるように計らいます。

ヨセフの物語を詳しく話す時間はありませんが、ヤコブの子供たちが十二人いて、拡大していくイスラエルの部族はヤコブの十二人の息子たちの名を持つ十二部族となっていくきます。イエスはこのイスラエル十二部族を念頭に置いて、「新しいイスラエル十二部族」とでも呼べるような神の民を呼び集めるために、弟子の中から十二人を選んだわけです。

ここでもう一つ考える必要があります。イエスが十二人を呼び寄せた時点で、呼ばれた弟子たちも「わたしたち十二人は、イスラエルの十二部族を念頭に置いている」と理解したのでしょうか。

弟子たちは理解したと思います。イエスが考えていた「新しいイスラエル」という役割までは理解しなかったとしても、「なぜ十二人なのだろうか」という思いはすぐ聖書の物語を連想させたでしょう。彼らにもある程度聖書の知識があったでしょうから、自分たちがイスラエル十二部族になぞらえて十二人選ばれたということは感じていたと思います。

イエスは弟子たちの理解をさらに推し進め、「選ばれたあなたたちは新しいイスラエルの民であり、わたしの思いを出かけて行って届ける者となるのだ」このような指示を受け、派遣されていったのです。

イエスが弟子たちを二人一組で派遣するとき、旅支度について厳しい制約を課しています。「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず」(6・8)とあります。「杖一本」しか、持ち物は許されていません。これは何を意味しているのでしょうか。

当然、持ち物に信頼をおかず、イエスにのみ信頼を置いて宣教せよという促しであることは想像できます。パンも、施しを受けるための袋も、お金も、宣教活動が軌道に乗れば、手に入れることになるでしょう。

ところで、「杖」はなぜ持たせたのでしょうか。一般的に、旅先で杖は身を守るのにとても重宝します。オオカミが近づくことがあるかもしれない、へビが道端にいるかもしれない。そういう悪路を旅するとき、履物を履き、杖を用意していることは人間の古くからの知恵でした。

もう一つ、わたしは別のことも考えました。イエスが派遣する弟子たちに持たせた杖は、イエスの権威を表す杖であったかもしれません。つまり派遣された弟子たちがすでにイエスの権威を委ねられた者だということを表す杖とも考えられます。するとこの杖だけは、旅先で棒切れを拾って杖にするわけにはいかないのです。

現代の教会でも、司教さまはミサの中で「バクルス」という名前の付いた杖を使用します。それはイエスから託された権威のしるしであり、神の民を教え導く杖なのです。派遣された弟子たちの杖も、現代の司教さまの杖も、イエスの教えが、イエスの導きが、もうここまで来ていますよというメッセージなのではないでしょうか。

弟子たちは履物を履き、杖一本を携えて派遣されていきました。わたしたちも、ミサのたびに「行きましょう。主の平和のうちに」という言葉で派遣されています。わたしたちはイエスから託された目に見える杖を持ちませんが、あたかも杖を託されたものであるかのように日々の生活に戻っていく必要があります。

日々の生活には好ましくない誘惑があり、あるときは信仰に反する暴力があり、それらに立ち向かい、戦う必要があります。その時に必要となるのはパンでも施しを受ける袋でもなく、お金でもないのです。神の望みに反する誘惑や暴力に対抗するのは、ミサによってイエスから託された「杖一本」なのです。

イエスはミサの中で、どのように「杖一本」を託されるのでしょうか。イエスはみことばと、聖体によって皆さんに「杖一本」を託しておられます。あなたの一週間を支える御言葉が必ずあります。あなたの一週間で、聖体が支えます。イエスしか授けることのできない「杖一本」を、今週も受け取って、生活に派遣されてい行きましょう。



年間第 16 主日 (マルコ 6:30-34)

人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい

「あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」
(6・31) イエスは弟子たちに休みなさいと言われました。イエスが弟子たちに与えようとした休みの模範はご自身の姿にあると思います。弟子たちに休みを与えて、弟子たちを守り育てるイエスの姿を学ぶことにしましょう。

今週水曜日、7月22日は浜串教会の守護の聖人聖マリア・マグダレナの記念日です。浜串教会家族にとっての記念日なので、ぜひ都合を付けてミサに参加してほしいものです。この日は朝6時からミサをします。

先週の水曜日に、この聖マリア・マグダレナの記念日が浜串教会にとって大事な日だと子供たちに言い聞かせるために次のような例えを話しました。「家族の記念日は、家族全員でお祝いするでしょうか？お母さんの誕生日に『わたしの誕生日じゃないから』と、お祝いに加わらないということはしないはずです。だったら、浜串教会聖堂の守護の聖人は、浜串教会家族みんなでお祝いすべきですね。水曜日朝6時、みんな来てくれますか？」

ちなみに子供たちは全員「はい」と答えました。全員「はい」と答えたのですが、わたしの心の目がよどんでいるのか、どうしても素直に信じ切れないでいます。ぜひわたしの心配が杞憂で終わるようにと願いたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。弟子たちに「休みなさい」と言われたイエスご自身は、ご自分の心と体をどのように休ませていたのでしょうか。「イエスが休まれた」という直接的な記述は調べた範囲では見当たりません。

けれどもイエスも疲れることはあったはずです。イエスとサマリヤの女の対話を記録したヨハネ福音記者によると、「イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである」(ヨハネ4・6)とあります。イエス自身も、何かの方法で休まれていたはずですが。

弟子たちへ休むようにという指示を出した場面を読み返すと、一つのことには思い当りました。「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」「人里離れた所」とわざわざ場所を指定しています。そう言われれば、イエスはたびたび人里離れた所で祈っておられたことが記録されています。たとえばマルコ福音書で「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」(マルコ1・35)とあります。

すると、人里離れた場所は、「休息」を得る適切な場所であることが分かります。「人里離れた場所」という表現で、どのような場所を言おうとしているのでしょうか。

「人里離れた場所」は、神との交わりを確かにする場所と言えます。人々の騒々しさから離れて、じっくり神と向き合う場所です。特にイエスは御父との深い憩いを得るために、人里離れた場所で祈っておられたのです。イエスは弟子たちにも、神との交わりを深めることが、何よりの休息であることを、感じさせたかったのです。

以前話したことがあるかと思いますが、日本でも日常使われている外来語に「レクリエーション」という単語があります。これは英語をそのまま取り入れたものですが、言葉のもとの意味をたどるとラテン語の *re-creatio* に行き当たります。その意味は、「再び」「創造すること」です。本来の力を取り戻すために、自分の中に神が再び創造のわざをおこなってくださる。すると人は再び造り直されて、生きる力を取り戻すわけです。神が人間を再び創造するような時間と場所に自分を置くこと、それがレクリエーション、*re-creatio* なのです。

すると *re-creatio* のためにふさわしい場所は、人里離れた場所が最もふさわしいということになります。こうしてイエスも人里離れた場所で神との交わりを確かなものとし、弟子たちにも同じことを求めたわけですね。

ここまで来ると、集まって来た大勢の群衆をイエスが「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」(6・34) とあるのも分かります。イエスは群衆に、神との交わりを確かにするために、つまり本当の憩い・休みを与えるために、いろいろと教え始められたのです。イエスは群衆にいろいろと教え、彼らを憩いの水辺に伴われるのです。

わたしたちも休みが必要です。これまで話したように、神が再び創造のわざをわたしにおこなってくださり、神によって再び造り直されて、生きる力を取り戻すために、休みが必要です。再び造り上げられる、再び自分を取り戻すための人里離れた場所に自分を置くことが大切です。

みなさんにとっての人里離れた場所はどこでしょうか。だれにも煩わされずに、神の前に自分を置くことのできる静かな場所はどこでしょうか。この聖堂は確かにその一つだと思います。かなり静かです。けれども場合によっては、聖堂のほかにも人里離れた場所を持っておくともいかもしれません。聖堂が必ずしも近いとは限らないからです。

あなたにとっての人里離れた場所が、神との交わりを確かにする場所であれば幸いです。あなたが選んだ人里離れた場所が、昔の柱時計のように、止まりかけている状態からねじを巻いてもらって力を取り戻す場所であれば幸いです。

それぞれ人里離れた場所で *re-creatio* 「再創造」を成し遂げて、また新たな気持ちでもとの生活に戻りましょう。実際の生活はイエスへの信仰をまっすぐに生きるのが難しいかもしれません。矛盾に苦しんだり疲れたりした時、イエスは何度でも「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と声をかけてくださいます。



年間第 17 主日 (ヨハネ 6:1-15)

大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年

年間第 17 主日 B 年の福音朗読はヨハネ福音記者が描く「五千人に食べ物を与える」場面が選ばれました。出来事そのものは共観福音書と呼ばれる「マタイ・マルコ・ルカ福音書」にも記されています。ヨハネは共観福音書とは異なる捉え方を持っています。出来事を「しるし」として捉え、イエスへの信仰を増し加えるように招くのです。

さて子供たちのドッジボール大会は本当に残念でした。対戦相手が青砂ヶ浦と桐だったのでわたし自身は最初から戦意喪失だったのですが、子供たちはむしろやる気満々だったようです。練習の成果を発揮させてあげたかったのですが、台風ではどうにもなりません。

中止になったので話しますがわたしの心の中では、福音朗読に登場する弟子と似たような言葉が響いていたのです。「ここに大会に参加できる子供が 8 人います。けれども、8 人ではどうにもならないでしょう。」10 人いて本来のチーム、8 人では歯が立たないと思っていたのです。

福音朗読の場面は、もっと深刻な場面だったと思います。男の人が五千人いて全体ではそれ以上ですから、「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」を弟子たちが見つけたとしても、それは焼け石に水、何の足しにもならないと考えるのは無理もありません。

ところがイエスは、「足りない状況」「何の役にも立たない状況」を確認してから動き出します。イエスが望めば、フィリポに「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」(6・5)と尋ねなくとも動くことはできたはずですが、弟子たちから希望の持てる返事が返ってくるはずがないからです。

それでも、イエスは弟子たちの返事を確認してから動き出しました。なぜそうなさったのだろうかと考えます。わたしはこう考えました。「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」とは、イエスのことだったのではないでしょうか。

物語としては少年という形になっていますが、イエスが少年に「そのパンと魚を貸してくれ」と言った様子もありませんし、弟子たちに「その少年をこちらに來させなさい」と指示した形跡もありません。いつの間にか少年のことは物語から消えていますから、少年がいたかどうかはさほど重要ではないのでしょうか。

大事ななのは、少年という姿が何を意味しているかということかもしれません。大人に対しての少年ですから、力の足りない存在、未成熟・未完成の存在、無力な存在を意味していると思います。そして、わたしが考えたように、イエスは無力な存在であるかのように地上での最期を遂げられましたから、物語に登場する少年の可能性もあるわけです。

イエスが動き出し、弟子たちがイエスの働きに協力して、五千人の群衆は食べ物を得ることができました。そしてこのことを、ヨハネ福音記者は「しるし」と見えています。どんなしるしでしょうか。それは、イ

イエスが天からのまことのパンであるというしるしです。

しかし、イエスが天からのまことのパンであるということを示すだけでしたら、「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」を物語に登場させる必要はなかったように思います。フィリポの「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」(6・7)という判断だけで、切迫した状況は十分理解できるからです。

あえて少年を登場させているのは、パンの奇跡に留まらない、神の救いのわざの「しるし」という意味があるからではないでしょうか。イエスは五千人に食べ物を与える天からのまことのパンという存在にとどまらず、全人類のまことのパンとなられるお方である。しかも少年という無力な存在となって、救いを成し遂げようとしておられるのです。

実際、イエスの救いのわざは、全人類に対しての「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」という意味合いがあると思います。神の独り子が、全人類を救うために十字架にはりつけにされます。何千年何万年という歴史の、約三十数年の働きで全人類を救います。

ユダヤの国のごく限られた場所での三十数年の働きで、全人類に天からのいのちのパンを与えてくださるのです。この壮大な救いの計画の「しるし」として、「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年」さらにその少年で暗示されている無力な姿で死んでいく神の独り子イエスが物語に登場しているのではないかと思いました。

弟子たちは、この少年を無力な存在と考えました。しかしイエスは、その無力な存在を使って、神の驚くべきわざを行います。「人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった」(6・13)のです。イエスご自身、無力な存在として地上の最期を迎えましたが、全人類に天国の門を開いてくださったのです。

注意すべき点があります。群衆は「自分を王にするために連れて行こう」としました。イエスを利用しようとしたのです。無力な存在を使って五千人に食べ物を与えたイエスを、手放したくなかったのです。

わたしたちもこの点は十分注意しなければなりません。と言うのは、教会を人々にパンを食べさせる道具として利用しようとする見えない力は今でも働いているからです。わたしたちが人々の心を満たしたわけでもないのに、教会は観光の目玉になるとか教会でいやしをいただきましようと言ってすり寄って来る大勢の人々がいるのです。

教会に来ていやされるのは、その人がイエスと出会ったからです。教会に引きつけられるのは、隠れておられるイエスに気付いたからです。「イエスは、(中略)ひとりでまた山に退かれた。」(6・15)だれかを教会で案内するとき、隠れておられるイエスに導いてあげて、隠れておられるイエスの声に耳を傾けさせる必要があります。そこにいやしと慰めがあるからです。そのためには、わたしたちも常に、この聖堂の中に隠れておられるイエスの声に耳を傾ける努力が必要です。蟬の鳴き声中でも心を沈め、心に語りかけるイエスの言葉に耳を澄ます。そのための心の静けさを、このミサの中で願い求めましょう。



年間第 18 主日 (ヨハネ 6:24-35)

神がお遣わしになった者をぶれずに信じる

年間第 18 主日 B 年はイエスと群衆の対話が繰り返される場面が描かれています。この対話は実りのない不毛な対話に終わってしまいます。問いかける群衆にイエスは的確な答えを示すのに、群衆がイエスの示す答えを受け入れようとしないからです。イエスの示す答えに群衆は近づこうとしないので、むしろイエスと群衆の溝は深まっています。

先週水曜日から金曜日まで、神言修道会の神学生を預かっていました。中学 3 年生です。本来は曾根教会に所属しているのですが、親が神奈川に引っ越したので夏の数日間この神学生はおばあちゃんを曾根に訪ねて、そのあとわたしが 2 泊 3 日で預かりました。

神学生の母親からは、長崎にあるルドヴィコ神学院が置かれている厳しい現状を聞かされてきました。具体的には、ルドヴィコ神学院に在籍している神学生は夏休みの時点で 2 人しかおらず、わたしが預かろうとしている神学生も心は揺れている、続けていく気持ちが折れかけているということでした。

わたしは話を聞いていて、誰だって心が折れるだろうなあと思ったのです。少ないと言っても、10 人くらいはいなければ、神学生同士で励まし合うのも限度があると思ったのです。神学生の母親からは、本人を何とか励ましてもらえたらということでした。

わたしが神学生を預かった日は、水曜日から木曜日にかけてで、子供たちのミサの期間でした。わたしは何かヒントをあげて、考えるきっかけになればと思い、子供のミサのときにこう話したのです。

「ドッジボールの試合にもう一度参加できるようになりましたね。ドッジボールは内野にいる人が相手からボールを当てられたら外野に出なければなりません。内野に残っている人数が多いほうが試合に勝ちますが、内野の人数が減っていくと生き残るのも大変です。もし内野に残っているのが 3 人になったら、諦めますか？」

「諦めません」「2 人になったら諦めますか？」「諦めません」「さすがに 1 人になったら諦めてすぐに当てられて終わりますか？」「最後まで頑張ります」「だよなあ」

もちろん話しかけているのは目の前の小学生にですが、気持ちとしては中学 3 年生の神学生に届けと、そんな思いで訴えかけました。水曜日の浜串ミサと木曜日の福見ミサ、2 度にわたって子供たちに話しかけながら、神学生にわたしの思いを伝えました。

現実的には、1 人になっても頑張れというのは酷かもしれません。けれども、わたしは 1 人になっても生き残ろうとする姿は、周囲の人に何かを感じさせ、行き詰まりを打ち破る突破口が与えられるのではないかと思います。わたし個人としては、長崎教区の神学院で共同生活をさせてもらいながら、神言会の神学生として続けるのも 1 つの方法かなと思います。実際問題はそう簡単ではないかもしれません。

さて説教の冒頭イエスと群衆の対話がかみ合わないと言いましたが、例を一つ挙げると、群衆が「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」（6・28）と問いかけ、イエスは「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」（6・29）と答えを示しますが、群衆はイエスの答えに近づこうとしないのです。

「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。」（6・30）さきほどの神学生の話に戻ると、ルドヴィコ神学院の生徒がどんどん去っていく中で、残っている神学生は誰を信じればよいのか、誰についていけばよいのか不安になっていると思うのです。校長を務める神父さまにさえも、「あなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか」と言いたくなるかもしれません。

もしかしたら、2人しかいない神学生に都合よいような答えは示されないかもしれません。しかし、迷いを捨て、「神がお遣わしになった者を信じる」つまり現在のルドヴィコ神学院の校長神父さまの勧めを信じて、精一杯努力するならば、きっと道は開けると信じています。

神学生が2人しかいなくなると、2人で険しい道を歩くのは至難の業かもしれません。もしかしたら2人のうちの1人が召命の道を去ってしまい、1人きりになるかもしれません。想像を絶する険しい道ですが、困難なのは人数の問題よりも、神に身を委ね、独りよがりな結論を取り下げることだと思うのです。こんな場所にいられようかという思いを取り下げることが、どんなに困難なことでしょう。ぜひその試練を乗り越えてくれるように、わたしは毎日祈りたいと思います。

考えるとわたしたちも、イエスを信じない人から根本的な問いを突き付けられたときに、答えを準備しておかなければなりません。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。この問いの答えは、次の通りです。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」

まだイエス・キリストを信じていない人に、「あー、あなたがイエス・キリストを信じていることが、よく分かりました」という生き方を示して、わたしたちは神の業を行うのです。

誰かと一緒にご飯を食べるときに「いただきます」だけでは、イエス・キリストを信じていることは伝わらないのです。家族ぐるみで親しくしている家族が一晩わが家に泊まった時に「おやすみなさい」のあいさつだけで寝るならば、イエス・キリストを信じていることは伝わらないのです。親しい家族が土曜日にわが家に泊まりに来た場合、翌朝「おはよう」のあいさつだけでは、イエス・キリストを信じていることは伝わらないのです。

ぜひ、わたしたちは周りの人々に対して、「わたしたちは、神がお遣わしになった者を信じています」という証を立てましょう。わたしたちがこうして神の業を行う時、「決して飢えることがなく、決して渴くことがない」体験を自分にも他人にも味わわせることになるのです。



年間第 19 主日 (ヨハネ 6:41-51)

信仰を成長させてもらう態度が備わっているか

「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から降って来たパンである』と言われたので、イエスのことをつぶやき始め(た)」(6・41)。年間第 19 主日 B 年の朗読から学びを得るために、群衆の「つぶやく」態度に注目したいと思います。

今年は 8 月 9 日長崎原爆の日が日曜日と重なりました。聞いた話では浦上教会の信徒は投下された原爆によって 12000 人のうち 8000 人が一瞬にして命を落としたと言われていています。

大きさに圧倒される浦上天主堂ですが、犠牲となった命が積み重なってあの壮麗な聖堂を成り立たせていると考えると、聖堂内に入った時祈る気持ちになるのは当然だといつも思います。報道各社も一日「祈る長崎」を報道すると思いますが、わたしたちも信仰を同じくする人々のため、またすべての犠牲者のため、一日祈りをささげたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。あえてわたしは「群衆がつぶやく態度について」と前置きしました。皆さんの中には「ユダヤ人たちのつぶやく態度についてではないのか」と思われた方もいるでしょう。選ばれたヨハネ福音書第 6 章の前後関係から考える必要がありますが、第 6 章の舞台はガリラヤです。

ヨハネ福音書に登場するユダヤ人は、単に人種を表しているのではありません。ヨハネの言うユダヤ人は、エルサレムに住んでいて、しかもイエスに敵対する人々のことです。すると、ガリラヤでイエスを取り囲む群衆はユダヤ人と同一ではないはずですが、この表現で群衆がイエスに敵対する人々に変わってしまったことが暗示されています。

たとえば家族を扱ったドラマで「親でもなければ子でもない。出て行け」とか言って親子喧嘩する場面を見たりします。実の親子であっても度を過ぎた親不幸などで敵対的な行動を取れば、親が態度を豹変することも起こりえます。ガリラヤでイエスを取り巻く群衆は、ある時点でイエスに見切りを付け、敵対する人々、すなわちヨハネ福音記者の言う「ユダヤ人」に豹変したのです。

ではガリラヤの群衆は、いつ「ユダヤ人」に豹変したのでしょうか。彼らがイエスに対してつぶやき始めた時点で、イエスに敵対する人々に変わったのです。ただし、聖書の「つぶやく」は日本語の「つぶやく」と少し意味合いが違うことを覚えておきましょう。

日本語の「つぶやく」は「小さな声でひとりごとを言う」の意味で、最初から自分の要求が受け入れてもらえずにぶつぶつ言う態度を含むわけではありません。

これに対して聖書の「つぶやく」には、最初から「要求や主張が満たされていない」ということが含まれているそうです。ですから聖書における「つぶやく」は要求が満たされないから離れて行ってしまおう、要求が満たされない相手に敵意を持つ、そういうことが含まれるのです。

イエスに対して「つぶやく」のは、イエスについて行くかどうかをこれから考える人ではなく、もはやイエスにはついて行かない、イエスを敵とみなす、そういう人々だということになります。当然の帰結として、イエスについて行かない人、イエスを敵とみなす人々にイエスへの信仰は育たず、自分で救いの扉を閉ざすことになります。

わたしは、信仰を成長させてもらえる人というのはそれにふさわしいタイプがあると思います。イエスへの信仰を持ち始めるきっかけはわたしたちの中にあるわけですが、イエスへの信仰を育ててくれるのはあくまでもイエスです。イエスはすべての人にご自身への信仰が成長するように導いてくださいますが、わたしたちが、イエスの導きについて行ける状態になれば、いくらイエスからの導きがあっても信仰が成長することはないと思うのです。

イエスと出会った人が取る態度は3つに分けられると思います。一つはイエスの導きに全く耳を貸そうとしない人です。自分の要求がかなえてもらえるかどうかだけに興味があり、要求がかなわなければイエスの導きに聞き従おうとする気持ちなどない人です。

次に、イエスの導きを実現不可能なことと思い、イエスから去っていく人々です。イエスの導きを魅力的だと思い、いったんは聞こうとしますが、自分にはとても実行できないと決めつけてしまい、心を閉ざし、去っていく人々です。

最後に残るのは、「主よ、ごもつともです」と答えることのできる人です。わたしたちはイエスの導きに戸惑うことが多く、「なぜ？」とか「でも・・・」とかつい口にしてしまいます。

けれども、そうした思いに自分自身がんじがらめになることなく、ひとりよがりの考えを横に置き、「主よ、ごもつともです」と答える人は、イエスへの信仰が育って行くのだと思います。信仰は、人間の思いを超えたところにある導きを受け入れていく歩みです。なぜあの人ではなくわたしが責任を問われているのか、なぜ今大切な人を失わなければならないのか。人生の中で分からないことは数え切れないでしょう。

そんな中でもイエスは、わたしの信仰を育てようと常に導いておられるのです。「主よ、ごもつともです」と、自分の判断を取り下げてイエスの導きに全面的に心を開く。そうしてわたしたちはより高い信仰の高みにたどり着けるのです。

イエスはわたしたちに問いを投げかけます。信仰の道を歩きたいのですか？では一切耳を貸さない人にならず、わたしの声に失望せず、心を開き、耳を傾ける人になりなさい。そうすれば、わたしがあなたの信仰を増し加え、育てます。イエスはそう呼びかけているのです。

福見教会で、大人の方が洗礼をお受けになります。大きな希望を持って、洗礼式に臨まれます。どうか皆さん、これから洗礼を受けるこの人が水と霊によって新しく生まれ、イエスの招きに「主よ、ごもつともです」と答えていけるように、共に祈りで支えてください。これから洗礼式に移ります。



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

飢えた人を良い物で満たしてくださる

聖母の被昇天の祭日、福音朗読箇所からマリアの賛歌の次の言葉に注目したいと思います。それは「身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし」(1・52-53)という言葉です。

今年は特別に暑い夏だと感じます。去年まではどんなに暑くても釣りに行っていたのですが、今年はさあ行くぞと決めた後に「やっぱりやめようかな」と思うくらいです。

ボートに乗っていて帰って来ることができるか心配したことなどかつて一度もありませんでしたが、今年はそんな不安がふと頭をよぎります。暑い中もし熱中症になり、連絡も取れずに漂流したら、多大な迷惑をかけることになるなあと、怖くなることがあります。

早く、今年の異常に暑い夏が過ぎてほしいものです。今年は聖母被昇天の祭日が「これで確実に8月も半ばまで来た。あと半分だ」と感じさせ、ありがたい気持ちになりました。

さて全世界の教会が祝っている通り、マリアは体も魂も、天の栄光に上げられたお方です。マリアはその振る舞いも言葉も、天の栄光に上げられるにふさわしいお方でした。わたしはさらに、神の注がれる目を捉える力も、天の栄光に上げられるにふさわしいお方だったと思います。主なる神を「身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たすお方」と捉えたのは、画期的だったと思うのです。

世の中の多くの人は、権力ある者や富める者に目が行きがちです。小さく貧しい人、しいたげられている人を見ようとしないのです。ところが神である主は、身分の低い者、飢えた者に目を留め、憐れみを忘れない方なのです。マリアは、人々が見ようとしない部分に主なる神が目を注ぐことをいち早く見抜いた方だったのです。

マリアが見抜いた主のまなざしから、2つのことを考えました。1つは、身分の低い者、飢えた人を神は決して放ってはおかないということ、もう1つは、わたしたちもマリアが見抜いた神のまなざしを人々に知らせるべきであるということです。

弱い立場に置かれている人を神が決して忘れないのであれば、マリアの言葉は多くの人々の希望の言葉となります。マリアが体験したことでありながら、希望のないまま生きてきた多くの人を代表する神への賛美にもなっています。だれも見抜けなかった神のまなざしをマリアが見抜いたことで、身分の低い者、飢えた人が救われることになりました。

マリアが鋭く見抜いた神のまなざしは、人々に知らせるべき「喜びの知らせ」でもあります。身分の低い者、飢えた人に神が憐れみを注がれる。このメッセージはどんな知識や能力でも知りえなかったのです。そしてわたしたちの神がどのような方であるかを、どんな弱い立場の人でも正しく知らせることのできるメッセージです。このメッセージを知らせる人には必ず報いがあるでしょう。マリアはこのように賛美して最

後には体も魂も天に上げられました。わたしたちもマリアの賛歌を告げ知らせるなら、神に招かれるはずです。

天に上げられたマリアは、だれも見抜くことのできなかつた神のまなざしをわたしたちに示してくださいました。神のまなざしを、わたしたちもよく黙想し、自分のものとしましょう。人々に告げ知らせ、神のまなざしに心を開く人がこの世界にもっと現れるように、マリアの取り次ぎを願いましょう。

年間第 20 主日(ヨハネ 6:51-58)



年間第 20 主日 (ヨハネ 6:51-58)

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む

「ユダヤ人たちは、『どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか』と、互いに激しく議論し始めた。」(6・52) イエスがご自分の肉を食べさせ、血を飲ませるのは聖体拝領によってですが、ユダヤ人たちには理解できません。ユダヤ人たちの陥った過ちを避けてイエスの肉と血に養われる生き方を追い求めることにしましょう。

わたしたちがある出来事に疑問を持つとき、「答えを知りたい」と思っている時と、「答えが出るはずがない」と疑ってかかっている時と両方あると思います。イエスが、「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」(6・51)と宣言した時、ユダヤ人たちは「自分の肉を我々に食べさせるなど、できるはずがない」と疑ってかかっていたと思います。

「ユダヤ人たち」とはイエスに敵対している人々のことですから、初めからイエスに教えてもらおうとか導いてもらおうという気はありません。ですから彼らが激しく議論したといっても、答を探し求めてのことではなくて、敵意を増し加える議論に過ぎなかったのです。

わたしたちは、ユダヤ人が陥った過ちに足を踏み入れてはいけません。ユダヤ人は「イエスが我々に自分の肉を食べさせ、血を飲ませることなどできるはずがない」と考えています。わたしたちは心を開き、「イエスが食べさせる、飲ませると仰ったのだから、きっと叶えてくださるに違いない」そういう考えに立って出来事と向き合うことが必要です。

わたしたちは幸いに、祭壇上でイエスがささげられ、ご聖体となってわたしたちの食べ物、飲み物となってくださることを知っています。ですからイエスがご自分を食べ物として飲み物として与えることは当時の人々のように疑いを持つことはありません。ですが今のわたしたちには、ほかの形でイエスを食べることについて試されていると思います。

たとえばイエスはわたしたちに次のような招きを与えました。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。」(マタイ 16・24-25)

わたしたちはイエスについて行くために、ときには自分の都合を横に置いてイエスに都合を合わせる必要があります。人によってはそれが一時的なことで終わらず、一生涯をイエスの都合に合わせて生きている人もいます。こうした生き方は、本当に報われるのでしょうか。

このような疑問は、イエスの招きを食べ物のように食べるか食べないか、問われているようなものです。イエスの招きがイエスの肉と血であって、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」(6・54) あなたはどうしますかとイエスは問いかけているわけです。

「自分を捨て、自分の十字架を背負って、イエスに従う」この道を選ぶ、食べ物として食べるとは、いろいろある食べ物の中からこの道を選び、食べるという意味ではありません。事の大小はあるかもしれませんが、自分を捨て、自分の十字架を背負ってイエスに従うのは、この選択肢しかないと信じて選ぶ、食べる必要があるのです。

わたしたちがイエスを食べ物としていただくとき、それは「いろいろ選択肢がある中で、イエスを食べ物として食べます」ではなく、「あなたをおいて、ほかにはないと思ったので選びました」このような気持ちでイエスに近づく必要があります。

あらためて、わたしたちはご聖体に、どのように近づいているのでしょうか。イエスがわたしたちの食べ物となってくださったのは、少し削って与えているではありません。いのちを投げ出して食べ物になってくださったのです。そのご聖体を、「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか」(6・68) そんな思いで受けているのでしょうか。

わたしたちの生きる時代は、「イエスがご自分を食べ物として与えることができるかどうか」という疑問は過ぎ去りました。新たに、「イエスは他に代わりのない食べ物か」が問われていると思います。ミサに参加し、ご聖体を拝領して、わたしたちは世に対して「イエスは他に代わりのない食べ物です」と証を立てましょう。

聖体を拝領できない場面もあるかもしれませんが。それでもミサに参加しているのは、「イエスは他に代わりのない食べ物です」と証を立てているのですから、胸を張ってほしいと思います。

わたしたちカトリック教会には「他に代わることのできない命のパン」があります。ミサに参加する人は、このパンを証しします。イエスというパンを食べることを知らない人に、わたしたちは証しを立て続けましょう。いつかわたしたちを通して、「他に代わることのできない命のパン」に飢え渴く人を見つけるかもしれません。わたしたちの働きは、まことの命のパンに飢え渴く人がいなくなるまで続きます。



年間第 21 主日 (ヨハネ 6:60-69)

命を与える霊の働きを見つけ出す

年間第 21 主日 B 年はヨハネ福音書第 6 章の最後の部分で、イエスと群衆の一連の対話の結びとなっています。イエスとの対話の中で、多くの人々は離れ去っていくこととなります。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」(6・60) しかしイエスが選んだ十二人はイエスのもとに留まります。離れ去っていく人々とイエスのもとに留まる人々にはどのような違いがあるのでしょうか。

浜串教会の聖櫃が鍵がかかなくなり、取り換える必要が出てきました。鍵の仕組みが特殊なので、鍵を修理するのは難しそうです。現在の浜串教会が建てられたときからの聖櫃なのですが、ご苦労さまでしたとねぎらって、新しい聖櫃に取り換えることにしました。

浦上教会の近くに典礼用品を取り扱っている修道会の店があるので相談に行きました。すぐ手に入る聖櫃は、少人数の聖堂には使えるでしょうが、浜串教会には向いていません。大きな聖堂には、見栄えのする大きさの聖櫃が必要です。

カタログを見ていて、「これがいいかなあ」と思った聖櫃を見つけたので、取り寄せることができるか尋ねました。「イタリアからの取り寄せです。値段も確認して返事します」ということでした。先週値段を教えてもらいましたが、80 万円するそうです。けっこうな値段です。

けれども、問題は値段に見合う価値があるかどうかだと思います。今まで使い続けた聖櫃は約 50 年働いてくれました。新しい聖櫃も、50 年とは言わなくても、40 年働いてくれれば、聖櫃を維持する費用は 1 年に 2 万円ということになります。十分理解できる金額だと思います。

福音朗読に戻りましょう。イエスの語る言葉は弟子たちにも十分には理解できていないようです。弟子たちの多くが「実にひどい話だ」と拒絶反応を示しました。どんな人も聞く人の言葉に自分の期待する言葉を探そうとすれば失望することが起こりえます。弟子たちも人間です。名誉を欲しがったり利益を欲しがったりする弟子もいたのでしょうか。イエスの言葉からは自分たちの欲しいものが手に入らないと見るや、イエスに完全に背を向けてしまいます。

一方で十二人の弟子たちはイエスに踏みとどまります。十二人が踏みとどまるだけの力を備えていたのでしょうか。わたしは十二人の力がそうさせたと言うよりも、いったん自分たちの考えを横に置いたので、イエスの招きに従うことができたのだと考えます。

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」(6・68-69) イエスの言葉に希望を置くためには、つつい物差しにしてしまう自分の考えを寛大に横に置くことが第一条件になってきます。

さらに、つつい取りがちな自分の判断に照らしてイエスを見る態

度を横に置くとき、はじめてイエスの中に「命を与える霊」があると理解できるようになります。イエスは神からの命を与えている。この方のあとに付いて行く価値がある。そのことが理解できると、イエスだけに希望を置くことも可能になります。

わたしたちはみな、イエスに招かれている生き方を続けています。なぜこの生き方を続けているか。イエスが命を与えるお方だとどこかで理解したからです。きちんと説明はできなくても、戸惑いながらもついて行けるだけの何かを、どこかでイエスに見つけて、イエスに呼ばれた生き方に自分を留まらせているのです。

何がきっかけで、イエスについて行くだけの理由を見つけるかは分かりません。司祭の中に、これから教区の屋台骨を支えてくれるだろうという方が、余命1年の宣告を受けて、イエスにすべてを委ねて生きる姿を完全に生きて旅立った先輩もいました。余命宣告を受けた後にその先輩司祭とたまたま回転寿司の店でご一緒しましたが、もはや何も恐れていない様子でした。命を与える方がだれであるかを完全に理解すると、いっさいの恐れから自由になります。

わたしたちは、イエスについて行こうと心に決めた何かをつかんでいる者同士です。具体的にこれと気付いている人は、ぜひ分かち合ってください。また、はっきりこれだと分からない人は、それが何だったのか教えていただけるように照らしを願いましょう。あなたがイエスについて行く決心をした理由を知ること、新しくイエスに従うように導かれる人が現れるかもしれません。



年間第 22 主日 (マルコ 7:1-8,14-15,21-23)

人の中から出てくるものが人を汚す

年間第 22 主日 B 年はユダヤ人の「昔の人の言い伝え」に関する議論を取り上げています。ユダヤ人は宗教上の清さに関してとても気を配っていましたが、ファリサイ派の人々と律法学者たちが大切にしていた実践はイエスにとって偽善と映っていました。今週は清さに関するイエスの考えに耳を傾けることにしましょう。

先週、浜串教会の聖櫃を新調する予定ですとお知らせしましたが、嬉しいことが起こりました。わたしは説教を毎週ホームページとブログで公開し、メールマガジンの形で利用者に配信していますが、読者の 1 人から聖櫃のために寄付をしたいという申し出がありました。

メールマガジンの読者からの寄付の申し出だったのでビックリしましたが、寄付を受けることにしました。いろいろな方が、わたしの説教を通して浜串教会に関心を持ってきているのだなと思い、感謝の気持ちでいっぱいになりました。どこにいても、全国の人々の心に触れる働きはできるのだと、ちょっと自信を持ちました。

さてファリサイ派の人々をはじめ当時のユダヤ人は、律法を実生活の中で守るためと教えられて昔の人の言い伝えを受け継いで守っていました。律法はモーセを通して神から与えられたもので、それから何百年も後のイエスの時代には実生活とずれが生じていました。そこでイエスの時代の人々にあてはめるための細かい規則が編み出され、当時の人々はモーセの律法をさらに細かく規定した昔の人の言い伝えも守るよう強要されていたのです。

イエスは、モーセの律法を実生活にあてはめようとした数多くの言い伝えはモーセの律法とは別物であり、ファリサイ派の人々が強要する昔の人の言い伝えの実践がかえって人々を神のおきてから遠ざけていると厳しく非難しました。神のおきてに耳を傾けることなく、人間が付け加えた細かい規則に目を奪われて、人々の心は神の心から遠く離れてしまったのです。

宗教上の清さに関するイエスの考えはこうです。「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」(7・15) 外出したから念入りに手を洗うとか、外国人も立ち寄る市場に買い物に行って帰って来たから全身を洗い清める必要があるとか、そのようなことで宗教上の清さが保たれるわけではないと、きっぱり言い切るのです。

むしろ、人が宗教上の清さを保つには、人間の心から出てくる悪い思いに警戒する必要があるのです。宗教上の清さを保つことも含め、モーセを通して神から与えられた律法をふさわしく守るためには、律法から派生した細則にとらわれるのではなく、律法の本来の精神は何か、律法に耳を傾ける必要があるのです。

ここで一つ問題が生じます。律法に耳を傾げるためにはどうすれば

よいのでしょうか。それはイエスの言葉に耳を傾けることです。これまではファリサイ派の人々や律法学者の律法解釈が幅を利かせていましたが、イエスがおいでになったことで、神のおきてが何を求めているのか、耳を傾けることができるようになったのです。

「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。」(7・14) イエスは「皆」と呼びかけました。神のおきてに耳を傾けるためには、すべての人がイエスに耳を傾ける必要があるのです。「わたしは律法学者だ。わたしは律法の実践にだれよりも熱心なファリサイ派だ」と権威を振り回している人々は特に、イエスに耳を傾ける必要があります。

「自分たちは無知な人々とは違って、この分野に明るい者、知っている者だ。」こうした人々が自分の立場を横に置いてだれかに耳を傾けることは本当に難しいと思います。たとえば、生まれて初めて釣りをするという人を連れて行って、その人がいちばん魚を釣り上げたとします。

こういう場合いちばん釣れている人の釣り方が正しいはずですが、では生まれて初めて釣りをしている人にベテランの人が釣り方を教えてほしいと言えるかということ、なかなか難しいのではないのでしょうか。自分は釣り方を知っていると思えば思うほど、目の前でたくさん釣っている初心者に教えを請うのは難しいと思います。

似たような経験は他にもたくさんあるでしょう。経験やメンツが邪魔をして誰かに耳を傾けることができなかった苦い体験をした人もいるかもしれません。イエスの言葉はこんな場面でも生きてきます。「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

メンツを捨てて、教えを請うことは、外から人の体に入る動きですから、どれだけ教えを請い求めても傷つくことではないのです。もしその人の中から「あんな奴に教えてもらう理由などない」という思いがわき出たなら、そのねたみの思いこそがその人を汚すのです。

人の中から出てくるものが人を汚します。その人の中から、イエスの声に耳を傾けることを邪魔する「ねたみ、悪口、傲慢、無分別」などが生じていないのでしょうか。だれかに謙虚に耳を傾けることを難しく感じているなら、あなたの心の中にあなたを汚す思いがあるのです。

生活を振り返って、神の心に適う生活を保つために、自分はずらわらずにイエスに耳を傾けているだろうか、考えてみましょう。イエスに耳を傾けるのに何らかの妨げが置かれていないか、点検しましょう。

「こんな相手に耳を傾けられようか。」あなたを汚すこんな思いが心の中にあるなら、すぐに心の中から追い出しましょう。外面的にどんなみじめな思い、傷つく思いをしても、イエスに耳を傾けることを何よりも大切にする。これが神の思いにわたしたちが触れる近道なのです。



年間第 23 主日 (マルコ 7:31-37)

耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話す

年間第 23 主日 B 年、耳が聞こえず舌の回らない人のいやしが福音朗読に選ばれました。この奇跡は本人だけでなく、周囲の人々にも変化をもたらします。周囲も含めた変化に注目し、今週学びを得ましょう。

今年は今週、9月第2週に夏休みをいただくことにしました。週の後半に沖縄に出張する必要があったので、ここで一息入れることにしました。ついでに広島のマツダスタジアムにも行ってこようと思っています。わたしのカーブを思う気持ちは熱狂的と言われても仕方がないです。ただわたしは自分が狂っているとは思いません。人間にはオレンジ色の血が流れているのではなく、赤い血が流れているからです。

何カ月か前に、若いカップルが司祭館を訪ねてきました。わたしたち結婚しますという報告と、当日の結婚式ミサに参列してほしいという依頼でした。わたしは「喜んで参列するよ」と二つ返事でした。

ところで、報告に来たカップルを見て、わたしが心の中で抱いた感情に自分でショックを覚えました。それは、とっくに二十歳を過ぎた青年が結婚の報告に来たというのに、わたしの目にはまだ子どもに過ぎない二人が立っているように見えたからです。

皆さんは親子の間でこんな会話を耳にしたことがないでしょうか。「自分はもう大人だ。子ども扱いしないでほしい。」たとえばそれは、自分の子が親に意見を述べている場面です。親が心の中で「子どものくせに何を言っている」と思っているところに、子どもからはっきりと釘を刺されるといようなケースです。

まだまだ子どもだと思っていた。けれどももはや子どもではなく、一人前になっているわけです。わたしには子どもはいませんが、目の前のカップルが子どものように見えた体験をあとで思い返して、自分は人としても司祭としても、人を子ども扱いしたりはしないとと思っていたのに、こうも変わってしまうのかと驚き、また呆れたのでした。

今週の福音朗読に登場する人は、耳が聞こえず舌の回らない人です。大きな障害を抱えて、社会生活に支障をきたしていたことでしょう。ほかにも、障害を罪と結びつけられて、この人が罪を犯したか、この人の先祖が罪を犯したので障害を背負っているのだろうと思われていたかもしれせん。

イエスはこの人の重荷を取り除いてくださいました。奇跡をおこなって、障害を抱えている本人を救い、また人々にご自分が神のあわれみを確実に与えることのできる方であることを証明したのです。

一つ、興味深いことがあります。イエスが奇跡をおこなったので、その人は「たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった」(7・35)わけですが、イエスが口止めをしたのは奇跡を目撃した人々であって実際にいやされた人ではありませんでした。

似たような場面がマルコ福音書の1章「重い皮膚病を患っている人

をいやす」という奇跡があります。ここではいやされた人に「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」(1・44) という指示を与えています。

両方は、奇跡の果たす役割が少し違うのかもしれませんが。重い皮膚病をいやしたときは、その人自身に神の憐れみを示すねらいがあったのでしょうか。今回の耳が聞こえず舌の回らない人のいやしは、障害を抱えているその人と、周りの群衆全体に関わる奇跡だったのだと思います。

もちろん今週の出来事でも、奇跡そのものは障害を抱えている本人のためですが、奇跡をおこなったときの言葉「エッフアタ」「開け」この言葉は周りにいる群衆にも関わりがあったのだと思います。

イエスの言葉は、群衆にどのように関わっていたのでしょうか。イエスの言葉で何が起こったかを考えると見えてくるとと思います。イエスが「エッフアタ」「開け」と言われると「たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった」(7・35) のでした。

これをもとのギリシャ語に近い形で日本語に直すと、「すぐに耳は開かれ、舌の束縛が解かれ、正確に語っていた」となります。どういうことかということ、障害を抱えていた人がイエスの言葉によって神から耳を開いてもらい、舌の束縛を解いてもらい、正確に語れるようになったということです。神が、人の悩みを取り除くことをよく表しています。

まとめるとこういうことではないのでしょうか。イエスがだれであるか、奇跡がどのような働きを持っているのか、いやされた人も群衆も理解していません。言葉で正確に語ることでできる人がいません。奇跡を通して、群衆も含め、神から耳を開いてもらい、舌の束縛を解いてもらい、イエスがだれであるかを語れるようになったということです。

ただ、イエスは人々に「だれにもこのことを話してはいけない」と口止めをされました(7・36 参照)。人々の驚きの言葉をギリシャ語に近い形で日本語に直すと、「彼はすべてを良くした。耳の聞こえない人々を聞こえるようにし、口のきけない人々を語れるようにした。」これは目の前の働きだけが語られています。やはり、わたしたちだけの力ではイエスがだれであるか、奇跡がどのような働きをするのか、正確には語れないのです。

神は確かに、わたしたちの耳を開いてくださり、舌のもつれを解いてくださり、はっきり話せるようにしてくださいます。その上で、わたしたちが語るときはいつも、イエスの声に耳を傾け、語るべき言葉を授けてくださるようお願い、それから語り出す必要があるのです。そうして初めて、わたしたちはイエスの望み通りに語るようになるのだと思います。

イエスはわたしたちの重荷を取り除いてくださり、わたしたちを解放してくださる。イエスをわたしたちの言葉ではっきり語るができるように、今日のミサの中で恵みを願いましょう。



年間第 24 主日 (マルコ 8:27-35)

自分の十字架を自分で決めないで背負う

年間第 24 主日 B 年、「ペトロの信仰告白」が福音朗読に選ばれました。ペトロの言葉はまだ炉から取り出された鉄のようなもので、イエスによってこれから信仰告白が試され、強められていく様子が描かれています。わたしたちの信仰も試され、強められる必要があるのです、じっくり朗読をたどってみましょう。

夏休みをいただいてきました。広島マツダスタジアムの野球観戦と視覚障害者情報提供施設の九州各地区からの研修会で沖縄に行ってきました。広島ではエース前田の力投、助っ人外国人エルドレッドの初回いきなりのツーランホームランなどもあってファンには最高の野球観戦でした。沖縄での研修会では視覚障害者への情報提供の総合的な技術向上に役立つ研修を受けることができました。ついでに、首里城などの史跡めぐりもしてきました。

ところで、先週夏休みを取るにあたって、わたしは間違いのないように念を押して出掛けて行ったつもりでした。けれども月曜日になって、わたしがたくさんの荷物を抱えて車に乗りもうとしているところに「どちらに行かれるのですか〜」と声をかけてくる人がいました。

わたしは急いでいたこともあるし、昨日お知らせしても次の日にはどこに行くのかと尋ねるかあと短気を起こしていたこともあって、喉元まで「知らん」と言いかけました。実際には「ここで短気を起しちゃうかん」と自分に言い聞かせて「今週から夏休みなんだよ」と何とか答えてその場を離れたのでした。

いろんなことを思いました。「どうすれば、間違いのないように伝えられるのだろうか。そもそも何をどうお知らせしても漏れなく知らせるのは無理なのだろうか。」そうなるとお知らせする必要があるのかということにもなりますが、やはりお知らせしなければもっと伝わらない。悩ましいなあと思いました。

実は今週の朗読箇所も、イエスが悩ましい思いをする場面があります。イエスが弟子たちに「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」(8・29)と投げかけると、ペトロが答えます。「あなたは、メシアです。」(同)この答えを聞くことのできたイエスは、ひとまずご自分のこれまでの働きが理解されていることに満足したでしょう。

そこでイエスは、ご自分がたどる道を、「誤解のしようがないくらいに、意味を取り違えることがないほどに」はっきりと話して聞かせたのです。「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった。」(8・31-32)

それなのにペトロはイエスの言葉をさえぎりました。自分が信仰を言い表した方が、そんなみじめな道をたどるはずがない。あるいは、そ

んな道をわたしたちがたどらせませんとでも言いたかったのでしょうか。

「そんな道をたどるはずがない」はまだしも、「そんな道をたどらせません」はもう上から目線です。イエスの声に聞き従う心構えを見失っています。心構えを見失い、上から目線になってしまったペトロに目を覚まさせるために、イエスは彼を叱ったのでした。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」(8・33)

ペトロへの叱責も手厳しいですが、群衆と弟子たちを呼び寄せて言われた心構えもひるみそうになるほど厳しい招きです。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」(8・34-35)

どうしてこんな厳しい招きをされたのでしょうか。イエスに従うということは、人間の力だけでは果たせないことだからです。人間的にはみじめな思いをしたその先に栄光が与えられる。そのような道は人間の理解の及ばない道です。この道を歩むイエスの後に従うためには、神が用意したそれぞれの十字架を背負って歩く必要があるのです。

十字架は漬物の重石のようなものかもしれません。漬物にとっては迷惑なもののように感じるかもしれませんが、漬物が立派な漬物となるために、どうしても必要なものなのです。わたしたちキリスト者が、イエス・キリストの後に従って、本物のキリスト者になるために、自分の十字架という重石がどうしても必要なのです。

お休みをいただいている期間、まず緊急の電話はかかって来ないだろうと思ってはいましたが、それでももしも電話がかかってきたら、すぐさま引き返すつもりでいました。それは、わたしに与えられた自分の十字架だと思っています。やはりわたしの気持としては、どこに行っても、どこにいても、浜串小教区の主任司祭という自分の十字架を背負っていると感じます。

「こんな理解に苦しむ道はまっぴらごめんだ。」そう感じる場面もときにあるかもしれません。イエスはわたしたち一人一人に違った十字架を用意しておられるのだと思います。自分の十字架を背負ってみても、これは自分の十字架ではないと言い張るかもしれません。

そんなときでも、イエスがみじめな最期を遂げて復活の栄光を手に入れたことは忘れてはいけないと思います。わたしの命を救うのはイエス・キリストです。みじめな思いを背負うことも含めて、イエスの後に従う勇気を、ミサの中で願いましょう。



年間第 25 主日 (マルコ 9:30-37)

途中で何を議論していたのか振り返る

年間第 25 主日 B 年、イエスは弟子たちに問いかけます。「途中で何を議論していたのか」(9・33) この言葉を手掛かりに今週の糧を得たいと思います。またこのミサは敬老者のためのミサです。わたしたちの先輩にミサを通して感謝を表しましょう。

16 日(水)にお招きいただいた福見の園敬老会で、思いがけない人が舞台上で歌を歌っていました。わたしの洗礼の抱き親である鯛ノ浦のおじさんです。もうおじいさんですが、わたしが学生のころから鯛ノ浦教会信徒会長としてずっと教会を支えているのを見て来ました。

当時喜蔵おじさんは営林署に勤めていましたが、わたしが司祭に叙階された直後、木の切り出し作業中事故に遭い、後遺症を負ってしまいました。つい最近福見の園でデイサービスを利用していることを知りました。病人に聖体を授けるチャペルで喜蔵おじさんを見たとき、びっくりしたと同時にもうこんなお年寄りになったのかと思ったものです。

身体の不自由にもめげず、懸命に生きている姿に心打たれました。そのおじさんが、聖体を授けて福見のチャペルから帰る間際、「中田神父さま、もう銀祝ですか？」とわたしに声をかけてくれたのです。自分の身の上話ではなく、わたしへの気遣いをしてくれたのです。

「今 23 年目だからなあ。喜蔵おじさんもう少し元気でいてね。」あとになって「少し配慮が足りなかったなあ」と思いました。どれだけお世話になったか分からない恩人なのに、感謝の言葉一つすら言えなかった。「あと 2 年たっしやで暮らせよ。」まるで社交辞令のような言葉。相手に対して失礼ではなかったか。そう思ったのです。

わたしが司祭になるまで、おじさんは自分の両親と変わらないくらい面倒を見てくれました。いよいよ司祭になるときも、だれよりもお祝いを包んでくれました。そして待ちに待った司祭の姿をその目で確かめたと思ったら、その後は身体不自由という十字架です。

ふつうでしたら、どれだけ神さまを恨むことでしょうか。わたしが司祭になるときまで、洗礼の抱き親としてずっと目をかけてくれたように、その後の 23 年間も、何かと世話を焼いてあげたかったはずです。思うことを一つも果たせないまま、今日まで生きて、久しぶりに再会した。何かほかに言いたいことがあっても不思議ではありません。

ところが、おじさんは誰にも、もちろん神様にも文句ひとつ言うことなく、わたしの銀祝を楽しみにしてくれたのです。かつて洗礼者ヨハネは、自分の弟子たちが「ラビ、(中略)あなたが証しされたあの人、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています。」(ヨハネ 3・26)と訴えてきたときに「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている」(同 3・29)と答えたことがありました。久しぶりに再会し、身の上を訴えるのではなくわたしのこと

を心から喜んでくれるおじさんに、洗礼者ヨハネと同じような懐の広さを感じたのです。

人の言葉は思いを表すものです。予想もしなかった十字架を背負った 23 年の間にわたしのおじさんが何を考えていたか、少し想像できました。おじさんはどのような境遇に置かれたとしても、イエスに従うことを優先して生きてきたのだと思います。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」（マルコ 9・35）自分に背負いきれないような十字架を背負わせたイエスに、本当なら文句の一つでも言いたかったはずですが、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になる道を受け入れたのです。

自由に動かない手足、思い通りに語ることのできない舌。鯛ノ浦でその名を知らない人がいないほど知られている人でした。そういう人にとっては受け入れ難い選択肢です。けれどもおじさんは、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」（9・37）このイエスの言葉をそのまま、文字通りに今日まで生きてくださったのだと思います。

イエスは弟子たちにお尋ねになりました。「途中で何を議論していたのか」（9・33）。予想もしなかった晩年を過ごしながら、おじさんは何を考えて過ごしてきたのでしょうか。それに比べて、わたしは司祭として何を考えてここまできたのでしょうか。きっとわたしは責任を問われると思います。弟子たちがイエスの問いに黙ってしまい、答えられなかったように、わたしもイエスが考えていたものとは似ても似つかぬものを途中で考え、議論していたのだと思うと、返す言葉もないくらいです。

イエスは、弟子たちが途中で何を議論していたのかすべてお見通しだったことでしょうか。そのことには一切触れようともしませんでした。弟子たちが考えを改めてくれることを信じて、過去を問うのではなく、未来に目を向けさせたのです。

これからもっと自分に従うことが難しくなる。だから、今のうちにわたしの言うことに耳を傾けなさいと弟子たちに促します。わたしたちもまた、この先今よりもずっとイエスに従うことが難しくなる。それが見通せるのに、なぜわたしたちは耳を貸そうとしないのでしょうか。

「途中で何を議論していたのか。」わたしはしばしば、途中なんてどうでもいいのだ、結果さえついて来れば構わないのだと思って生きてきました。福見の園の敬老会で見た喜蔵おじさんの姿は、わたしに途中で何を考えるべきかを教えてくれたのだと思います。

敬老のお祝いを迎えた方々を前にして、もう一度戒めの言葉をいただいている、そんな気がします。わたしたちに途中で何を考えるべきかを教えてくださる先輩方に、神様がこれからも祝福された日々を与えてくださるように、ミサの中で祈りたいと思います。



年間第 26 主日 (マルコ 9:38-43,45,47-48)

わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方

「はっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」(9・41)キリストの弟子は、性格や取り組む姿勢などそれぞれ違いがあるかもしれませんが、宣教の働きに対して一杯の水を受けるに値する人々です。

12人の弟子たちは自分たちに従わない宣教者を排除しようとしていました。多様性を持つことが豊かさにつながることを今週学びたいと思います。同時に、キリストの弟子たちが受け取る一杯の水とは何か、その水を差し出す人に与えられる報いとは何かも考えてみましょう。

秋の大型連休中に妹夫婦が実家の母親を訪ねてきました。妹夫婦の子どもは9月23日が誕生日ですから、母親の敬老のお祝いと、甥の4歳の誕生日を一度に祝うまたとない機会に恵まれました。

わたしは特に何もしてあげられませんが、魚くらいは持って行ってあげようと思い、無類の釣り好きである義理の弟さんを月曜日、火曜日の2度にわたってボート釣りに誘い、お魚を確保しに行きました。

月曜日はイトヨリやオオモンハタなどがぼつぼつは釣れましたが、船頭としては物足りない釣果でした。五島で釣りをしているのですから、忘れられないような魚を釣らせてあげたいと思っていたのです。

チャンスは偶然やってきました。火曜日もクーラーボックスになかなか魚が増えないまま、このまま帰ることになるのかと諦めかけていましたが、「あと30分だけ」と思い、最近アジを釣った場所にボートで移動して釣り始めたのです。しばらくして義理の弟さんのリールから糸がひったくられ、竿がしなり、海中に突き刺さりました。

「よっしゃ来たか！」何が掛かったかはその時点で分かりませんでした。ただものでないことはすぐに分かりました。絶対にバラさないでくれ。「もう少しだったね」とか「惜しかった～」では終われないのだからとハラハラして見守りました。

7分近いやりとりをして、ようやく上がったのは3.5キロのカンパチでした。たまたま、その魚もアジを食べに来ていたのだと思います。義理の弟さんも大満足、船頭のわたしも鼻高々で、実家ではさもわたしが釣ったかのような自慢をしながら食べました。

ごく最近、命の危険にある一人のシスターを見舞いました。長崎の病院に入院しているので長崎に行ったついでに見舞いに行くのですが、前回見舞いに行った時は歩き回ることができたのに、今回見舞いに行ってみるともうそんな元気はなくて、ベッドに釘づけになっていました。いっぱい話すのですが、言葉がところどころ呂律が回っていませんでした。おそらく、痛み止めの薬の副作用か何かで、言葉にも障害が出ているのだろうと思いました。

わたしは、シスターの状態を判断して、これは聖体拝領だけではなくて病者の塗油も授けておいたほうがいいなあと思い、両方の秘跡を授

けました。わたしは縁あってこのシスターの両親にも洗礼を授け、またその両親共に旅立ちのための葬儀ミサをしたので、いよいよとなればシスターのためにもできるお世話はしてあげたいと思ったのです。

病院の手厚い看護に比べれば、わたしが気が向いたときに見舞ってご聖体を授けたりするのは、シスターにとってほんのわずかの時間、わずかなお世話かもしれません。それは、今週の福音朗読の「キリストの弟子に与える一杯の水」程度のことかもしれません。

けれども別の意味もあると思います。乾燥地帯にあるパレスチナの人々にとって、水を手に入れるのはたやすいことではありませんでした。宣教活動をするイエスの弟子たちが、一杯の水を飲ませてもらうということは、何にもまして嬉しいこと、天の恵みだったと思います。

また、水を提供するということも、水道からコップ一杯水を汲んで渡すようなそんな単純なものではなかったのです。時間もお金も費やして水汲みに行って、自分たちにとっても貴重な水なのに、それをあえて人に譲って飲ませる。そういう重みがあったわけです。

時間で計れば、わたしがシスターに施したお世話はたかが知れているかもしれません。けれども命の危険に差し掛かっても運命を恨むことなく、神さまからたくさん愛されたのに神さまにあまりお返しできなかったと悔やみながら秘跡にあずかる姿は、キリストの弟子だという理由で一杯の水に値すると思えました。

わたしはこのシスターと何度も衝突しました。わたしの落ち度を、シスターはどんなに嫌がられてもわたしに忠告してくれました。シスターにも言い分はあると思うけど、わたしにも言い分がある。そう言いながら昼ご飯を食べながら大声で喧嘩したこともありました。

キリストの弟子という生き方をお互いに背負いながらも、アプローチの仕方も解決法も意見が合わないことが多々ありました。けれどもわたしは、このシスターが秘跡の恵みという一杯の水を受けるにふさわしい人であることは疑っていませんでしたので、個人的なこととは別に秘跡を授けに行ったのです。

シスターは残された時間がそう多くないことを知っていたので、わたしと頻りに衝突したことをゆるしてほしいと言っていました。わたしは「何も言うな。もう何も言わなくていいから」と遮って、帰りの船の時間ギリギリまで最後になるかもしれないひと時を過ごしました。

キリストの弟子は、寝たきりであってもキリストの弟子です。命を削って、主キリストのために身を捧げます。意見が対立することがあっても「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方」(9・40)です。意見が合わない、考え方の違いをはっきり主張するこのシスターと出会ったので、わたしも人の話を少しは聞くようになれたのだと思います。

シスターも秘跡の恵みという一杯の水を受けました。さんざんこのシスターに心配をかけましたが、これからはずっと、手のかかる一人の長崎教区司祭のために、祈ってほしいと思っています。



年間第 27 主日 (マルコ 10:2-16)

神は彼に合う助ける者を与えてくださる

「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。」(10・5) ファリサイ派の人々は「モーセが離縁状を書いて離縁することを許しました」(10・4) と主張しましたが、モーセがこのような考えに至ったのは人間の頑固さに妥協したからというより、人間の頑固さを告発するためだったとイエスは説明します。

ファリサイ派の人々は結婚を掟の立場からしか見ていません。結婚の意義や尊さを見ず、結婚した人が掟に触れずに妻を離縁する抜け道までも議論していたのです。

イエスは結婚の意義や尊さこそ大切にされるべきであると反論しました。イエスは旧約聖書の創世記を引用しながら、結婚が本来わたしたちに求めていることは何か、考えさせようとしています。わたしたちもイエスに導かれて結婚の意義や尊さを再確認しましょう。

9月29日の司祭団ソフトボール大会、長崎司祭団チームが力を十分に発揮して優勝しました。全体では3チームで総当たり戦を行い、長崎チームが2勝、佐世保平戸チームが1勝1敗、五島チームが2敗という結果に終わりました。

今年の五島チームは弱かったのかなと思われているかもしれませんが、試合の流れもあるし、勝負は紙一重という場合もありますので、わたしは特別弱かったとは思いません。ただ、大会の運営(参加費の徴収、審判の確保、女性部の奉仕の依頼、飲み物の買い出し、当日大会終了までのさまざまな雑事)そういうことに気を取られて本来の力を発揮できなかったかもしれないなあとは思っています。

わたしの結果は、2試合でヒット1本と、タイムリー2塁打1本でした。ホームランは、今年ほどの神父さまもだれも打ちませんでした。こういう時にわたしが一人だけ打てば目立ったのですが、残念です。

イエスが結婚の意義を再確認するために引用したのは創世記2章です。その中で神は「彼に合う助ける者を造ろう」(創2・20)とお考えになりました。その男と女が力を合わせて生きる者となることについて「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」(同2・24)と宣言しました。この部分をイエスは引用していると思います。

「天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」(マコ10・6-9)

ここから読み取れるのは、結婚の意義と尊さは、男女のカップルが対等に向き合う者として描かれているということです。男性を支えるためだけに女性が与えられたわけではありません。また、二人は一体となって結婚生活のさまざまな場面を体験し、ときには難局を乗り越えていく。そこに結婚生活の意義と尊さがあるということです。

人が前に向かって歩いていくためには、さまざまな問題を判断し、選択し、行動する必要があります。自分一人の判断ですべてを決めることは危険な場合もあります。そこに「向き合って助けてくれる者」がいて、力をもらえるのはどんなに有難いことでしょう。すぐそばに、助ける者がいる。それが、結婚生活なのだと思います。

また人間の成長のためには、苦しみの道を避けては通れません。苦しみがどんな意味を持っているのか、なぜこのような苦しみを通らなければならないのか、自分一人では背負いきれないこともあるでしょう。苦しみの道を通して、人間として成長する。結婚した男女は、避けて通れない苦しみを、もはや二人ではなく一体となって、乗り越える力を互いに与えるのです。

もしかしたら、興味や関心は次第に薄れていくかもしれません。毎日聞く同じような話は退屈かもしれません。また、次第に衰えていくことを互いに受け入れることは不可能と思えるかもしれません。

けれども、結婚した二人は、神が結び合わせてくださっているのですから、神はたえず、必要な力と恵みを与えてくださいます。こうして結婚は、単に人間に求められている掟の一つにとどまらず、互いに成長し、互いの完成のために関わり合って生涯を全うするのです。

結婚を掟の一つと見るファリサイ派の人々は律法が求めている心を忘れて形式主義に陥り、形式に触れないような抜け道にまで議論が及んで行きました。イエスは結婚を定めた神の思いに目を向けさせました。結婚の意義や尊さにあらためて気づけば、夫婦で担っていく苦しみさえも尊いものになります。神が与えてくださった恵みに感謝する一週間といたしましょう。



年間第 28 主日 (マルコ 10:17-30)

イエスは「それからわたしに従いなさい」と呼ぶ

「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

(10・7) 今週の福音朗読に登場する金持ちの青年は、先の問いを、イエスのもとに走り寄り、ひざまずいて尋ねました。真剣に、永遠の命を受け継ぐ手段を知ろうとしていたのです。なぜ、この人は永遠の命を受け継ぐ道を選べなかったのでしょうか。

先週火曜日から水曜日にかけて、秋の司祭研修会に参加してきました。3つの研修がありましたが、その中の「新しいローマ・ミサ典礼書の総則」に基づく変更箇所の学びはわたしたちの日々のミサと関わってきますので、かいつまんで報告したいと思います。

「ローマ・ミサ典礼書の総則」というのは、ローマの典礼にしたがってミサをささげる場合、次のようにしなさいということが事細かに定めてある指示書のようなものです。従来の指示書にさらに今回変更が加えられ、今年11月29日の待降節第1主日からは一斉に指示を守ってミサをささげる必要があります。徐々に慣れていくために、今日は次の3つを守ってもらうよう、お願いをしたいと思います。

1つは、ミサの初めにもお願いしましたように、第一朗読、第二朗読者は、朗読が終わったら自分で「神のみことば」と答えてください。今回変更された「ローマ・ミサ典礼書」は、朗読者自身が「神のみことば」と唱えることが明記されました。ご注意ください。

2つめは福音朗読で、たとえば「マルコによる福音」と告げます。会衆の皆さんは司祭と同じように、額と唇と胸と3回小さな十字を印してください。ここには「みことばをよく理解し、人々に宣べ伝え、心に深く刻んで生きる」という思いが込められています。

3つめは、パンとぶどう酒の奉納です。これまで全員立った状態で奉納していましたが、今週からは会衆は座って奉納者が奉納するのを見届けてください。なぜそうするかと言うと、「みなさんこのささげものを、全能の神である父が受け入れてくださるよう祈りましょう。」この呼びかけを活かすためです。「受け入れてくださるよう祈りましょう」と呼びかけて会衆全員の願いが祭壇上に集められます。

「ローマ・ミサ典礼書の総則」に加えられた変更点の適用について、まだいろんなことがあります。少しずつ実施しながら待降節までに調べたいと思います。

さて福音朗読ですが、イエスが金持ちの青年に「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」(10・21)と告げたとき、青年は立ち去ることになります。イエスと青年の間で、どのようなやり取りがなされたのでしょうか。

金持ちの青年の真剣な態度に、イエスも正面から向き合っています。「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。」(10・21)この様子から

明らかです。この時イエスは「わたしが言いたいことは、分かっているよね」と、見つめながら思っていたことでしょう。それは単に持ち物を売り払い、貧しい人々に施すわざを求めたわけではないということです。

わたしたちは、もしかしたらイエスの言葉を読み違えているかもしれません。「持ち物を売り払い、貧しい人々に施せば、一文無しになるではないか。」わたしはそうは思いません。若くしてすでに金持ちになることができた青年です。

その気になれば、まったくの一文無しからまた財産を築くだけの才能は持っていたでしょう。だからこそ、持っている物を売り払い、貧しい人々に施すようにイエスも言ったのです。問題はその後、「それから、わたしに従いなさい」（10・21）この段階に進むことができるかどうかなのです。

いったん持っている物を売り払い、貧しい人々に施しました。しかしこの青年が、「また一から財産を築き上げよう。わたしにはその才能も時間もある」と考えるなら、彼の状態は元に戻り、金に執着し、財産に信用を置く生き方に戻ってしまうでしょう。そうではなく、これからはイエスに信頼を置いて生きることを求めたのですが、彼の考えはおそらく変わらなかったのだと思います。

イエスはまずチャンスを与えたのです。生き方を変えるチャンスを与えて、「その後わたしに従う生き方に変えてほしい。もちろん生き方を変えないという道もあるが、わたしが望んでいるのはどちらか、分かっているよね。」イエスと金持ちの青年の間には、このような何往復ものやり取りが込められていたに違いありません。

わたしたちは、簡単には自分の生き方を変えられません。そうかと言ってほかの人から強制的に変えられてしまうこともこのみません。イエスはこうした人間の心をよくご存知なので、人生のどこかで決定的な場面を用意してくださるのです。

わたし自身は、大神学生時代に追突事故を起こして免停になった時に自分を神さまに預ける決心ができたと思います。もちろんその時から100%実現できているわけではないですが、イエスについて行こうと決めるか、悲しみながら立ち去るかの分かれ目であったことは確かです。

イエスが求めているのはすべてを無くしてしまえという単純なものではありません。今置かれている生活や環境がガラッと変わった時に、わたしを頼りに生きてくれますか。それともこの世の何かにすがり続けますか。そういう問いかけです。

無くしたくないものを無くすこともあります。かけがえのないものさえ失います。誓ったことも守れなくて失意の底に沈むかもしれません。それでも、イエス・キリストを拠り所として生きてくれますか。それが今週わたしたちに問われています。よい答えを導き出せるように、このミサの中で取り次ぎを願ひましょう。



年間第 29 主日 (マルコ 10:35-45)

神の前に偉くなる道を胸を張って生きる

「しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」(10・43-44) イエスは弟子たちに彼らの歩くべき道を示されました。支配者や偉い人たちが目指すこの世の道ではなく、神の前に偉くなるための「別の道」を弟子たちに示します。イエスが示された「別の道」はわたしたちにも関わりがあります。考えてみましょう。

先週金曜日、いつもの通りの準備でボート釣りに出て 12 キロの青物を釣り上げてしまいました。ブリだろうと思いますが、ヒラスかもしれません。日曜日のソフトボール大会の打ち上げに使う予定で、浜串漁協の冷蔵庫に預かってもらっています。特大ホームランを打った気分なので、ソフトボール大会でのホームランはもうどうでもよくなりました。

今回は運が良かったと思っています。たまたま、買って来たばかりの糸を買ったばかりの 3000 番のシマノリールに巻いて出かけていました。0.8 号の PE300 メートルに 3 号のリーダーを 5 メートルです。竿は、いつもと違う柔らかめの、よくしなる竿を持って行きました。

朝 8 時、ふだん釣りをしているマリアさまと見附島 (みつげじま) を直線で結んだ真ん中あたりでイトヨリを釣ろうかなくらいの感覚で開始しました。何回かバラシが続いたので今日はボウズかもと諦めていたら満潮の午前 10 時、今まで体験したことない重さが竿に伝わりました。内心「うわっ、サメがかかったか」と悪い方に考えてしまいました。

まあいずれにしても、掛かってしまったのだから、引きちぎられるかハリから外れるかするまではやり取りしなければなりません。ボートの周りをゆっくり回る相手とかなりの時間格闘した結果、ようやく姿が見えまして、青物だと分かった時は緊張しました。最後の最後逃げられでもしたら、サメは諦めがついても、青物は諦めきれないからです。

片手に竿、片手に網を持って最後の取り込みをしようとしたのですが頭は入っても尻尾が入りません。竿は投げ捨て、尻尾を掴んで何とか引き上げたのが掲示板に貼ってある魚です。もう、釣りに関しては何も思い残すことはありません。あとは釣った魚を皆さんにお配りして、仕えられるためではなく仕えるために、この趣味を活かしたいと思います。

福音に戻りましょう。イエスが弟子たちに示された道は、偉くなるために支配者が目指す道のりと比べると遠回りのように見えます。実際はどうでしょうか。わたしは、イエスが示された道こそ、神の前に偉くなる近道であり、王道であると思います。なぜなら、神の子みずからがこの「皆に仕える者」「すべての人の僕」になられたからです。神の子が選ばれた道は、きっと近道であり王道であるに違いありません。

では弟子たちは、イエスが示された道を躊躇なく選ぶことができたのでしょうか。ヤコブとヨハネの願いが、弟子たちの中に潜む名誉心や

出世欲を抑えきれないでいたことが伺えます。イエスが直接選ばれた 12 人の弟子たちでさえも、イエスに示された道をまっすぐに歩むことは難しかったのです。

しかしまったくついて行けなかったわけではありません。よろめきながらも、ためらいながらも、弟子たちはイエスがたどった道について行きました。すなわち、すべての人に仕える道、イエスを憎み、命を奪おうとする悪人にも仕えて命をささげようとする道です。

「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。」(10・39) ここで言う「洗礼」は殉教を指しています。弟子たちも、キリストを信じる者の集まりである教会を迫害する人たちに深い愛を示し、自分たちの命をささげて仕えたのでした。

わたしたちも、イエスの示された道を歩むべきです。すべての人に仕える道は、イエスに倣う道ですから神の前に偉くなる近道であり王道です。しかし生身の人間です。どこでイエスに倣う道を歩む決心を固めることができるのでしょうか。

わたしたちがイエスの示された道を自分の歩むべき道にするためには、これまでの信仰の先輩を参考にすることが助けになります。迫害する人にも仕えるというこの険しい道を歩んだ先輩たちは、ある人は殉教者として、ある人は証聖者として神の前に名を残しました。

また名前は残さなくとも、神の国にその名を刻むことができました。わたしたちの信仰の先輩たちは、「皆に仕える者」「すべての人の僕」になる道が、神の前に偉くなる道であることを雄弁に語っています。

もう一つわたしは、次のように考えることでイエスが示された道を自分の道とする決心が固まるかもしれないと思っています。それは、「仕える」という道は、多くの場合だれかの役に立つ道でもあるということです。

わたしたちは人の役に立つことを大いに喜びます。人の役に立つ人物のことを「あの人は使える人だ」とも言います。わざわざ名誉心や出世欲を満足させる必要はありませんが、自分が人の役に立っている、そこそこ使える人間であるという思いは、喜んで人に奉仕する、お仕えるきっかけになるのではないのでしょうか。

時には、仕えることの難しい相手もいるかもしれません。同級生でありながら、自分は平社員で相手は局長であるとか、同級生でありながら自分は一介の主任司祭、相手は大司教であるということも考えられます。それでも、仕える者になることで、イエス・キリストのお役に立てるとすれば、これ以上望むことはないはずです。

イエスはわたしたちに、「皆に仕える」という神の前に偉くなる道を示してくださいました。それは同時に、人の役に立つ道、使い物になる道でもあります。キリストを信じない者からはどう言われようとも、神の前に偉くなる近道、王道を胸を張って生きていきましょう。そのための恵みを、今日のミサで願いましょう。



年間第 30 主日 (マルコ 10:46-52)

従うことで神の働きの目撃者だと証しする

「そこで、イエスは言われた。『行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」(10・52) 道端にいたバルティマイに、イエスは目が見えるようになる奇跡と、歩むべき道を示してくださいました。今週の物語に学び、わたしたちの取るべき態度を見いだすことにしましょう。

物語に登場するバルティマイは道端に座り、人々の憐れみにすがって生きるしかない人物でした。目が見えないという不自由だけでなく、自分で人生を切り開く方法も与えられずに生きていたのです。けれども「ナザレのイエス」だと聞くと、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」(10・47)と叫びました。

バルティマイは、チャンスに恵まれなかったけれども、彼自身は活力に満ち、行動的な人物だったのかもしれませんが。「多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と叫び続けた」(10・48)となっています。

さらにバルティマイは、ナザレのイエスがそばを通りかかった時、すでに自分が歩くべき道に気付き始めていたかもしれません。それはイエスによって完全に開かれる道、イエスを信じ、イエスに従って生きるという道でした。

それまでは、Aという人が憐れみをかけてくれればその人にすがり、Bという人が憐れんでくださればその人にすがると、そうした不安な日々を過ごしていました。どのようにしてナザレのイエスを知ったかは書かれていませんが、バルティマイの中でついに、信頼して一生涯ついていける人、運命を委ねることのできる人に出会ったのです。

バルティマイはイエスに呼ばれ、上着を脱ぎ捨て、踊り上がってイエスのところに来ました。ここで「上着を脱ぎ捨てた」とありますが、この上着はただ単に着ていたものを脱ぎ捨てたという意味ではなさそうです。バルティマイにとって「上着」とは、彼の身につけるものすべて、もしかしたら家財道具すべてだったかもしれません。

彼はイエスに呼ばれたことの喜びで、身につける唯一のもの、自分のたった一つの財産を捨てて、イエスに従ったのです。これからはイエスが自分の生きるすべてであり、イエスの示す道が歩き続ける唯一の道になったのです。

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちはある時点でイエスに呼ばれ、イエスに示された道を選ぶかどうかを尋ねられています。たとえば結婚を機に洗礼を受けた人は、イエス・キリストを信じて道を歩くという決心を自分で立てている人です。これからの人生、喜びも悲しみも、イエス・キリストに信頼して生きていくと、信仰を表明して今に至っているはずです。

今、洗礼を受けてからの歩みを振り返って、これまでよりどころに

してきたものを脱ぎ捨てても、イエスに信頼を寄せて生きてきたという実感があるでしょうか。イエスがわたしを呼ばれたのに、わたしが最後に信頼するものは、何か別のこの世のものでしょうか。

またここにいる多くの人々が、堅信の秘跡を受けてイエスに呼ばれた人々のはずです。洗礼の時に受けた恵みを、人々の前で強くあらわしなさいと、イエスになり代わって堅信を授けてくださった大司教さまに促され、これからは大人の信者として歩みますと決意表明したはずです。

その歩みは、今も変わらず保っているのでしょうか。あるいは堅信の恵みに強められたのに、イエスに従って歩むと表明した時の熱意は冷めて、消えていくはかないものを追いかけて生きているのでしょうか。

イエスは今も、バルティマイの前にいて、道を進まれるお方です。バルティマイが歩まなければならない道、困難ではあってもイエスを信じて生きるという道を見失わないように、先を進んでおられるのです。それはわたしたちにとっても同じで、イエスに従いますと表明した人々が道を逸れないように、今も先を歩いて案内してくださいます。

イエスの向かう先には、十字架があり、イエスはそこで命をささげることを知りながら歩いています。それはわたしたちがイエスを信じて生きることで生じる困難に恐れて逃げ出さないためなのです。

バルティマイは、なお道を進まれるイエスに従いました。自分が、信頼して一生涯ついていける人、運命を委ねることのできる人に出会ったことを証明し続けるためにイエスに従っていきました。

わたしたちも、なぜあなたはこの道を歩くのですかと問われたら、「この道の先におられる方は、わたしが一生をかけてついて行く価値のある方だからです」といつでも証明できるように心の準備をしておきましょう。どこに置かれていても、どんな状態にあっても、「わたしは今、生涯をかけて信じ続ける人をわたしの生活で証ししているのです」と言える勇気を持ちましょう。証をするチャンスがない人も、わたしにもチャンスを与えてくださいと、このミサの中で願いましょう。



諸聖人 (マタイ 5:1-12a)

なぜわたしたちは諸聖人を祝うのでしょうか

教区広報担当者の全国会議のための東京出張から帰りました。教区報や、教区ホームページの効果的な作り方について、さまざまな会社のホームページ作りにアドバイスを与えている人が講師に招かれ、「カトリック教会の教区報・ホームページにも、会社のホームページの作り方から刺激を受けて、インパクトがあり、説得力のあるホームページ作りを心掛けてください」という内容でした。

講師の授業の中で、サイモン・シネックという人の15分くらいの動画をみんなで見ました。社会に大きな影響を与える人とそうでない平均的な人とでは正反対の行動パターンを取るという説明が印象的でした。大衆を動かさずに終わる人たちの行動は「それは何か」から説き起こして「どのようになっているか」を説明し、「なぜそうなのか」で大衆に行動を促しますが大衆は動かないというのです。

社会に大きな影響を与える人は、「なぜそうなのか」から説き起こして「どのようになっているのか」を説明し、「それは何か」と最後に大衆に示す。すると大衆は行動するというのです。

講師が例に挙げたのは録画ができるテレビでした。多くのメーカーは「これは録画ができるテレビです」から始まって、「今見ている番組を録画したり、前もって予約して録画したりできます」と説明します。最後に「何度でも見たいと思う番組を残せるって素晴らしいでしょ。買いませんか？」と勧めるわけです。ですが実際にはあまり行動を起こしません。

他方ぜひ買ってみたいと思わせるメーカーの宣伝方法は、「なぜあの時録画しておかなかったのだろう。後悔したことはありませんか？」から始めます。そして、「今見ている番組は、録画ボタンを押せばすぐに録画できます」と説明し、最後に「これからはこの録画できるテレビがあなたの悩みを解決してくれます」と売り込むというのです。順番を逆さまにして「なぜそうなのか」から始めるだけで人は行動するのだそうです。あなたも「なぜ」から出発すべきだというのが彼の主張でした。

言われてみると、長崎教区のホームページも「これは何か」から始まって、「どのような中身か」を説明し、「なぜ必要か」と最後に訴えかけているありきたりの作りになっていると思いました。11月10日に、研修で学んだことをどう生かすか、わたしも加わって話し合いを持ちます。ぜひ出張費の元を取れるように努力したいと思います。

11月1日は諸聖人です。せっかくですから、諸聖人の祭日に思いを向け、行動を引き出すために「なぜ」から始めてみましょう。なぜ教会は、死者の月の最初に諸聖人の祭日を祝うように促しているのでしょうか。神のもとにある諸聖人とわたしたちは、どのようにつながっているのでしょうか。

教会はその誕生の初めから、迫害の中にあり、殉教者が絶えません

でした。そして教会は殉教者を記念し続けてきました。4世紀頃からはある特定の日（復活節中のある日、または聖霊降臨最初の主日）に祝っていました。9世紀になって、教皇グレゴリウス4世はこの祝日を11月1日に移し、すべての殉教者から諸聖人にまで広げました。諸聖人は、神によって幸いとされたすべての人を指しています。

すると、福音朗読でイエスが宣言した幸いな人々も諸聖人に加えることができると思います。心の貧しい人々が、天の国を約束されました。さまざまな困難にある人が、イエスによって幸いな人とされました。「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」（5・10）と約束されました。

これらの人々もすでに神のもとで幸いな人々と呼ばれているのですが、彼らはきっと、同じような境遇にある人々のことを思い、神に取り次ぎを願っているのではないのでしょうか。

すると、わたしたちも多かれ少なかれ、心の貧しい人々、悲しむ人々、義に飢え渴く人々であり、迫害者にも柔和で憐れみ深く、心清らかに憎しみを抱かず、争うのではなく平和を作る人々であり、義のために迫害される人々のはずです。

ただ日常生活では罪な生活もあり、純粹にイエスの示された生き方を貫くことができずに悩みつつ歩いているわけですが、そのわたしたちを、同じ道を歩いて先に幸いな人々として神の至福のもとにある人たちが取り次ぎによって助けてくれるはずです。殉教者だけではなくすべての幸いと宣言された人々が諸聖人の交わりにあることを祝うのは、わたしたちにとって意義深いのです。

最後になりますが、来週8日（日）は上五島地区の堅信式です。今日の時点ですでに堅信組の2人は祈りと教えの試験を受け、合格していれば今週のリハーサルを経て大司教さまから堅信の秘跡の恵みを受けることとなります。

これまで、「なぜ堅信の秘跡が必要なのだろう」と思ったこともあるかもしれません。また、自分の周りで教会の教えと違うことをしたり人に勧めたりしているのを見て、「注意しなければいけないけど、注意する勇気がない」「どうして注意しなかったのだろうか」思うこともあったでしょう。

堅信の秘跡は、そんなあなたたちの信仰を強め、信仰を力強く証しするために聖霊の賜物を注いでくださいます。忠告すべきときにできなかったあなたに勇気の賜物を与えて、キリストの兵士としてくださいます。これまで信仰の面で「なぜだろう」と思っていたことに答えを与えてくれる。それが堅信の秘跡です。

この大切な瞬間もあと一週間と迫ってきました。祈りは試験に受かるために学んだものではありません。ぜひ習い覚えた祈りを今週一週間まじめに唱えて、すべての聖人方の取り次ぎを願いましょう。知恵と理解、判断と勇気、神さまを知り、神さまを愛し、神さまを敬う心を聖霊である神に与えていただけるよう、諸聖人の取り次ぎを願いましょう。



年間第 32 主日 (マルコ 12:38-44)

信仰は生活費を全部入れるだけの価値がある

年間第 32 主日、年間の主日もあとわずかです。この時期、11月の第 2 週は上五島地区で堅信式が行われます。わたしたちの小教区からも 2 人の受堅者が午後 2 時からの堅信式に臨みます。今週の福音朗読に触れながら、堅信の秘跡を受ける心構えについて考えてみたいと思います。

長崎教区は伝統的に、堅信の秘跡を受ける前に長い準備をします。わたしが子供の頃は堅信式が 3 年に 1 度回って来て、3 年かけてこの日のために準備していました。小学 6 年生から堅信組に加わって、中学 2 年生の終わりか 3 年生になった時に堅信の秘跡を受けていたと思います。

当時はカトリック要理という小さな本を暗記して、主任司祭の前に 1 人ずつ立たされて、学期ごと習い覚えた中から 10 問主任司祭が質問し、それに答えるという形でした。多くの人が経験したことですが、木の上に登ってセミが鳴くように大声で問答集を繰り返して覚えたものです。

中には、学校の勉強そっちのけで、カトリック信者は堅信のための勉強をしていました。今週の福音朗読にある金持ちの献金とやもめの献金の姿に似ています。わたしは頭がよかったので学校の勉強そっちのけで要理を覚えた経験はありません。有り余る才能の中から、少しだけ費やしたのですが、人によっては、乏しい中から、自分の持っている時間をすべて、昼間の時間全部要理の勉強につき込んだわけです。

わたしは最後の最後まで、勉強らしい勉強もせずに堅信の秘跡を受けました。小学 6 年生の時は、仲間がけいこに行く時間も東浦小学校の運動場で遊んでいて、仲間がけいこに行く時と帰る時は体育館の陰に隠れ、シスター小林三枝のけいこにはほとんど通わなかったのです。

いざ試験当日になれば、当時の主任司祭道向神父さまが 1 番目の人には 1 番 11 番 21 番 31 番と問題を掛けていることを見抜き、自分の順番を確認し、たとえば 6 番目なら 6 番 16 番 26 番 36 番だけをその場で覚えて、何食わぬ顔でその場をやり過ごしました。

中学からは神学校に入りましたので、故郷鯛ノ浦でのけいこも試験もおさらばとなりました。神学校では簡単な試験で準備が終わり、里脇枢機卿さまの鼻の下の長さばかり気になって堅信の秘跡を受けたのです。わたしの見たところ、枢機卿さまの鼻の下は 5 cm くらいありました。

そういう事情で、わたしは金持ちが有り余る中から賽銭箱にお金を入れるような勉強しかしていないので、本当の意味でやもめが乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れるような努力を、堅信組の時期に払ってきた方々の苦勞がいまいち理解できません。

けれども 6 年間この小教区で堅信組の中学 2 年生と勉強をしてきて、彼らの中にわたしが用意した祈りの口頭試験と教会の教えの筆記試験にすべてを投じて準備してくれた子供たちがいました。今になって堅信式のためにすべてを注いでくれた子供たちの努力がどれほど尊いものかを理解するようになったのです。

1人の子供は、祈りと筆記試験の合計が合格点の150点に到達せず、涙を流して「何でもしますから、堅信を受けさせてください」とすがりました。「何でもする」と言われて困ったのですが、この子が今日までどれだけ努力してきたか、わずかに届かずどれだけ困り果てているか、十分伝わりました。その子には「これから中学生の間だけでも教会に休まず来なさい」と言い含めました。その子は約束を守ってくれました。

堅信組になった中学2年生が、堅信式前の最終試験に真剣に取り組む姿を見ていて、今になって後悔することがあります。堅信組の時くらいしか、信仰生活の中で「自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた」という経験はできないのです。それなのに、わたしは片手間で堅信式の準備を終えてしまいました。神さまは、わたしがあの時自分の持っている物をすべて堅信の準備に充てなかった責任を取らせるために、司祭召命にわたしを導き、司祭叙階の時に「自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた」姿を要求したのだと思います。

今週の福音朗読のやもめの献金は、わたしたちへの忠告なのだと思います。やもめが神殿の献金箱に有り金全部入れた姿は、人生のある場面でわたしたちは自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れる決断をしなければならないのだと教えるための忠告なのです。

堅信式がまさにそうです。わたしたちはすべてを横に置いて、堅信組の時期に教会の教えを学びました。人生のある時期、堅信式という一瞬のために、長い準備を引き受けたのです。それは、信仰がどれほど価値あるものかを理解させるものです。堅信式は、わたしたちの受けた信仰が、「自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れる」に値することを教えてくれるのです。

わたしたちの中で堅信の秘跡を受けていない人はまずいないと思います。大学には、行ってない人もいるでしょう。しかし、どんな時代の人も、堅信の秘跡は受けたのです。そして堅信式の準備のために、「自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた」のです。

わたしたちはこの経験を、必ず次の世代、またその次の世代に受け継がせる義務があると思います。大学には行く人行かない人いろいろいるけれども、堅信の秘跡はカトリック信者であれば何をおいても受けるべきだし、「自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れる」それだけの価値があると、確信を持って伝える必要があります。中学3年生以上は、確信を持って伝えることができるはずです。

あなたの人生の中で、堅信組の時のように「自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた」時期が他にあるでしょうか。もしそれほどの努力を払ったのであれば、それは必ず語り継がなければなりません。今日堅信の秘跡を受ける子供たちとともに、信仰を確信を持って伝える恵みが与えられることを神に感謝しましょう。自分の言葉で、信仰は「自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れる」だけの価値があると、伝えることができるよう、ミサの中で聖霊の照らしを願いましょう。



年間第 33 主日 (マルコ 13:24-32)

キリスト者は再臨の日を信じて生きる

今週の福音朗読で、「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」その日について描かれています。これはイエスの再臨についての予告です。イエスの再臨について、わたしたちはどのように受け止め、今の暮らしをどのように結びつけていけばよいのでしょうか。考えてみたいと思います。

さて、相河（あいこ）という地区が新上五島町にあるのを皆さんご存知でしょう。ホテルで有名な地区ですが、ここにペンキで書かれた「キリストの再臨は近い」という看板があるのをご存知でしょうか。

おそらく車を運転する人しか、その看板に気付くことはできないと思います。お年寄りの方々も車で上五島病院に連れて行ってもらうついでに、看板をぜひ見せてもらってください。一見の価値があります。

あの看板、いったい誰が作ったのでしょうか。わたしも直接話を聞いたことはありませんが、少なくともカトリック関係者ではないと思います。もちろん上五島の司祭やシスターが「ここに看板を掛けさせてください」とお願いに行ったこともありません。

想像ですが、わたしたちのところたまにやって来て「聖書の話に興味ありますか」と言ってくる人たちが用意したものではないかなあと考えています。司祭館にも「聖書の話に興味ありますか」とやって来るので、わたしは「興味無いねえ～」とお断りしています。

いずれにしても、相河では年中「キリストの再臨は近い」のだらうと思います。カトリック教会は「キリストの再臨は近い」という公式見解を出していませんので、あそこを車で通るたびに、「キリストの再臨はいつごろなのですか？」と聞いてみたい気がします。

相河のキリストの再臨はさておき、イエスが語る「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」この再臨の時はわたしたちも十分意識しておく必要があります。まず、「再臨の日」は「希望の日」なののでしょうか。それとも「不安と恐怖の日」なののでしょうか。

再臨の日をどのように感じるかは、終末をどのように考えているかにかかってきます。終末を滅亡の時、破滅の日と考えているなら、キリストの再臨に不安と恐怖を覚えるでしょう。終末を救いの日、希望の時と考えているなら、反対に顔を上げて待つことができるはずです。

日本人の意識の中には、終末というと何か滅亡の時、破滅の日を思わせる要素があるように思います。さきほどの相河の集落で目にした看板も、日本人一般の終末思想を利用して、不安をあおって自分たちの新興宗教に引き寄せようとしている印象があります。

しかしキリスト教では、終末にたとえ破滅の要素があるにしても、救いを完成するためにキリストが再臨する日なので、希望に満ちているのです。終末にキリストの再臨が抜け落ちていたら、確かにその終末は不安と恐怖以外にないでしょう。ですがキリストを信じるわたしたちに

とっては、わたしたちを救いに来てくださるキリストの前に立つ日なので、信頼して待つことができるのです。

ここで皆さんは、「終末はいつなのだろう。キリストの再臨はいつなのだろう」そんな疑問を持つかもしれません。今週の朗読でイエスは「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである」（13・32）と言っておられます。だれも「その日、その時」を知ることはできません。わたしたちに必要なことは、「その日、その時までふさわしい生き方を保つ」ということです。

ふさわしい生き方とは、行き過ぎを避け、希望を保ち続けて生きることです。行き過ぎとは、「キリストの再臨は近い」と不安や恐怖をあおる生き方と、「キリストの再臨はやって来ない」という怠惰な生き方です。両方の生き方を避け、キリストの再臨のその日まで顔を上げて生きる。わたしたちにはそのような生き方が求められています。

わたしたちが、キリストの再臨を信じ、また「その日、その時」が救いの日となるという希望のうちに生きること、何が起こるのでしょうか。わたしたちの生き方が、多くの人々の希望となると思います。わたしたちの身近に、さまざまな苦難に遭い、しかもその苦難に希望を見いだせずにいる人々がさまざまいらっしやいます。

まだまだ若いのにというような年齢で病に命を奪われる人がいます。信頼していた人に裏切られ、すべてを失ってしまった人がいます。自分の記憶が少しずつ壊れて、周りの人といさかいが始まってしまう人がいます。社会的な罰を受け、償いの日々を送っている人がいます。こうした人々の中に、キリストの再臨を待ち望んで希望を失わずに生きている人はごくわずかです。

そうした人々ともしわたしたちが関わりあるのなら、わたしたちの生き方は彼らに大きな希望を与えたいと思います。どんな困難の中にあっても、キリストの再臨を待ち望んで希望を失わずに生きることができる。その生き方を知ったなら、困難の中にある人々も大きな影響を受けるに違いありません。わたしたちは自分のためだけではなく、関わりある人々のためにも、キリストの再臨を信じて生き、「その日、その時」に救いが訪れると希望して生きるのです。

「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」（13・26）すべてのキリスト者にとって、キリストの再臨の日は顔を上げて救い主を迎える日です。すべてのキリスト者が、キリストの再臨を信じて日々を生きていけますように。「その日、その時」を希望を持って待ち続けることができますように。ミサの中で恵みを願いましょう。



王であるキリスト (ヨハネ 18:33b-37)

真理に属する人は皆、わたしの声を聞く

王であるキリスト、年間最後の主日を迎えました。キリストはどのようにわたしたちを導くのか、わたしたちはどのように王の国民であることを証しすればよいのか、考えることにしましょう。

来週日曜日、故郷の鯛ノ浦教会で意義深いお祝いが予定されています。わたしの2年先輩の葛嶋神父さまの叙階25周年「銀祝」を記念するミサと祝賀会です。わたしも出席することにしています。

出席する第一の理由はもちろん先輩神父さまのお祝いのためですが、もう一つの理由は、自分自身2年後に銀祝を迎えることになるので、いろんなことを見て、持ち帰って来ようと思うからです。

銀祝の記念ミサの様子はもちろん、祝賀会でのプログラムも参考になると思っています。銀祝を迎えた葛嶋神父さまがどんなお話しをするのか、集まっている信徒の皆さんの熱意はどのようなものか、2年後にはどのように変化していると考えられるか、雰囲気を感じ取ってきたいと思います。

葛嶋神父さまは高校1年の時から小神学校に入学してきた編入組です。わたしは中学1年からの入学だったので、中2になった時に急に先輩が飛び越えてきた感じで戸惑いつつ小神学生時代を過ごしました。

郷里の鯛ノ浦教会で、わたしと葛嶋先輩は比較されていたと思います。わたしはどこから見ても続かないだろうと思われていましたし、先輩はどこから見ても神父さまになるだろうと思われていました。

でも先輩のよい模範があったから、わたしはこの道を進むことができましたし、折に触れて「こうじ」と下の名前で声をかけてくれ、いつも気にかけてくれた先輩でした。先輩が留学中にときどきFAXで近況報告などをしていましたが、やはり恩を感じていたのだと思います。

その先輩が25年を迎えて、喜ばしいなという思い以上に、感謝したい気持ちでいっぱいです。お互い大人ですから、何があっても受け入れることはできますが、先輩は最初から最後まで模範でいてくれました。人間ですから何かしらの噂が聞こえてきても不思議ではありません。ところが先輩の悪い噂は、わたしには何一つ聞こえてきませんでした。それはわたしにとって、曲がりなりにもここまで続けてくることのできた大きな支えだったと思っています。

福音朗読に移りましょう。ピラトは裁判の席でイエスと正面から向き合います。ピラトは権力者ですから、権力を脅かす人や、権力を争う可能性のある人には神経をとがらせていたでしょうが、イエスは権力者が気にも留めない生き方の人でした。ピラトとしては、イエスに全く興味がなかったと思います。

しかしイエスが「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの

世には属していない。」(18・36)と話し出したときには無視できなくなっただけだと思います。国を支配しているのであればそれは権力者のはずです。ピラトのほかに権力者がいるとなれば、処刑しなければと思ったわけですが、ところがイエスは権力者ではありませんでした。権力で支配する王ではなかったのです。イエスは、真理に基づいて導く王でした。

イエスが民を導くために持っていた真理とは何でしょうか。それは一般的な真理ではなく、イエス・キリストが語られた言葉を意味しています。イエス・キリストは御父から聞いた言葉を持っていました。御父の言葉は真理であり、わたしたちは真理であるイエス・キリストの言葉をよく聞き、真理を受け入れるために心を開き、悔い改める必要があります。

真理は人を強要したりしません、喜んで従う心を育てます。わたしも、良い先輩を与えられたので真理の素晴らしさが分かりました。真理を知ったなら、真理そのものであるイエス・キリストに従うようになります。先輩に無理やり従うよう強要されたのではなく、真理を知って歩く姿をわたしも見たので、どのように歩けばよいか分かり、自然と本来歩くべき道に従っていくことができたのです。

ピラトは裁判に立つイエスを見て、イエスが無実であることを理解します。しかもイエスが真理を持っていて、ピラトに態度を決めるように迫っていることも感じ取っていました。正しい道を選ぶことができる真の勇者であるなら、イエスに導かれ、イエスに聞き従うべきでした。しかしピラトは地上の権力者であり、手にしている権力がピラトの心を曇らせ、イエスの声に耳を傾けることができなかつたのです。

わたしたちもイエスの声に耳を傾ける必要があります。わたしたちは今日イエスによって真理の言葉を耳にしています。イエスが語る言葉、イエスの声がわたしたちを本当の幸せに導く真理です。キリストの言葉の中に留まる者だけが真理を知り、この真理によって罪から解放されます。

イエスの中に真理があると知った人が、イエスの導きに心を開いて日々を送るなら、そのような人々がそこそこに見られるようになるなら、イエスの国、この世に属していない国が実現し、広がっていくのです。

王であるキリストの祝日、真理であるイエスの言葉にわたしたちは耳を傾け、態度でこの祝日を祝いましょう。

わたしたちは真理によって導いてくださる王をいただく民であると、生活で証ししましょう。権力にひれ伏して生きる民ではなく、多数決で疑問に思いながらも流されていく民でもない、イエスのみ言葉に耳を傾けて生きる国民であると、チャンスがあれば声をあげましょう。真理に属する人が一人でも多く王であるキリストのもとに集まりますように、ミサの中で恵みを願いましょう。



待降節第 1 主日 (ルカ 21:25-28,34-36)

いつも目を覚まして祈りなさい

待降節を迎えました。カトリックの暦「典礼暦」はこの待降節から始まります。ですから典礼的には新しい年が始まり、主の降誕を待ち望む季節が始まったということです。待降節はラテン語で **adventus** と呼びますが、これは英語の **adventure**に通じる言葉です。つまり主の到来を、今か今かとワクワクしながら待つのが、待降節のよりよい過ごし方と言えるかもしれません。

おもしろい体験をしたので報告しておきます。2週間前の話です。カトリック教報の編集会議で日帰り出張した日、長崎で帰りの便を待っていたら韓国からの巡礼者かなという団体がたむろしてしまっていて、盛んに会話していました。わたしには「ハムニタ」「イモニタ」「ミギニセヨ」「ヒダリニセヨ」と言っているように聞こえました。

団体の中にシスターが混じってしまっていて、すぐに「この団体には司祭が同行しているに違いない」と直感しました。儒教の影響を多分に受けた国で、シスターが団長を務めるということは考えにくいからです。

しかしジロジロ眺めるわけにもいきません。船に乗る時点でも司祭の姿は確認できなかったのですが、結果的に思わぬところでわたしの読みは正しかったのだと証明されました。

船が奈良尾に到着し、タラップを降りてみると、「ようこそ」という横断幕が目飛び込んできました。新上五島町の職員なのかわかりませんが、桟橋で待っていた2人がいきなりわたしに近寄ってきて「アンニョンハセヨ」と声をかけてきたのです。

わたしはカトリック司祭が一般的に着用する司祭シャツを着ていたのだからすぐわかる格好をしていました。お迎えに来ていた人々は、団体の中で真っ先に司祭に敬意を払おうと思ったのかもしれませんが、それは理解できますが、そうだとでも日本人か韓国人かは区別してほしかったです。「アンニョンハセヨ」と勢いよく話しかけてきた人に「イイカゲンニセヨ」と言いたい気分でした。

わたしのところに飛んできた2人は、待ちに待った団体さまが到着して、おあつらえ向きの格好をした司祭が見えた。これは間違いないと思ったのでしょう。愛想のない態度で過ぎ去ってしまい、彼らにはかわいそうなことをしたなと思いました。

福音に戻りましょう。待降節でわたしたちが待ち望んでいるお方も、実は飛んで行って挨拶をしてもよいくらい尊い方です。わたしたちが待ち望んでいる方は、2つの形でその力と栄光を帯びておられる方です。

1つは、神が人となってわたしたちのもとにおいでになり、人類の救いに必要なことをすべて成し遂げてくださった方です。その救いの御業は2千年前にすでに成し遂げられました。この救いの御業によって、力と栄光を帯びておられます。

もう1つは、ご自身が成し遂げてくださった救いの御業を、完成さ

せるために再びおいでになります。救いは、実際にすべての人が救われることで完成します。わたしたちは救いの御業の完成のために力と栄光を帯びてこられる救い主という形でも待ち望むのです。

わたしたちが待降節を通して待ち望む方は、一方ではすでに救いの御業を成し遂げてくださった方ですが、他方では救いの御業を完成させるためにおいでになる方です。この二つの姿を重ねて待つことで、わたしたちは目を覚ましていいることができます。

「救いの御業は成し遂げられた。」このことだけを考えている人は、放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くなってしまいます。また「救いの御業を完成するために再びおいでになるのはまさか今ではないだろう。」そう考えている人も、心が鈍くなってしまいます。一方を思い描いて他方を顧みないなら、わたしたちは裁きを受けることになるでしょう。イエスの救いの御業の両面を忘れないよう心がけて日々を送る人、すなわちイエスの到来を正しく理解し、目を覚まして待つ人だけが、人の子の前に安心して立つことができるのです。

最後に、イエスは「いつも目を覚まして祈りなさい」と忠告します。

「祈りなさい」と付け加えたのを見落としてはいけません。わたしたちが神の勧めを立派に果たすためには、祈りが必要だということです。

「目を覚ましていいる」というと、自分で注意しておけば立派に果たせるように思うかもしれませんが、いつも神の助がそこには必要なのです。祈ることで、わたしたちは神の助けを常に求めることができます。

どこかでわたしたちは気を抜くことがあります。それを戒めるために、イエスは「いつも目を覚まして祈りなさい」と忠告しておられます。主の降誕を待つ待降節の期間に、心が鈍くならないようにと絶えず祈ることにしましょう。わたしたちを喜びで満たしてくださる救い主は、目を覚まして祈るその先で待っておられます。



待降節第 2 主日 (ルカ 3:1-6)

主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ

待降節第 2 主日は洗礼者ヨハネが現れる場面が福音に選ばれます。6 年も同じことを言っているのですが、さすがに覚えてくれていると思います。しかし、「洗礼者ヨハネ」と聞くと「悔い改め」を思い出してほしいと思います。今年の待降節、洗礼者ヨハネが悔い改めについて何を求めているのか、確認することにしましょう。

司祭黙想会の 5 月下旬頃でしたか、浜串教会祭壇の聖櫃を新調しようと思って典礼用品を扱う修道会に依頼をして半年が過ぎました。今年のクリスマスまでに、と思って注文した品物が届くのを楽しみに待っていましたら、どうやら注文した聖櫃は制作できないとお詫びの連絡が入りまして、12 月 8 日に再度注文し直すこととなりました。この聖櫃のために、寄付をくださった方もいました。ですから少しでも早く、聖櫃を新調して、喜んでもらいたいと思っています。

本当に首を長くして待っていますが、相手がある話なので、わたしがどんなに願っても願った通りになるわけではありません。もう一度注文すれば年内はもう諦めなければならないと思いますが、遅くとも復活祭までには、新しい聖櫃を聖堂に設置して、安心して浜串教会でのミサをささげたいと思っています。ご寄付くださった方々も、今しばらく辛抱して待っていてほしいと思います。

12 月 3 日、日本宣教の保護者聖フランシスコ・ザビエル司祭の祝日でした。わたしたちの小教区では福見教会が献げられた教会で、夕方でしたが福見教会のためにもミサをささげました。

直前の日曜日に、「福見の聖堂のお祝い日とも言える日ですので、都合をつけて参加してください」と呼びかけていたのですが、木曜日の夕方 5 時 15 分のミサではとても参加は難しいかなと思っていました。

ところが、都合をつけて参加してくださった方を見つけて、大きな慰めをいただきました。人数の多い少ないではなく、呼びかけを真剣に受け止めてくれたということですから、呼びかけは間違いなく届いたのだと思い、力づけられました。ありがとうございました。

さて福音に戻りましょう。洗礼者ヨハネが荒れ野で活動を始めます。神の言葉が、ヨハネの活動を方向付けます。預言者イザヤの書に書いてある活動です。「荒れ野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

これはイザヤ 40 章 3 節から 5 節の引用です。「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。谷はすべて身を起し、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れるのを／肉なる者は共に見る。主の口がこう宣言される。」

イザヤの時代には、「呼びかける声」の方向に生き方を変えることが、「呼びかける声」に答える道でした。イザヤの時代には必ずしも具体的ではなかったかもしれませんが、洗礼者ヨハネの時代にいよいよ声の主である神が、人となってわたしたちに現れたのです。この時から悔い改めは、具体的なものとなりました。

「呼びかける声に答えること」それは、イエス・キリストへと向きを変えて生きることです。呼びかける声、それはイエス・キリストであり、わたしたちはこの待降節に、おいでになる主に生き方を向け、イエス・キリストが向かうようにわたしたちも生き方を向けますと表明することを求められているのです。

どのような生き方を求められているか。3年前の説教を参考に示したいと思います。わたしたちに期待されているのは、イエス・キリストなしには物事が始まらない、そういう生き方です。朝、目が覚めた時にイエス・キリストなしに今日一日が始まらないと考えるなら、わずかでもいいから祈りをして一日を始めるはずです。

食事をしようというときに、イエス・キリストなしにこの食事は始まらないと考えるなら、食事の前に祈るはずです。こうして、イエス・キリストなしに物事は始まらないと考える人に、神の言葉が降るのです。

洗礼者ヨハネは、まだ見ぬ救い主キリストに率先して向きを変え、ヨルダン川に集まった人々にも同じ生き方を求めました。現代のわたしたちもまた、イエス・キリストなしには物事は始まらない。そのような生活を心がけるなら、社会に対してしるしとなることができます。そしてわたしたちを見て、だれかが主の道を知り、その道を歩き出すのです。

皆さんは、「主の道を備えよ」という聖歌をご存じでしょうか。できればこの聖歌を覚えて持ち帰り、日々心の中で歌い続けましょう。わたしも、周りの多くの人も、イエス・キリストに向きを変え、イエス・キリストなしに物事は始まらないと、言葉でも態度でも表明して生活しましょう。

わたしの生活は、主よ、あなたなしには始まりません。その思いを待降節中毎日この聖堂でささげながら、降誕の日を喜び迎えることができるよう、ミサの中で照らしを願いましょう。



待降節第 3 主日 (ルカ 3:10-18)

わたしたちはどうすればよいのですか

「群衆は、『では、わたしたちはどうすればよいのですか』と尋ねた。ヨハネは、『下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ』と答えた。」(ルカ 3・10-11) 今日わたしたちは2つの意味で、「わたしたちはどうすればよいのですか」と声を上げる必要があります。

1つは、「この待降節中に、わたしたちはどうすればよいのですか」ということであり、もう1つは、「いつくしみの特別聖年が始まりました。わたしたちはどうすればよいのですか」ということです。

ただし、答えを2つ探す必要はないと思います。今年の待降節中に、「いつくしみの特別聖年」が開年したのですから、わたしたちはただ1つの答えを見つけ出せばよいのではないのでしょうか。

10月の中旬、趣味のボート釣りで12kgのブリを「ぶりあげ」しました。イトヨリ釣りの、0.8号のPEに3号のリーダー3mの、晩のおかずが釣ればなあという仕掛けだったのです。住宅のブロック塀に使うブロックを2個、釣り糸にぶら下げたような重みが突然竿に伝わりました。格闘すること20分。嘘だと思ったらこの教会の玄関右の写真集、浜串教会聖堂の写真を貼り換えていますので、あとでご覧になってください。

個人的な話をもう少し。わたしは病院でコレステロール値を下げる薬と尿酸値を下げる薬を処方されています。ある時生活習慣病検診を受け、検査結果を見た先生がこう言いました。「どの数値も標準値の中に納まっています。いいですよ～。このままの生活を続けてください。」わたしは顔には出しませんでしたが、「このままの生活でいいのか～」と、心の中でニヤッとしていました。

「わたしたちはどうすればよいのですか。」もちろん、こんな答えでは全く答えになっていません。洗礼者ヨハネが「群衆・徴税人・兵士」という3つのグループに勧めを与えたように、わたしも今ここで、3つの例を示したいと思います。まずその前に、洗礼者ヨハネが示した3つの勧めをおさらいしましょう。

ヨハネが示した勧めは、どれも「悔い改めにふさわしい実を結べ」という共通の目標を形にしたものです。そして3つのグループを「一般の人々」「特殊な任務にある人々」「一般の人々にも特殊な任務の人々にも安心安全な生活を保障する任務にある人々」と考えるなら、そのままわたしたちにも当てはまってきます。

ではわたしたちの共通の目標とは何でしょうか。それは「いつくしみの特別聖年」のモットーである「御父のようにいつくしみ深くなりなさい」です。このモットーを、3つのグループ「一般の人々」「特殊な任務にある人々」「一般の人々にも特殊な任務の人々にも安心安全な生活を保障する任務にある人々」に当てはめてみたいのです。

ところで、モットーの「御父のようにいつくしみ深くなりなさい」

ですが、御父はどれほどいつくしみ深い方なのでしょう。それは、御自分の独り子を、人類に渡されるほどです。しかも二度もです。一度目は誕生の神秘において、二度目は十字架上の神秘においてです。

わたしたちが信じる神は全能ですから、不可能などありませんが、ただ一つ人間の心情で考えた時、わが子を明け渡すこと、これだけは不可能なことではないでしょうか。それを父なる神は二度も、最終的には十字架上で明け渡してくださったのです。この「あわれみの神秘」によって、神の全能が示されました。

ですから「御父のようにいつくしみ深くなりなさい」というのは、「全能の神が心を引き裂かれるほどの思いで示したいつくしみの模範に倣いなさい」ということではないでしょうか。この模範に倣うことがたやすくはないことは、だれがどう考えても明らかです。

わたしたちが御父に倣っていつくしみを示そうとすると、何の努力も骨折りもせず果たせるなどと思ってはなりません。御父のいつくしみをその誕生の瞬間から示してくださったキリストは、温かい産着にくるまっていつくしみを示したではありません。布切れに包まれ、飼い葉おけに寝かされた姿で示したのです。人類の罪を赦すといういつくしみを、華々しい舞台上で示したのではなく、十字架の上で示したのです。「どんな困難にあっても、わたしたちは御父に倣っていつくしみを示します。」そういう覚悟が必要でしょう。

そこで3つのグループのためにいつくしみのわざの例を示したいと思います。一般信徒の皆さんは、自分を傷つけた相手をゆるすことで、いつくしみを示してください。「ゆるせないと思うことが幾度もあることでしょう。けれどもゆるすとは、心の平安を得るために、わたしたちの弱い手に与えられた道具なのです。」（「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」9）

一般に「シスターや修道士」と言われる奉献生活にある人々は、「特殊な任務にある人々」です。イエスの「わたしに従いなさい」とのみことばにより深くとどまる生き方です。期間中、奉献生活にある方々には、「あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深い者となりなさい」（ルカ 6・36）のみことばにじっくり耳を傾けてください。「いつくしみがもてるよう、神のことばをまずじっくりと聴かなければなりません。」（「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」13）

神のことばをじっくり聴くには、十分な沈黙の時間が必要です。与えられたみことばに対して、まるで氷山の沈んでいる部分のような、一見不釣り合いとも思える沈黙の時間が必要なのです。幸い奉献生活者には生活に適度な沈黙の時間が組まれているので、より一層神のことばに潜心することができます。

奉献生活者の沈黙の時間は、教会共同体を動かすエンジンです。沈黙の中で神のことばに照らされ、温められたエンジンはいつくしみを世に示す教会共同体の働きを力強く前に推し進めてくれます。これまで以上に、神のことばに温められ、その熱をさまざまな歯車に伝えてください。

司祭にも、「御父のようにいつくしみ深くなりなさい」との呼びかけに自らを差し出すまたとない機会が与えられました。それはゆるしの秘跡においてです。「聴罪司祭であることは、イエスと同じ使命に参加すること、そして、ゆるしを与え救いをもたらす神の愛が、途切れることなく続いていることを示す具体的なしるしとなる（からです。）」（「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」17）

司祭は、痛悔者それぞれの心の中にある、救いを求める神への祈りと罪のゆるしの願いを、たちどころに理解する」（同 17）者でなければなりません。「要するに聴罪司祭は、いつでも、どこでも、どんな状況でも、何があろうとも、いつくしみの第一のしるしであることを求められているのです。」（同 17）

「わたしたちはどうすればよいのですか。」いつくしみの特別聖年期間中、一人ひとりが神のいつくしみを映し出す鏡になってください。イエス・キリストが御父のいつくしみのみ顔であったように、わたしたちも置かれた場所で、神のいつくしみを映し出す者になりたいと思います。

「あなたのいつくしみはどこから来るのですか。あなたはなぜ、何も当てにしないでいつくしみを示すことができるのですか。」もしこのように人々が問いかけてきたなら、あなたは最高に自分の使命を果たしている人です。そのとき人々は、あなたを通していつくしみ深い父を、またイエス・キリストを眺めることになるからです。



待降節第 4 主日 (ルカ 1:39-45)

エリサベトは声高らかに祝福した

待降節第 4 主日、ご降誕もいよいよ間近に迫りました。与えられた福音朗読はマリアがエリサベトを訪問する場面です。この中に出てくる「挨拶」について考え、ご降誕の直前の準備に充てたいと思います。

来年 2 月 20 日 (土) の夜と 21 日 (日) の昼に上演される信徒発見劇の舞台稽古がいよいよ始まりました。台本を 12 月初めにいただいて、「よーしセリフを覚えるぞ」と意気込んで台本を確かめました。セリフが 5 つ用意されていました。

「旦那様」「いえ、旦那様」「お許してください、旦那様」「はい、旦那様」「へい、旦那様」です。厳密には旦那様の後に続くセリフもあるのですが、ざっくり言えばこの 5 つのセリフということになります。今この 5 つのセリフを言う場面の、血のにじむような猛練習をしているところです。

まあ大げさな、と思うかもしれませんが、わたしの出番はほかにないわけですから、ここにすべてをかけてやっています。テレビドラマでは一言のセリフもない通行人もいます。前方からやってくる通行人と、後方からやってくる通行人とでは、顔が見えるか見えないかで別扱いだと聞いたことがあります。そこからすれば「旦那様」と 5 回言うだけでもたいしたものです。小教区の皆さんが、すべての予定を横に置いて劇を観に来るだけの価値があります。たぶん。

福音朗読に戻りましょう。わたしたちは聖書を日本語で読むので、どうしても日本語で出来事を理解しようとしています。けれども、聖書の出来事を日本語で理解しようとするとうまく内容を理解し損ねることもあるのです。もちろん聖書が書かれたもともとの言語であるギリシャ語で理解できれば出来事を正確に理解することができるでしょうが、一般の日本人にはとても無理です。

そこで、今回の朗読箇所に出てくる「挨拶」という言葉が、聖書のほかの箇所ではどのように使われているのか、そういうことも確認しながら出来事を理解しようとするなら、日本語の聖書であっても、より実際の出来事に近づく理解にたどり着けるとと思います。

聖書の挨拶ですぐに思いつくのは天使がマリアに神の計画を告げる場面 (ルカ 1 章 26 節から 29 節) です。「六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。』マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」

マリアは「いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」(ルカ 1・29) とあります。この例と、今週の朗読箇所を重ね合わせると、聖書の中での「挨拶」というのは、単なる儀礼ではなく、相手に対する「祝

福」が込められているようです。ですから今週の朗読箇所でも、「挨拶」という言葉を「祝福」という言葉に置き換えて考えてもよいかもしれません。つまり1章39節を「そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに『祝福』した。」そう読み替えてもいいかもしれません。

そうすると、マリアはエリサベトを祝福し、エリサベトはマリアを祝福し、たがいに祝福し合っている姿が浮かびます。「挨拶」と訳されてはいますが、日本の挨拶ではこのように祝福し合う様子を思い浮かべることはないのですから、聖書の世界の「挨拶」をわたしたち日本人の「挨拶」と受け取らないほうがよさそうです。

もう一つ、聖書の世界の「挨拶」に「聖霊の働き」を見ることがができます。祝福は人が人を祝福するわけではなく、ある人が別の人に神の祝福を願うものです。ですから人が挨拶に祝福を込めているとき、そこには神の愛である聖霊が働いているわけです。聖霊の働きに満たされてマリアは神の計画を受け入れ、エリサベトは間近に迫っている救い主の到来をほめたたえました。

わたしはこう考えました。わたしたちが聖書の世界の「挨拶」を積極的に取り入れるなら、救い主の到来はより多くの人に知られ、より多くの人に救いをもたらすのではないのでしょうか。わたしたちが人に祝福があるようにと願う挨拶を交わすなら、挨拶を送る相手も聖霊の働きに触れて、御子イエスを送ってくださった神に心を開くようになるのではないのでしょうか。

それぞれ、何ができるかを考えてみましょう。子供たちの世代に、教会から遠くなってしまった人々が身近にいるかもしれません。その人たちのために、わたしたちは祝福を願う挨拶ができるのではないのでしょうか。結婚をしてはみたが、結婚相手を教会に近づけるどころか、カトリック信者のほうが教会から疎遠になっているかもしれません。そのような子供たちに、祝福を願う挨拶ができるのではないのでしょうか。

聖書の世界の「挨拶」を交わす人々の上に聖霊は必ず働き、神の意志を分からせてくださいます。わたしたちが人を立ち返らせることは難しいかもしれませんが、祝福を願う挨拶を交わすことは必ずできるはずです。わたしたちもエリサベトに倣い、声高らかに言いましょう。人間を救う神の御計画は、すぐそこまで来ているのです。

主の降誕(夜半)(ルカ 2:1-14)



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

これがあなたがたへのしるしである

主の降誕おめでとうございます。今年のクリスマス、「しるし」として示された幼子イエスについて思い巡らすことにしましょう。与えられた朗読に「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」（2・12）とあり、乳飲み子が主の天使によって羊飼いたちに「しるし」として示されたのでした。

父である神はさまざまなしるしで、人間にご自分の愛をお示しになりました。年老いたアブラハムとサラ夫婦に、息子イサクを与えて生涯忠実に生きたアブラハムをいつくしんでくださいました。のちにイスラエルと呼ばれたイサクの子ヤコブの子孫たちは、モーセを通してエジプトから約束の地に導かれ、イスラエルの民が契約に不忠実になってもあわれみをお忘れになりませんでした。

数々のしるしの中で最後に現れた最大のしるしは、人間に父なる神の愛を完全に証するイエス・キリスト自身でした。幼子イエスは、父なる神が人間を愛しておられる確かなしるしなのです。人を仲介して神の愛のしるしを示したのではなく、神ご自身が決定的なしるしとなってくださったのです。

飼葉桶に眠る幼子は、聖霊が降り、恵みに満たされていたマリアからお生まれになりました。ここに三位一体の働きも見るができます。聖霊の働き、父なる神の愛、そしてしるしとなってくださった御子イエス・キリストです。人間の救いに無関心でいられない三位一体の神の神秘が明らかになりました。

羊飼いたちは「布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子」というしるしを見ましたが、もう少し踏み込んで考えてみましょう。「乳飲み子」というしるしは何を指し示しているのでしょうか。

父なる神はさまざまなしるしで人間に対する愛を示してこられたと話しましたが、目の前にいる乳飲み子は、神ご自身が声を上げてくださったというしるしではないのでしょうか。幼子の泣き声は、きつと静かな場所でも響き渡るに違いありません。そのように、人間の救いに無関心でいられない神が、いよいよご自分で声を上げられたということです。

誰の目もはばかり泣く乳飲み子。これが羊飼いの見た「しるし」だったのだと思います。人々から遠ざけられた誕生でした。産着もありませんでした。心地よいベッドもありませんでした。どんな悲惨な誕生であっても躊躇せず、人間の救いに声を上げてくださった。これが羊飼いに示された人間に対する神の愛の答えだったのだと思います。

では、わたしたちにとって馬小屋に眠る幼子はどんなしるしとなってくださったのでしょうか。それは、「必ずわたしたちを救う」というしるしだと思います。どん底に置かれている人も、お先真っ暗の闇にある人も、必ず救う。その声を今、大声で上げてくださっているのです。

救い主の誕生に、この世はほとんど何の準備もしていませんでした。それでも父なる神はやむにやまれぬ思いで独り子を与えてくださいました。「人間の救いに無関心でいられない」と、救い主は声を上げてくださいました。わたしたちは近づいて、その声を聞きましょう。そして救い主の「必ずわたしたちを救う」という声をより多くの人に届けましょう。クリスマスを通して、神がどれほど人間を愛してくださったか、すべての人が理解できるように、このミサの中で願ひましょう。

主の降誕(日中)(ヨハネ 1:1-18)



主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

わたしたちは皆、恵みの上に、更に恵みを受けた

あらためて主の降誕おめでとうございます。夜半のミサの朗読を一枚の絵と表現するなら、日中のミサの朗読はその一枚の絵の解説のようなものかもしれません。今年のご降誕日中の福音朗読から、「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。」（1・16）に注目したいと思います。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」（1・14）救い主誕生の場面は、「恵みと真理とに満ちていた」のです。どれくらい満ちていたのでしょうか。それは、全人類の救いを成し遂げて余りあるほどだったのです。

わたしたち人間社会は、あちこちで戦争や暴動が繰り返されています。そうした大がかりな揉め事でなくても、事件や事故があり、身の回りでも心が滅入ってしまうような話題に事欠きません。

神が人となってくださったという驚くべきわざは、それらすべてのことを超越する恵みと真理に満ちているのです。どんなに闇が暗くても、どんなに谷が深くても、闇を照らし、谷を埋めることのできる恵みと真理が救い主の誕生にはあるのです。

しかしこの世は、みことばを認めませんでした。自分の民のところへ来たのに、民は受け入れませんでした。神が御子をお与えになるという最大の愛を示してくださったとき、神が見たこの世は、これ以上ない暗い闇に見えたことでしょう。

それでも神はこの世を見捨てませんでした。世の闇がどれほど暗くても、闇に光をもたらし、すべての人を照らします。神が独り子をお与えくださったと信じるわたしたちは、先に神に照らされた人です。「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。」ヨハネ福音記者の証言の通りです。

わたしたちは神が与えてくださった計り知れない恵みを、人々に届けに行く使命があると思います。人々に語りかけてください。「抱えている闇はいったい何ですか。突き落とされ、もがいている谷は何ですか。」そして解決の糸口は御子イエス・キリストですと告げ知らせてください。神は独り子をお与えくださいました。イエス・キリストは、どんなに暗い闇をも照らし、どんなに深い谷も埋めて平らにしてくださいます。

わたしたちも、さまざまな暗闇を見たかもしれない、深い谷底でもがいたかもしれない。わたしたちはそのたびに教会に来て恵みにあずかり、闇を照らし谷を埋める方に触れてきました。この体験を、一人でも多くの人に届けに行きましょう。イエスはわたしたちが届けに行きやすいように、小さな姿で、幼子の姿でおいでくださいました。



聖家族 (ルカ 2: 41-52)

わたしたちにとってのエルサレムへの道

聖家族の祝日、与えられた福音は神殿での少年イエスの物語です。両親と少年イエスがエルサレムへ旅をして、いったん両親がイエスを見失い、再会するまでに三日間を要しました。この「両親と離れていた三日間」について、思いを巡らせたいと思います。

子どもの成長には目を見張るものがあります。6年間子どもを見てきまして、小学3年生で侍者を始めた子にある時「だめじゃないか」と叱ったところ、しくしく泣いていたのが、今は立派な中学生です。

上五島地区の教会対抗ドッチボール大会、ある年はブロックの準優勝の栄誉に輝きましたが、子どもたちが一戦一戦たくましくなり、一日のうちに成長が手に取るように分かりました。ときには小学生に過ぎないと思うこともあります、驚くような速さで成長するものです。

少年イエスについても、同じことが言えるのではないかと思います。両親が少年イエスを見失った三日間、この時間は少年イエスにとって急激に心の成長を遂げた時間だったのではないかと思います。イエスには神の独り子としての使命が待っています。十二歳の時に鞭打たれて十字架に磔にされる必要はありませんが、近い将来、重い使命が待ち受けていることは確かです。

物語の描き方をよく注意して読み返すと、両親のヨセフとマリアがどのような気持ちでエルサレムに上ったかがわかります。2章42節に「両親は祭りの慣習に従って都に上った」とあるのです。両親にとってはエルサレムへの旅は、見倣うべき慣習としての意味合いだったようです。

少年イエスはどうだったのでしょうか。イエスにとってエルサレムへの旅は、御自分の使命を自覚する旅だったと思います。エルサレム神殿には特別な場所があり、そこには神がとどまっておられると両親から教えられていたことでしょう。するとエルサレム神殿を目指す旅は、父である神に会いに行く旅でもあったわけです。

実はルカ福音書全体が、救いのわざを完成させるエルサレムへの旅と言ってもよいのですが、いよいよエルサレムに来たとき、もっと父である神と親しく語りたい、御父の御心を知りたいという思いに駆られたのではないのでしょうか。

当然、祭りの慣習としてエルサレムに上ってきた両親と、御父と親しく語りたいという思いが増した少年イエスとでは、別の道を歩み始めることになったわけです。両親はナザレに帰るといって道を選び、少年イエスは御父のもとにとどまるという道を選びました。

道が違っていれば、どちらかが他方の道に合流しなければ相手を見つかることはできません。両親はもと来た道を歩いてエルサレムに戻り、少年イエスが選んだ道に合流したのです。しかしそれでもなお、イエスがこの三日間で選んだ道がどのような道なのかは理解できなかったのです。

「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」(2・48) 両親は少年イエスを、自分たちが歩いている道の途中にいるものだと探しました。祭りの慣習に従ってエルサレムに上る、慣習を果たせばナザレに戻る。その道の上に少年イエスはおられなかったのです。

少年イエスは、三日間で御父の御心を歩むという道をはっきり自覚したのだと思います。どんな苦難が待ち受けているかは別として、御自分が歩くのは両親が歩く道から、御父が示される道へと一段階上がったということです。三日間で、そこまで少年イエスは成長したのだと思います。

「しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。」(2・50) 今は分からなくても、マリアはのちにイエスが歩く道を理解します。イエスが歩いている道に合流します。それはエルサレムへの道で、しかも十字架へと続く道でした。たとえ今は理解できなくても、「母はこれらのことをすべて心に納めていた」(2・51) のです。

わたしたちも、聖家族がたどった道をたどる者です。両親が自分たちの道連れの中にイエスがいるものと思っていたように、イエスを自分たちの道の途中に探そうとしますが見つからないことも体験するでしょう。そのとき驚き慌てるかもしれませんが、イエスを探すためには、イエスが歩いている道、イエスがたどっている道にわたしたちが合流しなければならないのです。

少年イエスはエルサレムでの三日間で、御自分の道を理解しました。もしわたしたちが道に迷っているとしたら、イエスが見つけれずに迷っているとしたら、わたしたちは道を選びなおす必要があります。今歩いている道を放棄して、今の生活を放棄して道を選び直すのではなく、わたしの生活の中のどこかに、きっとイエスが歩いている道がある。その道に合流するように、生活を整えるのです。

最近の車には道案内をする道具が用意されています。道を逸れると、何度も計算し直して別の道を示してくれます。わたしたちの人生もそのようなものです。イエスが歩いている道に、何度も計算し直して合流する。その積み重ねが、わたしたちにとってのエルサレムへの道だと思います。